国立大学法人豊橋技術科学大学

グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)

国際協力センター (ICCEED)

国際交流センター (CIR)

国際教育センター (CIE)

2015 年度（平成 27 年度）活動報告書

Annual Report - Fiscal Year 2015

Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE)

Toyohashi University of Technology

International Cooperation Center for Engineering Education Development (ICCEED)

Center for International Relations (CIR)

Center for International Education (CIE)

目　次

■　グローバル工学教育推進機構長　挨拶 …… 1

国際協力センター（ICCEED）

■　国際協力センター長　挨拶 …… 5

1. 国際協力センターの概要 …… 6

2. 国際協力センターの平成27年度活動内容（全般）…… 7
⑴　国際協力センターを取り巻く事業環境の変化
⑵　国際協力センターの実施体制
⑶　国際協力センターの事業戦略・活動方針

3. 国際協力センターの平成27年度活動内容（個別）
3.1　政府開発援助（ODA）事業の実施（受託）を通じた活動 …… 11
⑴　産学官連携による知的クラスター振興（JICA 課題別研修）
⑵　ASEAN 工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）留学生受入、教員派遣
⑶　マレーシア日本国際工学院（MJIIT）
⑷　ハサヌディン大学工学部　研究・連携基盤強化
⑸　モンゴル工学系高等教育支援
⑹　アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成（PEACE）
⑺　アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ
（ABE イニシアティブ）
⑻　インドネシア・ソロク市浄水技術改善事業
（JICA 草の根技術協力）
⑼　JICA中部短期インターンシップ
⑽　産学官連携によるインドネシア産業人材構想

3.2　本学独自の事業 －ODA事業を通じて構築した海外教育機関・研究所との連携事業－ …… 21
⑴　インドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニック（EEPIS）
教育高度化支援

3.3　実施体制・基盤整備 …… 22
⑴　『国際戦略 2014-2015』策定
⑵　海外奨学金調査
⑶　大学間交流協定管理（連携活動の促進、交流協定管理）
⑷　海外事務所運営・管理
⑸　スーパーグローバル大学創成事業

4. 国際協力センターの平成28年度活動計画・方針概要（全般） …… 30
⑴ 全体方針
⑵ 個別活動

5. ICCEED運営協議会 …… 31

6. ICCEEDスタッフ一覧 …… 32

国際交流センター（CIR）

■ 国際交流センター長　挨拶 …… 35

1. 教育活動 …… 36
⑴ セミナー
⑵ 集中講座
⑶ 日本語研修コースⅠ
⑷ 日本語研修コースⅡ
⑸ Basic Japanese

2. 留学生相談・支援 …… 39
⑴ 留学生相談
⑵ 履修相談会
⑶ 学業相談会
⑷ 留学生のための就職支援
⑸ 留学生のための日本語能力試験等説明会
⑹ 安全講習会（自動車等の運転）
⑺ 留学生引っ越しセミナー

3. 留学生交流 …… 41
⑴ センター主催行事一覧
⑵ 国際交流デー
⑶ 留学生学外研修
⑷ 地域交流

4. 国際交流 …… 43
⑴ ニューヨーク市立大学クイーンズ校学部生受入プログラム
⑵ 高校生招へいプログラム（受入）
⑶ 国際研修プログラム（受入）
⑷ インドネシア Insantama 高校受入
⑸ 対日理解促進交流プログラム　インド大学生訪日団受入
⑹ 特別推薦入学者等の海外研修（派遣）

⑺　対日理解促進交流プログラム　KAKEHASHI プロジェクト（派遣）

5. 資料 …… 47

ー在学留学生状況

⑴　外国人留学生受入状況

⑵　外国人留学生宿舎状況

⑶　奨学金受給状況

ー国際交流センター状況

⑴　CALL 教室および自習室利用状況

⑵　平成27年度に導入した主な教材

⑶　行事一覧

⑷　スタッフ出張報告一覧

6. CIR スタッフ一覧 …… 53

国際教育センター（CIE）

■　国際教育センター長　挨拶 …… 57

1. プログラム …… 58

⑴　海外実務訓練（グローバル人材教育システム）

⑵　教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期FD）

⑶　職員グローバル人材育成力強化プログラム（短期SD）

⑷　海外同窓生会議・交流会

2. 国内会議 …… 69

⑴　国際教育センター（CIE）会議

⑵　三機関連携・教育改革推進室会議

⑶　三機関連携・海外キャンパス共同設置準備室・FD 等検討部会・
海外展開検討部会・（グローバル部会）合同会議

⑷　国際教育センター運営協議会

3. マレーシア教育拠点（ペナン校）の活動 …… 70

⑴　所在地

⑵　TUT-USM協議会

⑶　The 3rd International Conference of Global Network for
Innovative Technology（IGNITE2016）

⑷　ペナンだより

4. その他 …… 88
⑴ 小林誠先生（ノーベル物理学賞受賞）ペナン講演会等
⑵ USM 2nd Ambassadors Summit 2015
⑶ TORAY-USM Knowledge Transfer Centre 開所式

5. CIE スタッフ一覧 …… 90

IGNITE の取り組み

1. IGNITE セミナー …… 93

2. IGNITE オープンフォーラム …… 96

3. オープンキャンパス …… 98

4. IGNITE 委員会委員・IGNITE 構成員・国際課職員 …… 99

挨　　拶

豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構長
井　上　光　輝

経済や情報のグローバル化が進み、技術科学の分野でも国際的な競争に挑むことができるグローバル人材の育成が求められる時代になりました。そのような中、大学に対しても教育環境の国際化や、海外研究機関との協力を通した研究力の向上が求められています。本学ではこれまでもアセアンを中心とする国々との連携を通して国際化を推進して参りましたが、2013年10月にグローバル工学教育推進機構（IGNITE: Institute for Global Network Innovation in Technology Education）を設立し、学内の国際関係の組織を集約することにより、国際化を更に強力に推し進める体制を整えることになりました。IGNITE は、国際協力センター、国際交流センター、国際教育センター、およびマレーシア教育拠点（ペナン校）を統括し、グローバル化を推進することを目的とする組織です。本学ではこれまで留学生の受入れと獲得に関する業務を国際交流センターが、工学教育分野における国際協力活動を国際協力センター（旧工学教育国際協力研究センター）がそれぞれ担当して来ましたが、この度、日本人学生の国際化のための教育プログラムを構築することを目的とする国際教育センター、世界的な視野を持つグローバル技術者を育成するための基盤施設であるペナン校を新設することにより、本学の国際競争力の強化とグローバル人材の育成を一元的に担う組織体制を構築致しました。

特にペナン校は文部科学省の「国立大学改革強化推進事業」である三機関（本学、長岡技術科学大学、国立高等専門学校機構）連携事業により、成長著しいアセアン地域の一つであるマレーシアに教育拠点として設置したものです。日本人学生を現地で教育することにより、世界的な視野を持つグローバル技術者を育成することを目指しています。ペナン校を拠点とした日本人学生の教育はグローバル化の観点から一つのモデルケースとなり得るでしょう。

さらに、本学メインキャンパス自体のグローバル化として、スーパーグローバル大学支援事業での様々な取り組みもあります。例えば、グローバル技術科学アーキテクトの育成コースの新設や、その教育の場としてのシェアハウス型学生寮の建設、あるいは学部・大学院を通じたバイリンガル講義の展開など、IGNITE が深く関わる取り組みが多く行われています。

世界的な競争が激化する中、我が国の大学には競争を勝ち抜く力を付けることが求められています。そのためにはグローバルな環境での競争が特別なものでなく、日常的なものである状況を作り出す必要があります。このような状況を作るには、それを牽引していく組織と何らかのきっかけが必要です。Ignite には「着火・発火」という意味があります。IGNITE は本学のみならず、我が国の高等教育におけるグローバルな環境づくりの着火剤になることを目指して、今後の活動に取り組んでいきたいと思います。

国立大学法人豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構（IGNITE）
国際協力センター（ICCEED）

International Cooperation Center for Engineering Education Development (ICCEED),
Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE),
Toyohashi University of Technology

センター長　挨拶

豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構
国際協力センター長
穂　積　直　裕

今日の社会の急速なグローバル化を背景に、地球規模での資本や情報、製品や労働力の移動が、従来の国と国との関係を越えて、大きな流れで起こっています。この著しい変化は、我が国の産業を牽引する先導的日本人技術者に要求される資質に大きな変革をもたらしています。

その要求に応えるグローバル技術者、すなわち、グローバル社会の多様性を理解し、異なる文化・価値観を持つ人々と共に課題を共有し、社会との接点の中で技術を捉えて課題を分析するとともに、解決策を創造し、判断と意思決定を行い、具体的なもの作りに導く、実践的創造的かつ指導的技術者を育成することが求められています。また、研究活動の面からは、融合研究を軸に世界トップレベルを目指すため、研究者の多様化・多国籍化を進め、発想の多様性を向上させる必要があると考えます。

これらの実現に向けて、例えば外国人留学生を出身国の発展に貢献する人材として教育することはもとより、互恵関係を基調として我が国産業の発展や社会の国際化にも貢献できる人材として活躍してもらうことが重要です。帰国後も関係を継続し、双方が抱える多様な課題について協働して取り組む上では、個人を超えた組織的な繋がりを深めることが不可欠になってきます。国際協力は、そのような教育・研究のグローバル化を進める上で重要な手段の一つです。本学では効果的な事業を形成し、積極的に取り組んでいます。

このような背景の下、 平成27年度は、 関連部局の協力を得て前年度に策定した「豊橋技術科学大学国際戦略」のもと、国際協力センターのミッションとなっている

1. 国際協力諸事業の企画、獲得、実施、推進
2. 海外の教育研究機関との連携強化及び新たな連携先の開拓
3. 大学交流協定等に係る包括的業務
4. 海外の連携機関に対する高度化支援

をさらに強力に進めるべく活動を行いました。協力の対象となる国・地域も大きく拡がりつつあり、これら国際協力を通じ、本学の「多文化共生・グローバルキャンパスを有する大学」という将来像に向け着実に前進していると認識しております。その具体的な内容を、平成27年度の活動報告として取りまとめました。この先の新しいミッションの遂行にあたり、引き続き当センターへのご理解とご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

1. 国際協力センターの概要

本学は1976年の開学以来、「大学の国際化」を重要なテーマの一つとし、その一環として工学教育・研究の国際協力に尽力してきた。その取り組みが評価され、文部科学省によるわが国各分野における国際教育協力センター設置構想 の実現に際し、工学分野については平成13年４月に「工学教育国際協力研究センター（International Cooperation Center for Engineering Education Development: ICCEED)」が本学内に設立された。以来、工学分野・国際協力プロジェクトの開発研究、国際協力人材の育成、オープンフォーラムやセミナーによる課題検討／情報提供を通じた理解促進等、様々な活動を展開してきた。

その後、平成16年 ４月の大学法人化を経て、平成22年４月、ICCEED は従来の目的に加えて、「本学の国際的な連携・交流を促進し世界に開かれた大学への展開を推進する」、との新たな目的を併せ持つこととなった。更に、平成25年10月には本学の「国際競争力の強化」と「グローバル人材の育成」を一元的に担う組織として「グローバル工学教育推進機構（IGNITE)」が設立され、ICCEED は「国際交流センター（CIR)」、「国際教育センター（CIE)」、「マレーシア教育拠点（ペナン校)」とともに IGNITE を構成する学内組織である「国際協力センター（英文名称としては ICCEED を継承)」へと再編された。

この際、ミッションが再定義され、本学の国際戦略目標（平成27年３月23日に「国際戦略2014-2015」を制定）及び国際貢献の実現のため、国内外の多様なパートナーとも連携し、大きく以下の４つの活動を効果的に進めていくこととなった。

活動の柱	1. 国際協力諸事業の企画、獲得、実施、推進。
	2. 海外の教育研究機関との連携強化及び新たな連携先の開拓。
	3. 大学交流協定等に係る包括的業務。
	4. 海外の連携機関に対する高度化支援。

2. 国際協力センターの平成27年度活動内容（全般）

（1）国際協力センターを取り巻く事業環境の変化

【ポイント】
①1990年以降、活発であった本学の国際協力・貢献活動は、2000年に入り、大学を取り巻く環境・社会状況の変化を受けて質的・量的に変化。教員個人の関心・熱意に基づく参画から、大学の組織的な取り組みへの転換期にあると考えられる。
②国際協力・貢献活動の担い手である教員の理解、インセンティブにも変化。自らの教育・研究活動との関わりにおいてメリットを判断し、教育・研究活動の延長上に捉えられることが参画の前提となる。
③ICCEEDでは、啓蒙的な活動や協力スキームの紹介等を積極的に行うことにより、教員の理解・関心を促進。事業の成果発現と大学・教員のメリットが同時に成立する取り組みへの転換を念頭に活動。

上記 1. の ICCEED の組織的な変遷は、特に1990年代後半から2000年代初頭に生じた、大学に求められる役割の変化（グローバル化の進展に伴う世界市場の競争環境変化に対応するための「知識創造・蓄積の場」としての大学への期待)、及びわが国高等教育政策の変化（規制緩和、市場原理の導入～国立大学法人化、等）に連動している。この間、大学による「国際協力・貢献」は、「教育」と「研究」に次ぐ第三の使命としての「社会貢献活動」の一側面として認識されるようになってきた。また、政府開発援助（ODA）政策における2003年 8 月の改訂版「ODA 大綱」の中でも、国民参加型援助を推進する主要な主体の一つとして大学が位置付けられた。

本学は、1990年以降、インドネシアの高等教育開発計画事業（HEDS プロジェクト）を皮切りに、他大学に先駆けて活発な国際協力・貢献活動を行ってきた。これらの取り組みは、協力対象国・大学・人材（特に教育行政関係者、教員など）との関係強化を促し、そのような人的関係・ネットワークを基に更なる留学生の受け入れ、共同研究の立ち上げに繋がっていった。そして、受け入れた留学生は本学の国際化を牽引する存在となった。国際協力・貢献活動のポジティブなインパクトがあったと言える。当時は、国際協力に強い関心を有する教員グループが存在し、教員の裁量で積極的な貢献が実現出来た側面があった。

一方、その後、大学の国際協力・貢献活動を取り巻く環境は大きく変化している。運営費交付金が段階的に削減される一方、競争的資金を継続的に獲得する必要が生じ、更に、大学･教員の評価も「研究」、「教育」における活動・成果を軸にシステマチックに行われており、「研究」「教育」以外の活動に多くの時間を割く余裕がなくなっているのが現状である。また。教員個人が国際協力への関与を判断することは従前に比して難しい環境・状況となっており、これらの結果から、教員が国際協力に対して積極的な姿勢となり得ない環境がある。どの（ような）事業に取り組むべきか、どの程度の資源を投入すべきか、といった判断は、大学としての方針・戦略に基づき、経営的・中長期的視点に照らして組織的に行うことが不可欠となっている。

そのような観点からすれば、平成27年度現在、本学の国際協力・貢献活動は、全学的に理解を得た、戦略に基づく最適化された取り組みに進化する途上にある。「豊橋技術科学大学国際戦略 2014-2015」が策定され国際協力に対する本学の方針、戦略が明文化された。ただし、それを全学的に、或いは個々の事業として実践するための意思決定や実施体制を構築するメカニズムの確立までには試行錯誤を通じ

た経験と時間が必要と考える。国際協力は少なからず手間暇がかかる現実があること、また、参画する教員自身が国際協力を理解し、意義を感じないと協力の成果を発現することは難しい。このことから、教員に対して国際協力及びその意義について理解を深めてもらうことと、メカニズムの構築は足並みをそろえて行う必要がある。

学内の多くの教員にとって、国際協力に参画することの大学にとって意義や教員自身にとってのメリットを認識できない背景としては、①本学は工学技術の研究が中心であり、多くの教員にとって研究テーマが開発途上国に無いこと（農学や疫学の研究者と異なる部分）、②国際協力・貢献活動に従事することへの評価が確立していないこと（研究・教育活動への評価とは異なる）、③時間的負担への懸念があること（本来業務としての研究・教育活動等への影響、派遣される場合の講義や会議等への影響等も含め）等が挙げられる。

本来、大学が国際協力事業に取り組む効用としては、①大学自身が社会貢献活動の実践を通じて社会的な役割を果たすことがアピール出来るほか、②開発途上国側のカウンターパート（教育・研究機関）とのネットワーク構築を通じた留学生受入･共同研究の促進、また、③途上国をフィールドとする研究･教育活動へのフィードバック、更に、④学生の参加が可能な場合にはグローバル人材育成の場としての活用等が期待出来る、など様々である。

国際協力活動に対する評価の問題や時間的な負担については大学として改善を検討していくべき課題もあるが、ICCEED としては、上記の事業環境・学内状況を踏まえて、大学・教員双方にとって魅力的でインセンティブが働き、研究・教育活動とも両立する、もしくはそれらをより促進するような「国際協力・貢献活動」の形成・獲得・参画を推進し、海外の教育研究機関との連携も強化する等を通じて更に関係者の理解を促進するような、「好循環」への転換を念頭に取り組んでいる。

（2）国際協力センターの実施体制

【ポイント】
①平成27年度は前年度同様の人員体制。
②国際協力・貢献活動の実施に際しては必要に応じ学内ワーキンググループを形成（海外高等教育機関高度化支援協力推進部会）。
③重点交流対象国における大学・研究機関との教育・研究交流を促進するため、対象国ごとに関係が深い学内関係者を組織化（インドネシア部会など）。

ICCEED は平成27年度、昨年度に引き続き、専任教員 4 名、兼務教員 4 名、客員教授 1 名、事務職員 2 名の体制で事業を実施している（関連事務主管課：国際課）。なお、「スーパーグローバル大学創成支援事業」（文部科学省）の採択（平成26年 9 月）に伴い、「スーパーグローバル大学創成事業推進本部」及び「同事業推進室」が設置され、ICCEED 副センター長が「副本部長」および「推進室長」を兼務。関連業務は同推進室において実施している。

ICCEED の運営は、「国際戦略本部会議」における戦略、諸問題への対応に関する協議を踏まえ、「グローバル工学教育推進機構委員会（IGNITE 委員会）」でその方針（予算、事業計画、事業評価）が審議・承認されるとともに、主幹／関係省庁、関係機関、大学等の外部有識者による「運営協議会本会」において、基本方針、その他の事業実施に係る重要事項が審議される。

本学の国際協力・貢献活動の実施に当たっては、ICCEED の限られた専任教員・スタッフによる実施

体制下で効率性･効果性を確保し、事業成果を最大化するため、規模に応じて事業毎のワーキンググループを形成し、各系及び事務部門からの参画も得て、連絡・調整を行う体制を確保することとしている。

重点交流対象国については、順次、国毎の枠組みをIGNITE内に整備し、ICCEEDが事務局的な役割を持ち、関係する教員間の連携促進・情報共有を図っている（平成26年度までにインドネシア部会を立ち上げ済み)。また、大学間交流データベースを構築、試験的な運用を開始した。

＊現在の主な重点交流対象国：インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、メキシコ、インド、ロシア等

（3）国際協力センターの事業戦略・活動方針

【ポイント】

①本学の行う「国際協力・貢献活動」は、事業規模の適正さ（教員人数、各教員の負荷の最小化を配慮）とインパクト（必要十分な成果発現）を確保しつつ、選択的に実施することが重要。

②新規事業の獲得・実施に際しては、事業形成の上流段階から積極的に関与することで本学（教員）のメリットを十分に確保し、持続可能な事業とするよう考慮。

③重点交流対象国における大学・研究機関との教育・研究交流を促進するため、国毎の学内関係者の組織化を実施（インドネシア部会など)。

④国際協力・貢献活動はICCEEDを学内における一元的な窓口・事務局機能として、各系（研究科・学科)・事務部門との連携により実施。学内での理解促進も考慮。

教員230名規模の工学系単科大学である本学が国際協力・貢献活動を行う上では、教員の研究・教育活動への負荷を最小限にとどめることを前提条件として、協力のインパクトが大きな事業、もしくは本学が継続的に関わっている（関わってきた）事業を発展させるような位置付けとなる活動を選択的に実施していくとの視点が不可欠である。そのため、国際協力機構（JICA）をはじめとする外部機関との連携を強化し、本学としての意思決定にとって必要十分な情報の収集を行うとともに、可能な限り事業の計画･形成段階（上流段階）から検討枠組みに参加することを通じて適切な事業への参画を果たし､ミッションの実現を図ることとしている。

学内においては、国際協力・貢献活動の事務局的機能をICCEEDが一元的に担い調整機能を果たすことで学内の最適な事業実施（協力）体制を構築することを念頭に取り組んでいるところ。国際協力事業としての成果を発現させることはもとより、本学としても国際連携関係強化等の国際戦略上の目的を兼ねて実現するような活動とすることが基本的に不可欠であり、それなくして学内の理解・共感は得られず持続可能な活動とはならないものと認識する。

一方、本学が国際協力・貢献活動を行う必要性や、ICCEEDの役割・活動内容について、学内関係者の多くから十分な理解・関心・共感を得られているとは必ずしも言えない状況にある。これまでに国際協力・貢献活動に関わった現職教員は全体の約1割程度に留まっている。世代交代により、本学の開設当初から情熱を持って国際協力を推進してきた教員の多くが退官を迎え大学を去りつつある。先人達の苦労は傍から見て理解できても、国際協力を通じて得た有形無形のアセットは当事者でないと理解できない。例えば、途上国からの留学生の受け入れ等、可能なレベルから国際協力を多くの教員に経験してもらい、そのメリットも実感してもらうことが重要と考える。

以上の問題認識に基づき、ICCEEDでは平成27年度、事業毎の実施体制を迅速かつ適切に構築し、学内協力を得られるよう努めるとともに、従来以上に学内広報活動を拡充させることに注力してきた。平

成28年度以降も引き続き、本学／教員の理解を（どのような負担が発生すると見込まれるのか、一方で期待されるメリットについても分かりやすく提示するなどにより）促進し、教員が自らの関心・特性に照らして効果的に関与出来るような仕組みを構築していく。他方で、世界の変化は著しく、これまで高度な工学教育や研究を国際協力の対象とするには時期尚早な途上国が多くあったが、課題を抱えつつも多くの途上国の教育、研究レベルは向上し、工学技術の協力ニーズが拡大するとともに、一部の国おいては「片務的」な関係でなく、共同研究が可能な「互恵的」関係を築くことも可能となっている。また、日本の少子化や人口減少を見据えて日本の多くの企業が将来の生存をかけて成長する途上国のマーケットに進出している。大学も将来展望を踏まえ、国際協力を通じて途上国の教育機関との関係強化を図る新たな意義も見いだせる。従来の国際協力の意義のみならず、新たな価値を創出し、教員や学生と共有していく努力も行っていくことが重要となる。

3. 国際協力センターの平成27年度活動内容（個別）

3.1　政府開発援助（ODA）事業の実施（受託）を通じた活動
－ODA 事業の実施：国際貢献と本学国際戦略目標の実現－

(1)「産学官連携による地域産業クラスター振興」（JICA 課題別研修）

【継続案件／対象：全世界の主に中所得国対象／内容：研修の実施】

【ポイント】
平成25～平成27年度実施の JICA 課題別研修の 3 年次目。本受託研修は、豊橋の食農クラスターを中心に、本学の産学連携体制・活動、中央～地方政府の政策、当地の産業振興機関（サイエンス・クリエイト）やシンクタンクの活動等を事例として、クラスターアプローチによる産業振興手法について途上国からの参加研修員に習得させるもの。

【概要】

JICA 課題別研修は、日本側から開発途上国に研修を提案、各国より外交ルートを通じ、要請を受け実施する。日本の「知」を日本の「場」で学び、同じような課題に直面する国々の間で経験を共有し、新たな「知」を共に形成することを目的としており、年間約300研修、約 1 万人の研修員が参加している。

本学では平成19年度以降、開発途上国の産業振興を人材育成の面から促進するため、学内に蓄積してきた産学官連携に関する知見、及び豊橋・三河地域を中心としたネットワークを活用し、国際協力機構（JICA）の課題別研修を実施している。平成24年度、途上国の産業振興を産学官連携によるクラスター開発アプローチを通じて学べる研修の実施要請を JICA を通じて受けた。平成19年度から平成24年度まで実施した JICA 課題別研修「産学官連携コーディネータ養成」により蓄積した知識、方法論、ネットワークを活用し、平成25年度あらたに「産学官連携による知的クラスター振興」研修を立ち上げ、実施した。平成27年度は同研修の 3 年目、最終年度に当たる（平成25～平成27年度までの 3 年間実施）。

【平成27年度の活動】

本研修は、地域産業振興のための産業クラスターの形成過程、運営の実態、大学の技術開発を中心とした産学官連携の具体的な取り組みの視察・検討、研修員の個別課題の共有を研修項目とし、構成している。また、産業クラスターの形成・振興のための知識・方法論を基本理解と日本の国から実施機関に至る各階層の活動から習得できるプログラムとしている。本年度は、平成25年度、平成26年度実施時の成果・反省も踏まえ、特にクラスターの形成～運営～活性化の各プロセスにおける具体的な取り組み・工夫（企業間 / 産学官のマッチングのための諸活動、産業支援機関の役割・機能、大学・研究機関の知財の活用・事業化など）について事例をより深く理解できるように講義・視察を工夫した。また、知識を応用可能なものとしてより深く習得するため、講師と研修員及び研修員相互のディスカッションの時間も十分に確保し、双方向性を意識した研修として実施した。

■研修目標

研修カリキュラムを通じ、また、各国から参加した研修員相互の情報交換、意見交換を通じて地域の産業振興のための、各国・各地域の実情に合った効果的なクラスターアプローチが習得される。

■研修アウトプット

(1) クラスターについての基本的概念を理解する。

(2) 日本を中心にクラスター活動の実例を多面的に理解する。

(3) 地域クラスター推進のための関連専門知識を理解する。

(4) 討議や演習からクラスター開発及び運営に関する考え方が整理される。

■研修内容

（日本・豊橋地域の事例等を提供）

(1) 地域クラスターの基礎理解

(2) 地域クラスターの多面的理解

(3) 地域クラスターの推進のための関連専門知識

(4) 地域クラスターのダイナミクスづくり

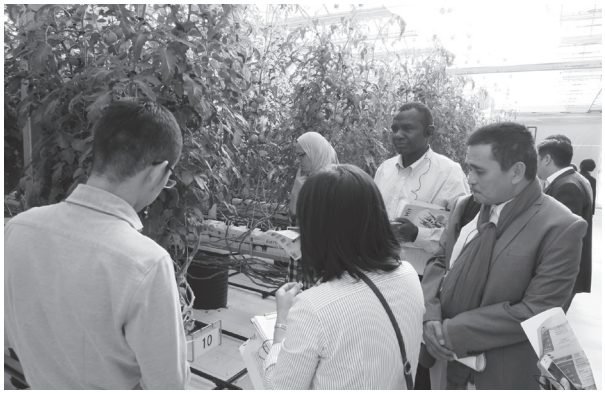
■研修期間

平成27年9月30日～平成27年10月31日

■研修参加者

13ヶ国16名（インド、インドネシア、エジプト、カザフスタン、ケニア、チュニジア、マレーシア、ミャンマー、メキシコ、フィリピン、ブラジル、パキスタン、ベトナム）

〈講義の様子〉



〈訪問先見学〉

〈閉校式〉

〈企業先訪問〉

(2) ASEAN 工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）留学生受入、教員派遣（JICA 技術協力プロジェクト）

【継続案件／対象：ASEAN（除：シンガポール、ブルネイ）／内容：留学生・短期派遣学生の受入、教員の派遣】

【ポイント】
①平成15年度に開始された SEED-Net プロジェクトのフェーズ 3。本フェーズでは、「産学連携による地域産業の高度化」をテーマとして、従来の活動を発展的に推進する形で、ａ．メンバー大学と産業界との連携強化、ｂ．地域共通課題解決に資する研究の実施、ｃ．メンバー大学の研究・教育能力のさらなる向上、ｄ．関係大学間のネットワーク強化、を主目的として実施。
②本学は現在、本プロジェクトの国内支援大学の一つ（材料工学分野：幹事、コンピュータ情報工学分野：副幹事、機械工学分野：副幹事）として、留学生の受入、現地での指導等を実施。

【概要】

「アセアン工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net)」は、JICA が平成15年から行っている技術協力プロジェクトで、ASEAN（東南アジア諸国連合）各国の工学教育をリードする中核大学の教育・研究能力を向上することにより、域内の工学系人材を育成し、産業の発展を図ることを目的としている。平成９年のアジア通貨危機を経て、強い産業構造を実現する上では工学人材を拡充すべきとのわが国のイニシアティブによって形成された背景がある。。

本プロジェクトはこれまで、第１フェーズ（平成15年３月～平成20年３月)、第２フェーズ（平成20年３月～平成25年３月）と２期の協力期間を通じて、(1) ASEAN 域内および日本での高位学位（修士号・博士号）取得を通じた、メンバー大学の若手教員の能力強化、(2) 域内に修士・博士レベルの国際プログラムを擁する「工学大学院コンソーシアム」の確立、(3) 域内留学や共同研究の実施等を通じた工学分野のアカデミック・ネットワークの形成、といった成果を挙げてきた。

第２フェーズにおいては、ASEAN 後発メンバー国である CLMV 諸国（カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム）への協力（教員の上位学位取得支援，大学院の新設・強化等）に重点を置き、各分野ホスト大学の地域中核大学化を進める一方、ネットワーク基盤や SEED-Net の枠組みの持続性を強化し、活動の自立発展性を高めてきた。更に、域内共通課題（防災、環境対策、代替エネルギー等）に係る共同研究を行うことにより、地域社会への貢献も進めている。

平成25年３月よりさらに５年間協力を継続する第３フェーズ（現フェーズ）に入った。ここでは、(1) 継続的な高度技術人材の育成や産学連携の促進を通じた域内産業の高度化支援、(2) 域内で優先される分野課題や地域共通の地球規模課題への対応、(3) アジアにおける科学技術振興のプラットフォーム形成等の協力を進めることが計画されている。合わせて、ASEAN 側メンバー大学を26大学に、本邦支援大学を14大学に増やし、各国トップレベルの大学が連携した高度な研究・教育の更なる強化を通じて地域の発展に貢献することを目標としている。

本学は、第１フェーズの開始に先立つ準備段階（平成13年から２年間）より、当時の ICCEED 教員を中心にプロジェクトの立ち上げに向けて積極的に協力してきた。その結果、プロジェクト支援大学のオリジナルメンバーとして名を連ねている。

具体的には、(1) ICCEED 教授（元副学長、後に客員教授）を JICA 専門家（プロジェクトチーフアドバイザー）として SEED-Net 事務局（在バンコク）に派遣、(2) 本学教授が国内支援委員会に委員として参画、(3) 材料工学分野および機械・航空工学分野の分野調整幹事大学として協力計画の調整・実施監理に協力、(4) 個別案件（JICA 調査団員・短期派遣専門家として域内会議・セミナー等への参加や

集中講義の実施、共同研究支援，JICA 研修員としてメンバー大学の若手教員・大学院生の本学での受け入れ指導等）へ多くの本学教員の参加・協力，等を行ってきた。

特に、メンバー大学若手教員の上位学位取得支援プログラムを通じて、これまでに11名が本学の博士後期課程に留学して博士号を取得したのち、各国の大学等の高等教育機関の教員として活躍している他、平成27年度３月現在、４名が学位取得を目指して在籍中である。

【平成27年度の活動】

■教員の海外派遣

延べ ３名 （前年度実績：延べ ４名）

	所属	期間 派遣国	用務内容
1	情報・知能工学系 講師	平成27年9月30日～10月4日 ベトナム	地域会合への参加
2	電気・電子情報工学系	平成27年10月28日～11月2 タイ・ベトナム	アセアン工学系高等教育ネットワークプロジェクト（フェーズ３）運営指導調査及び地域会合への参加
3	機械工学系 准教授	平成27年11月3日～11月8日 インドネシア	アセアン工学系高等教育ネットワークプロジェクト（フェーズ３）運営指導調査

■外国人留学生の受け入れ

平成27年度は、１名の入学者（博士後期過程、機械工学系）。

(3)「マレーシア日本国際工学院（MJIIT)」(JICA 円借款附帯プロジェクト）

【継続案件／対象：マレーシア／内容：留学生の受入、教員の派遣、共同研究の実施】

【ポイント】
平成23年度より本プロジェクトのコンソーシアムメンバーとして参画。学生の短期受入に対応する一方で、小委員会への参加開始が遅れている。

【概要】

マハティール前首相の提唱により1982年から続けられてきた「東方政策」による人材育成制度を集大成するものとして日本型の工学教育を行う独立の高等教育機関を設立するプロジェクト。平成21年10月及び平成22年４月の鳩山・ナディブ首脳会談を経てマレーシア国より有償資金協力（円借款）の要請を受けるに至り、マレーシア工科大学（UTM）の機構の下に独立性の高い専門機関としてマレーシア日本国際工科院（MJIIT）を設置した。

平成23年９月より学生の受け入れを開始した MJIIT は平成24年６月１日に開校式を行い、本学からは副学長、ICCEED センター長が出席。以降、日本政府外務省主導の下、本邦主要大学が支援大学コンソーシアムを編成して協力計画の実施に当たっている。

「先進国入りを目指すマレーシア国の更なる産業発展を牽引する高度技術人材を日本型の工学教育手法で実践的・実学的に育成する」との MJIIT の構想に対して、本学は、ICCEED 設置後10年に亘る国際

協力実績と、高等専門学校との連携や大学院までの一貫教育により高度技術人材を輩出してきたシステム・知見を活かして貢献することが期待されており、平成22年度のオブザーバ参加を経て平成23年度から正式に同コンソーシアムに参加している。平成24年度には、MJIIT 学生の共同指導の一環として、第一期生１名を本学情報・知能工学系において短期受入を行った。

平成25年度の同会議において、本学からは、精密機械または電気・電子工学小委員会のいずれかに参加する用意があることを表明している。

■本邦支援大学コンソーシアム正式参加メンバー

九州大学、慶応義塾大学、埼玉大学、芝浦工業大学、拓殖大学、東海大学、東京農工大学、名古屋工業大学、長岡技術科学大学、北陸先端科学技術大学院大学、明治大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、大阪大学、山口大学、近畿大学、東京工科大学、東京電機大学、東京理科大学、岡山理科大学、九州工業大学、金沢大学、山形大学、筑波大学、本学（正会員25大学）

■政府関係

外務省、文部科学省、経済産業省、日本商工会議所、JICA（準会員５機関）

■協力対象分野

電気・電子コンピュータ工学、機械精密工学、環境グリーン技術工学、技術経営学

【平成27年度の活動】

平成27年度については、支援大学コンソーシアム会議（平成27年８月及び平成28年３月）に ICCEED より参加しプロジェクト全体の進捗確認や日本からの派遣教員候補に関する審議・承認等に関する協議を行った。一方、学内における協力体制構築が遅れており、現段階で小委員会への参加が正式に決定していない状況にある。本プロジェクトへの参画の有り方を再検討する必要が生じている。

（4）ハサヌディン大学工学部　研究・連携基盤強化（JICA 技術協力プロジェクト）

【新規案件／対象：インドネシア／内容：留学生の受入、教員の派遣、共同研究の実施】

【ポイント】
インドネシア国立ハサヌディン大学工学部を主体とした産学地域連携機能強化をテーマとした平成26年度開始の新規プロジェクト。本学はフェーズ１に続き国内支援委員会に参加、平成26年12月には現地調査団にも参団。今後、共同研究を念頭に置いた教員交流、工学部内に設置された産学連携技術センター（Center of Technology：(COT)）能力強化のための本邦研修等で協力可能性を検討していく。

【概要】

本事業はインドネシア南スラウェシ州の国立ハサヌディン大学（UNHAS）工学部を対象として、同学部の整備・拡張と、円借款により整備される同学部 COT の機能、研究力、コーディネーション能力強化を通じて、工学教育の拡充、研究能力強化・活動活性化を図るもの。本学は2014年度、プロジェクト形成段階から国内支援委員会に九州大学、愛媛大学と共に参画し活動を開始した。なお、同大学への協力事業としては、同工学部立ち上げ、機能強化をテーマとした協力プロジェクト（フェーズ１）に参画した経緯があり、その際に構築した関係を活性化し、あらたな連携を進める上でも有意義であると判断し、今次プロジェクトに参画を決定した。

今回はCOTを中心として工学部のみならず他学部を含めた全学的な産学地域連携を促進し、東部インドどネシアにおける産業基盤を確立することが主な目的であり、共同研究を念頭に置いた教員交流、産学地域連携機能強化のための本邦研修等で具体的な協力が出来る可能性がある。

■協力期間

平成26年８月から平成31年７月まで（計60ヶ月、事業総額約3.2億円）

■事業目的

平成19年から実施した円借款事業で整備した産学連携技術センター（COT）を中心として研究と産学地連携の強化を図り、以てUNHASが東部インドネシア地域における地域産業振興の拠点となる。

■投入（日本側）

① 長期専門家：チーフアドバイザー・組織運営、アカデミックアドバイザー・産学地連携、業務調整・研究支援計画（35.6MM／年）

② 短期専門家：研究促進・産学地連携（4.2MM／年）

③ 本邦研修：産学地連携等に関する国別研修

④ 現地研究経費／研究用機材関連経費（円借款調達済機材のメンテ・補完機材等）

【平成27年度の活動】

・国内支援委員選出、委員会参加

本学はフェーズⅠでの協力実績を踏まえ、インドネシアとの連携強化を目的として、引き続き国内支援委員会に参加。

・現地調査への参団（平成27年２月）

ICCEEDセンター長（国内支援委員会委員）がJICA運営指導調査団に参団。同大学の研究能力、研究体制についての確認を行った。

・ハサヌディン大学教員の研修受入

ハサヌディン大学教員の本学視察と研修受け入れを実施。（平成27年８月）本学の取組を中心に産学官連携をテーマに研修を実施。

(5) モンゴル工学系高等教育支援（JICA有償資金協力プロジェクト）

【新規案件／対象：モンゴル／内容：カリキュラムの策定、留学生の受入、共同研究の実現に向けた学内調整】

【ポイント】
モンゴルにおける主要工学系高等教育機関である、モンゴル科学技術大学及び国立大学を対象として、工学研究の量・質の拡充を図る平成26年度開始の新規円借款プロジェクト（総事業費81.5億円）。ツイニングプログラムの立ち上げ、実施と、共同研究等を通じてモンゴルの高等教育を拡充し、産業人材の育成を図る。当面、ツイニングプログラムについて、モンゴル側1-2年次部分の検証作業等を行う予定。

【概要】

モンゴルの主要２大学（モンゴル科学技術大学、モンゴル国立大学）の工学教育・研究の質・量の拡充を通じ、モンゴル産業界が必要とする工学系人材（特に即戦力となる技術者）を育成することを目的とした円借款プロジェクト。

■総事業費

81.50億円（うち円借款対象額：73.35億円）

■モンゴル側実施体制

借入機関：経済開発省、事業実施機関：教育・科学省

■事業期間

平成26年３月～平成35年５月（９年間）

■事業コンポーネント

A．学部プログラムの質の向上（ツイニングプログラムの実施）

・事業対象大学　＊学生数は平成24年３月現在

モンゴル科学技術大学のみ：土木・建築学部（学生3,389人）、機械工学部（同2,039人）

・日本側協力大学（予定）・・・以下の８大学でコンソーシアムを形成

長岡技大（幹事校）、名工大、京都工芸繊維大、北見工大、東工大、名大、九大、本学

・プログラム開始時期

平成27年９月日本側大学編入は平成30年４月予定）

・日本側大学に期待される協力内容

①モンゴル側ツイニングプログラムの開発（現行カリキュラムの改定支援）

②日本側各大学による留学生の受入

・留学生数（予定）

上記２学部より：各40名/年×２学部×４バッチ＝計320名

・実施言語

日本語　＊受入前にモンゴル国内で十分な日本語教育を実施

B．教員の教育・研究内容の強化（共同研究×教員の留学）

・事業対象大学

－モンゴル科学技術大学（Mongolian University of Science and Technology）

－モンゴル国立大学（National University of Mongolia）

・日本側協力大学・・・オープン（コンソーシアム形成なし）

・日本側大学に期待される協力内容

①共同研究の実施

②共同研究関連教員の留学：修士100名、博士60名

③共同研究関連教員の長期・短期派遣（Non Degree プログラム）：長・短期計321回

・共同研究テーマの決定プロセス

モンゴル側大学がテーマ、日本側のパートナー大学（希望）を春・秋の２回/年選定

C．即戦力となる産業人材（技術者）の育成

・協力内容

高専４年生への受入を主とした協力コンポーネント。

【平成27年度の活動】

■学内調整

ICCEED では、本プロジェクトへの参画につき学内調整を実施（IGNITE 運営会議、委員会による事業説明、実施了承取付等）。

■コンソーシアム関連

平成26年10月の立ち上げ準備会合以来、コンソーシアム会合に参加。

■現地調査団派遣調整

学内で関連系（機械工学系、建築・都市システム学系）からの調査団参加にかかる調整を実施、結果的には調整つかず不参加。

平成27年９月25日～26日、本学機械工学系及び建築・都市システム学系の教員と共に、ICCEED 澁谷准教授が、モンゴル科学技術大学（モンゴル・ウランバートル）で開催されたツイニングプログラム　オープニングセレモニー及びツイニング調印式等に出席した。

コンソーシアム規約・細則の学内承認手続きを完了。

（6）アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成（アフガン PEACE）（JICA 技術協力プロジェクト）

【継続案件／対象：アフガニスタン／内容：留学生の受入】

【ポイント】
アフガニスタンの復興支援の一環として、平成23年～平成27年度の５年間にわが国全体で約500名を博士前期課程・国際プログラムに留学生として受け入れるプログラム。
現在４名が就学中（合計７名の受入：平成24年度２名、平成25年度１名、平成26年度１名、平成27年度３名）。

【概要】

アフガニスタン国の平和復興、民主的な国家建設の努力に対し、わが国は国際社会と協調した支援を行っており、平成21年11月には５年間で最大50億米ドルの支援を行う旨を表明。わが国は主としてインフラ開発と農業農村整備を中心に、アフガニスタン国のオーナーシップを尊重した支援協力を行っているが、長期の内戦の影響で人材不足や脆弱な行政機関の強化が課題となっている。こうした状況を踏まえて、わが国外務大臣は平成22年７月のカブール支援国会合においてこれら分野の施策遂行に必要な行政人材育成のため、５年間で500名程度を本邦大学院修士課程で教育訓練する支援構想を表明した。これを受けて、アフガニスタン政府の要請を基に JICA は技術協力プロジェクトとして実施することとなり、平成23年度から平成27年度までの５年間にわたって毎年度100名程度の技術研修員を博士前期課程留学生として受け入れることとしてアフガニスタン国政府と合意した（プロジェクト期間は最終年度の留学生が卒業する平成31年３月まで）。

本学は立ち上げ時、ICCEED を中心にプロジェクトの企画準備段階から JICA の求めに応じて協力を行い、支援対象である「インフラ開発」分野での留学生受け入れに応じることとして学内調整を進め、アフガニスタン側から人材育成要望のある専攻分野に対応すべく、建築・都市システム学系を中心に、電気・電子情報工学系、情報・知能工学系、環境・生命工学系など複数の専攻系が全学を挙げて対応することとし、７研修課題で最大４名の受け入れ枠を用意することとなった。

■協力対象分野（研修課題）

－　建築・都市システム学系：都市・交通計画、構造・橋梁・振動工学、土木材料工学、環境工学、鉱山・地質工学・GIS

－　電気・電子情報工学系：電気・電力工学

－　情報・知能工学系：コンピュータ科学
－　環境・生命工学系：環境工学

【平成27年度の活動】

第５陣（平成27年度）は、建築・都市システム学系に対して14名の志願者があり、書類審査とTV会議システムを利用した面接審査を経て、３名を博士前期課程正規生として受け入れることとなった。

（7）アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ（ABEイニシアティブ）（JICA技術協力プロジェクト）

【新規案件／対象：全アフリカ／内容：留学生の受入】

【ポイント】
アフリカ54ヶ国を対象に平成26年度より４年間で約1,000名の留学生を国際プログラム博士前期課程に受け入れるプログラムで、課程修了後、本邦企業においてインターンを行うことを組み入れている点に特徴がある。本学には、１名が就学中である（2016年３月時点）。

【概要】

■背景、特徴

アフリカの民間セクターや公的部門における人材育成を支援するための方策の一つとして、第５回アフリカ開発会議（TICAD V）（平成25年６月）において安倍首相により表明されたイニシアティブ。

本邦大学での修士号取得に加え、本邦企業でのインターンシップの機会を研修員に対して提供することで、アフリカにおける産業開発に資する人材の育成及び日本企業との人脈が形成され、日本企業がアフリカにおいて経済活動を進める際の水先案内人として活躍することが期待されている。

ICCEEDでは事業スキームの把握と学内説明を国際課と協力して実施。選考にかかる担当教員との調整に関しても打合せ等を行った。平成26年度現在では、一般留学生と同様に国際課（留学生係）が中心となり選考・受入手続きを実施。

なお、本学は平成25年10月に本イニシアティブへの参画を表明。また、平成26年２月にはICCEEDセミナー（現IGNITEセミナー）を開催、アフリカの実情及びABEイニシアティブの概要紹介を実施。

■受入時期、人数

平成26年９月から平成29年９月までの受け入れで計1000人
（平成26年度150人、平成27年度350人、平成28年度300人、平成29年度100人他国費留学生等）

■対象国

アフリカ全土54か国（うち初年度はケニア・タンザニア・モザンビーク・南アの４か国）

■人材（分野）

民間人材６割、政府人材３割、大学教員１割（工学、農学、経済・経営学含め、すべての学術分野）

■受入大学

全国58大学114研究科（うち中部地域では本学、名大、名工大、三重大の４大学７研究科）

■ ABEイニシアティブの受入要件

①必須科目及び日常の研究指導がすべて英語で行われ、研修員の日本語取得および日本語科目の受講が必須でないこと。

②春入学及び秋入学での受け入れが可能であること（入学時の身分は正規生または研究生／科目等履

修生も可とし、後者の期間は半年間とする)。

【平成27年度の活動】

第２バッチ（平成27年度秋入学期受入）については９名の応募があり、担当教員への事業趣旨説明及び選考時の調整を実施。１名を博士前記過程の正規性として受け入れた。他の候補者については、研究テーマの不適合や筆記試験結果により採用が叶わなかった。

(8) インドネシア・ソロク市浄水技術改善事業（JICA 草の根技術協力）

【検討中／対象：インドネシア／内容：豊橋市上下水道局との連携による草の根事業立ち上げに向けた学内調整】

【ポイント】
インドネシア・ソロク市（人口約６万人）の浄水上の設備能力向上、技術改善を目的として、豊橋市上下水道局が提案主体として計画中の JICA 草の根技術協力事業（地域活性化特別枠）案件。本学は水改善状況の調査・分析を科学的なアプローチにより担う立場から参画することとなり、共同提案。平成26年度募集に際しては不採択となったが、提案書の見直し、改定を行い採択された。

【概要】

平成25年１月にインドネシア・ソロク市長以下10名による豊橋市上下水道局の視察があり、その際に浄水場のリハビリについての支援要請があった。豊橋市はその後、現地調査を実施し、その結果を踏まえて現地水道施設の運転管理技術の向上により、「飲めない水道水」を「安全な水道水」へと変換が可能であると判断、技術職員の技術伝承も兼ねて支援・協力を行うことを決定。（一財）自治体国際化協会の事業スキームを活用して平成25年度、豊橋での技術研修とソロクでの水道施設改善指導を開始した。この際、本学・環境・生命工学系教員が技術移転を支援したことを契機として、草の根技術協力事業スキームによる継続協力に際し、連携して対応することとなった。

【平成27年度の活動】

JICA より担当者を招聘し、スキーム及び評価ポイントに関する説明会を設定するなど、不採択となった提案書の見直しを支援し、結果、JICA 草の根技術協力事業（提案型）として採択された。再提案を踏まえ、本学の役割の見直しを行い、あらためて学内の協力体制につき調整を行った。

(9) JICA 中部短期インターシップ

【新規案件／対象：国内／内容：短期インターンへの学部学生選考】

【ポイント】
平成26年度より新たに JICA 中部での短期学部学生インターンプログラム（2 週間）への参加を開始した。

【概要】

従前より、名古屋大学向けに JICA 中部が実施していた同所での短期インターンシップ・プログラム（2 週間、大学夏期休暇中に実施）について、平成26年度第１四半期の段階で本学からの参加を求めたところ、三重大学と共に参加可能となった（本学枠２名）。内容は主に国際協力事業の実務を経験するもの

で、英語を活用する機会が多いことに特徴があるプログラムとなっている。平成26年度学部３年生１名が参加。

【平成27年度の活動】

JICA 中部との調整および学部生を対象に応募勧奨を行ったが、結果として応募者がなかった。

(10) 産学官連携によるインドネシア産業人材構想

【検討中／対象：インドネシア／内容：産学官連携による日本型ものづくり人材育成のための仕組み作り】

【ポイント】
インドネシア部会構成教員（機械工学系）の現地活動を契機として、インドネシアの大学を「場」とした日本型モノづくり人材育成メカニズム構築（教育カリキュラムの策定等）について、民間企業（大手自動車部品メーカー）関係者との間で検討を開始、ICCEED からも教員２名が検討当初より参画。現在、構想を具体化すべく政府系産業人材育成関連機関等も巻き込み協議・検討中。プロジェクト化した場合、本学には教育カリキュラムの策定や教員高度化のための支援（留学生としての受入）等が期待されている。

【概要】

多くの日系企業が進出する ASEAN を中心に、高度なモノづくりを実現する各国技術者の育成が急務となっている。技能者レベルの人材については企業内教育や現地教育システムで安定的に供給が可能となってきている一方、高度技術者の育成は企業のみの努力では限界があるとされており、わが国の政府機関、大学が企業と連携して教育メカニズムを立ち上げる必要性が指摘されている。

これに対し、インドネシアを対象として、既存の大学内にモノづくり課程を新設することを念頭としたプロジェクト形成にかかる検討を本学（インドネシア部会構成教員、ICCEED）と企業間で平成 26 年度に開始した。

【平成26年度の活動】

現在、タイにおける泰日工業大学等を参考に、プロジェクトのフレームワークを策定中。並行して、インドネシアに展開する日系企業や政府（経済産業省）、政府系機関（HIDA、JICA）等の理解促進と協力体制構築を進めている。平成27年度はプロジェクト設計を進めるため、JICA 関係部署（東南アジア部、人間開発部、産業開発部）と協議を実施。また、事業実施の際の協力コンセプトの検討、産学連携ネットワーク形成も視野に入れ、「産業人材育成」をテーマに関係者を招いての IGNITE フォーラムを実施した。（平成28年３月）

3.2　本学の独自事業
－ODA 事業を通じて構築した海外教育機関・研究所との連携事業－

(1) インドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニック（EEPIS）教育高度化支援

【継続案件／対象：インドネシア／内容：教員＝留学生の受入】

【ポイント】
1980～1990年代に政府開発援助（ODA）によるプロジェクト活動を通じて関係を構築したインドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニック（EEPIS）の教員高度化支援を本学独自事業として実施するもの。同校教員が修士課程の指導を行う上で必須となる博士号取得を支援するもので、インドネシア政府の教員高度化のための奨学金を活用し本学の博士後期課程に受け入れるもの。

【概要】

急速な経済成長と産業発展を進めるインドネシアでは、製造業を中心とする産業振興を牽引する機関としてポリテクニックの整備が進められてきた。

スラバヤ電子工学ポリテクニック（EEPIS）は、中堅技術者の養成のため、学術的な専門教育を施す大学と合わせて、より実務的な高等専門教育機関として1980年代から90年代にかけてJICAを中心とするわが国の技術協力や無償資金協力による全面的な支援を受けて設立・発展してきた。

ロボットコンテストの国際大会では強豪の常連校となるなど学生の専門技術の習得レベルは大学工学部卒業生を凌ぐのではと言われるまでになっており、またインドネシア各地の他ポリテクニックに対しても卒業生を専門教員として供給するまでに教育の質を拡充してきている。

一方でインドネシア政府は更なる国家発展のためにはより高度な教育訓練を受けた人材育成が求められるとして、教育機関の質と水準の一層の向上を進めており、高等教育機関教員にはより高位の学位を取得していることが法制度面でも要求されることとなった。

このため、EEPISにおいても、修士課程を有する大学院を設置するとともに、自身の教員に対して高位学位を取得させる必要に迫られている。

本学には、かつてJICAの技術協力に派遣専門家として参画した教員が在籍しているという関係があり、また高等専門学校と連携した高度技術者の育成を特徴とする本学の教育ノウハウを活かした支援を提供できることから、前インドネシア国教育文化大臣より前本学学長に要請がなされ、EEPISの教育高度化計画に可能な範囲で協力をすることとして、平成22年度より協力実施に必要な環境の整備を進め、平成23年度より本格的に協力活動を行っている。

本学における協力支援分野は、電子工学、電気工学、メカトロニクス工学、マルチメディア工学、通信工学、情報工学コンピュータ工学で、EEPIS部会を設置し、支援体制を確立している。EEPIS講師（修士号保有）の学位の高度化支援しており、3年間での博士号取得のため、事前に本学指導教員とのマッティングを行い、事前研究指導を実施している。

【平成27年度の活動】

スラバヤ電子工学ポリテクニック教員2名が博士学位を取得。5名が博士後期課程に在学中。

インドネシアの他のポリテクニック高度化を目指し、国立バンドンポリテクニック及び国立バンドン製造工学ポリテクニックと今後の戦略的受入に関する協議を実施し学位取得希望者リストを作成した。（平成27年3月）

3.3　実施体制・基盤整備

(1)『国際戦略 2014-2015』策定

前年度以前に検討を開始した「国際戦略」を平成26年度当初より再検討、草案として取り纏めた。「教

育」、「研究」、「国際貢献」の三本柱を明記。平成27年３月23日に制定し、公表した。

【概要】

国際交流・連携を全学的に推進するための「国際戦略」の策定及びそれに基づく事業展開は第二期中期計画に設定されている。前年度までに検討されてきた「国際戦略」案を踏まえて平成26年度中に正式化するため、ICCEEDにおいて草案作りを行った。

(2) 海外奨学金制度調査

【概要】

グローバル化の進展により、知識・情報・資金・人材の流動性が高まり、高等教育においても、グローバルな競争力を有した人材の育成が必要とされている。その中で、本学は、国際性に富んだ指導的技術者を育成し、世界各国からの留学生が集う「多文化共生・グローバルキャンパス」の実現を目指している。

文部科学省によれば、平成27年５月１日現在の留学生数は、208,379人（内、高等教育機関）であり、留学生数の多い国（地域）は中華人民共和国（94,111人）、ベトナム（38,882人）、ネパール（16,250人）である。本学には、マレーシア、インドネシア、ベトナムの東南アジアを中心とした外国人留学生が多く就学している（学生総数の約８％，平成27年６月現在）。

現在、ASEAN各国では、ごく一部のエリート層のための高等教育であったものが、経済発展により大衆化され、更なる国の発展のため高等教育における人材育成を政策として打ち出す状況にある。そのような背景から、各国政府では、海外の高等教育機関での留学を推進するための政府奨学金を供与している。

【平成27年度の活動】

ASEANのうち、インドネシアやマレーシアでは、海外高等教育機関への留学を支援する政府奨学金は、国の更なる発展に貢献を期待するため、留学先の大学がQS世界大学ランキングあるいはTimes Higher Education世界大学ランキングで200位以内にランキングされていることを要件の一つとしている。

そのため、東南アジアからの留学生を多く受け入れている本学として、両国における奨学金申請のためには、本学が留学対象校として適切であることを証明する（入学許可書(Letter of Acceptance)２通（大学と指導教員）の提出）ことが求められるようになっている。

ICCEEDとして関係の深いインドネシアにおいては、インドネシア政府奨学金運営機関LPDP(Indonesia Endowment Fund for Education: Lembaga Pengelola Dana Pendidikan)に対して、本学が留学対象校であることを正式に認定するよう、現地を訪問し要請した（2016年２月、３月）。

【インドネシア】

LPDPは、インドネシア第６代大統領スシロ・バンバン・ユドヨノ氏の政権下で平成24年１月に設置された。これは、教育文化省高等教育総局（DIKTI）が供与している奨学金の支払い時期が遅延することが多く、海外での留学生活に支障があった点を改善することを目的としているとの指摘がある。

ユドヨノ大統領政権下でのインドネシア高等教育総局（DIKTI）の奨学金

種　別	目　的	対　象	備　考
教員	海外学位取得	インドネシアの大学教員（ポリテクも含む）	留学先大学の入学許可証が必要。
教員志願者	海外学位取得	インドネシアの大学で教員として働く意思のある者	奨学金応募時に、帰国後の就職大学先を明記・大学からの雇用証明書が必要。
サンドイッチ・プログラム	研究／研究能力向上（3－5ヶ月、1年の場合もあり）・国際会議への参加等	インドネシアの学生	他大学の交流協定と必要な応募書類の提出。
インドネシア博士課程在学者	海外での研究活動	インドネシアの博士後期課程に所属している者	

【マレーシア】

マレーシア政府は、日本や韓国の経済発展がその労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等に依るとし、人材育成と経済開発を主軸に置いた「ルック・イースト政策」を推し進めてきた。2012年には、述べ約1万5000人が日本の大学へ留学或いは日本の産業界で働いた経験を有する。

マレーシア政府は、2020年までに先進国入りを目指しており（ビジョン2020政策）、教育分野や経済分野で様々な取り組みを行っている。海外の高等教育機関への留学についても政府奨学金を供与している。インドネシアと同様、留学先大学がQS世界大学ランキングあるいはTimes Higher Education世界大学ランキングで200以内にランキングされていることが奨学金供与の要件としている。

また、同国は海外への留学を推進するだけでなく、平成32年まで20万人の留学生を受け入れることを目標としており、そのための奨学金も供与している。

マレーシア政府海外留学のための奨学金

	奨学金	管轄	対象
1	Public Service Department (JPA)	人事院 Department of Public Service	高専・学士留学者
2	・PASCA ・Scheme for Abroad Study	MARA (MORRD)	学士、修士、博士課程留学者
3	Malaysian Japanese Higher Education Program (MJHEP)/ Japanese Associate Degree Program	マラ教育　財団（YPM）	主に機械・電気・電子工学分野、学部生（3年次編入）留学　希望者。

海外よりマレーシアの大学へ留学するための奨学金

1	Malaysia International Scholarship (MIS)	教育省 (KPM)	修士、博士課程、ポスドク留学者	工学、化学、農業、漁業等が重点分野。

(3) 大学間交流協定管理（連携活動の促進、交流協定管理）

【概要】

本学では、海外の高等教育機関及び研究機関との交流を通じて、双方の教育研究機能の向上と教職員学生の人材交流を図るために、67の大学・研究機関との間で交流協定を締結している。

【平成27年度の活動】

ICCEED教員が主管している交流協定

■バンドン工科大学（ITB インドネシア）

平成７年12月29日、本学とバンドン工科大学は、両者の間の交流協定を締結した。以来 ICCEED は同大学との交流協定に基づく交流・連携の推進・調整にあたっており、平成11年３月以来学生交流実施細則合意書が交わされており、現在、協定第４期（平成22年12月～平成27年12月）にある。

平成24年９月に ITB において、「ITB-TUT Students Collaboration to Solve Community Program」をテーマに大学生国際交流プログラムを協働開催し、両校のツイニングプログラムに関する現状の確認と今後の発展について意見交換を行っている。

■タマサート大学シリントン国際工学院（SIIT タイ）

平成12年11月、本学と SIIT は交流協定を締結し、併せて、学生交流の推進を図るため学生実施細則を締結した。

以来、ICCEED 第９回オープンフォーラム「開発途上国の産業発展と工学教育国際協力」（平成22年11月26東京）に同大学 Chongrak Polprasert 院長を招聘するなどの交流を図ってきた。

平成24年度に文部科学省の国立大学改革強化推進事業として採択された「三機関（長岡技術科学大学、本学、国立高等専門学校機構）が連携・協力した教育改革」事業によるグローバル教育活動を強化するため、タマサート大学との交流協定の締結についても協議を行い、交流を促進している。

■ベトナム国家大学ハノイ校工科技術大学（VNU　Hanoi-UET ベトナム）

平成22年８月20日に本学と VNU は大学間交流協定を締結した。

平成23年度には、ICCEED 設立10周年記念シンポジウム（11.15 豊橋）及び本学開学35周年式典（11.16 豊橋）に BINH 学長を招いて講演を実施するとともに、国際交流に関する顕著な貢献を顕彰して本学から名誉博士号（外国人としては本学初）を授与した。

両校におけるツイニングプログラム、海外実務訓練・インターンシップ学生の相互派遣・受け入れ及び共同プロジェクトの立ち上げ等について意見交換を行っており、今後も交流を図る。

■新モンゴル学園

平成27年７月に新モンゴル学園理事長ジャンチブ・ガルバドラッハ氏及び新モンゴル高専校長シャネル・ブヤンジャリガル氏が本学を訪問。大西隆学長、井上光輝理事・副学長、髙嶋孝明教授と懇談を行い、学生交流・学術研究交流を促進することとした。

平成27年10月５日、本学井上光輝理事・副学長ら３名が新モンゴル学園を訪問し、包括交流協定を締結した。

新モンゴル学園は、モンゴル国ウランバートル市の学校法人で、平成12年にモンゴル初の日本式高等学校、平成20年に中学校、平成21年小学校を設立。更に、平成26年設立された「新モンゴル工科大学」「新モンゴル高等専門学校」を傘下に置く。

■タシュケント工科大学（TSTU　ウズベキスタン）

平成27年９月９日にタシュケント工科大学の代表者が本学を訪問し、今後の学生交流・学術研究交流に向けて意見交換を行うことに同意。

平成27年11月13日、タシュケントにて行われた日・ウズベキスタン学長会議にて覚書の締結をした。

タシュケント工科大学は1929年にウズベキスタンで設立。中央アジアにおける大規模な工科大学の一つである。

平成16年から平成20年の間に、本学ではウズベキスタンから12名の留学生が在籍。現在は、タシュケント工科大学から本学博士課程に入学した、１名の留学生が在籍している。

（4）海外事務所運営・管理

インドネシア及び中国に設置した海外事務所の運営・管理を引き続き実施。

【概要】

本学は、海外の高等教育機関や研究機関、学生との交流を促進するため海外拠点としてインドネシアと中国に海外事務所を設置している。

インドネシア事務所は、バンドン工科大学内に平成16年１月開設し、中国瀋陽事務所は、遼寧省瀋陽市東北大学内に平成17年11月開設した。

インドネシア事務所はその開設以来、バンドン工科大学（ITB）と本学の間の各種協力活動の推進および支援活動を実施している。海外事務所には、大学の規程により留学生の確保、留学生同窓会の運営、交流事業の推進、共同研究･研究者交流の支援、プロジェクト調査の支援等の業務が期待されている（平成16年規程第16号海外事務所規程）。

ICCEED はインドネシア事務所開設の準備段階から積極的に取り組みを行っており、開設後は ICCEED センター教授・センター長が同事務所長を務め、各種活動を展開している。

【主な活動】

本学に留学希望する学生のための支援、情報等を提供（留学説明会）。

学生交流のための国際研修プログラム等に係る打ち合わせ。

大学間交流促進のための協議。

（5）スーパーグローバル大学創成事業

【概要】

平成26年９月に文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」グローバル化牽引型（タイプ B）採択された。

「『グローバル技術科学アーキテクト』養成キャンパスの創成」を構想名として掲げ、国際通用性と競争力の高い「多文化共生･グローバルキャンパス」を全学的に実現するため､1)「グローバル技術科学アーキテクト」養成コースを新設し、2）多様な価値観の学生・教職員が共生するグローバル宿舎を新設し、3）重層的なグローバル人材循環を柱として大学改革を推進している。

■「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成の構想

3つの柱	特　　徴
1.「グローバル技術科学アーキテクト」養成コースの新設	英語と日本語の2か国語を併用（**英日バイリンガル**）した学部・博士前期課程6年一貫教育の「**グローバル技術科学アーキテクト養成コース**」を、全課程・専攻に設置。本学マレーシア海外教育拠点（ペナン）や国際交流協定大学を戦略的に活用した高質な教育プログラム。
2. 多様な価値観の学生・教職員が共生するグローバル宿舎の新設	日本人と外国人留学生が共生し異文化理解と多様な価値観に対する包容力を涵養する場として、英語を公用語としたシェアハウス型宿舎（200名規模）をキャンパス内に新たに設置。既存の学生宿舎・国際宿泊施設とも融合して、キャンパス内に800名規模（学生総数の40%）の国際色豊かな「学・住・食」近接型の特区を形成。
3. 重層的なグローバル人材循環の強化	マレーシア海外教育拠点（ペナン）や国際交流協定大学を活用して、学生・教員・事務職員のあらゆる人材層においてグローバル循環を定常化。学生・教員・職員の言語／異文化コミュニケーション能力を向上するとともに、グローバル教務・学務システムの構築。

【平成27年度の活動】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

・「グローバル技術科学アーキテクト養成コース（GAC）」の新設準備

平成29年度より3年次編入、30年度より1年次入学開始に向け、入試制度と教育制度の新規作成をほぼ完了した。コース生となる日本人と留学生獲得のために、説明資料･プレゼンテーション等を作成し、全国の高専とASEAN中心の主要協定校・関連校への配布と重点校を訪問した説明会を実施し、コースの周知と優秀な学生の獲得活動を実施した。GACの3年次入学の出願受付を平成28年4月末より開始し、入試を計画通り実施した。

・日英バイリンガル講義と語学力強化カリキュラムの策定

教務委員会にてバイリンガル講義の全学実施方針を決定、実施計画の策定と各系（学科）での実施準備を進めた。昨年度の試行を拡大して30科目以上で実施、平成28年度は原則として全教員が1科目以上のバイリンガル講義を行い、153科目、13%がバイリンガルとなる予定。日本人の英語力、留学生の日本語力を養成する語学カリキュラムの改定作業を終え､平成29年度からの実施に向けての準備を開始した。

・シェハウス型グローバル学生宿舎の建設準備

学内コンペ最優秀作品のコンセプトを含む要求仕様にもとづき、公募型プロポーザルを実施して業者を決定し、契約を締結した。平成28年度3月の第一期60室完成に向けて、設計･施工を開始する。また、グローバル学生宿舎を活用した人材育成を活性化するための教育プログラムや交流プログラムの策定を開始した。

・グローバルコミュニケーション能力の向上支援体制

英語学習アドバイザーを週5日の常駐体制とし、学生・教員・職員全員を対象とした個別相談とセミナーや講座等を開設し、支援体制を強化した。事務職員の英語向上のため、eラーニング用タブレットを貸与して自主学習体制を整備し、TOEIC受験等で進捗の管理を開始した。

ガバナンス改革関連

・SGU推進室の設置

SGU推進室を設置、各系（学科）の中堅教員を室員として、プロジェクト全体の管理と学内のコミュ

ニケーション強化を中心に活動を開始した。SGU の各取組は担当すべき委員会やセンターの所轄とし、新規案件・横断的に実施すべき内容を室の主責務として推進している。今後の SGU 事業の進捗と補助金終了後を見据えて、学内の国際関連組織・センターの再編に向けた検討も開始した。

・大学憲章・大西プラン・国際戦略の策定

平成27年度に策定した大学憲章・大西プラン・国際戦略と SGU 構想にもとづき、第三期中期計画を作成し実施を開始した。SGU の成果指標と達成目標は中期計画に落とし込むことで、責任の明確化と実施状況の把握を図っている。

・国際通用性を見据えた研修制度

教職員をニューヨーク市立大学クイーンズ校に 4-6 週間派遣して、短期集中英語強化と研究・事務職務交流を行う、FD/SD プログラムを開始した。平成27年度は教員 4 名と職員 1 名を派遣、平成28年度は規模を拡大して教員 6 名と職員 2 名を派遣する。これらを今後継続するとともに、海外交流協定校等との中長期の人事交流の実施に向けた準備を開始する。

教育改革関連

・入試制度と教育制度の改革

コース新設に伴う全学の募集定員・出願資格・入試方法の変更・外部試験の活用など、大幅な改革実施案を作成した。平成28年度の GAC 3 年次入試開始に向け、入試制度変更の事前公表を行った。日英バイリンガル講義は、構想調書から前倒して、当初から全学展開を進めることを関連委員会にて決定した。

・教育プログラムの国際通用性と学生の国際流動性の向上

GPA・ナンバリングに対応する教務システムの改修を完了し、教務委員会で策定した計画にもとづき、順次導入を開始した。海外協定校との教育プログラムとして、東北大学（中国）、モンゴル科技大とのツイニング・プログラムを締結した。マレーシアの科学大学（USM）や DISTED College ほか、各国の大学との共同教育プログラムの創設に向けて具体的な協議を引き続き進めている。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

下記の 4 項目を大学独自の成果指標として設定し、その目標達成に向けて以下の取り組みを推進している。

１）学生宿舎入居率（キャンパスグローバル化指標）
２）海外インターンシップ履修率
３）事務職員の海外研修経験率
４）研究論文等の発表における国際共著率

・グローバル学生宿舎の新設

多国籍の学生が混住するシェアハウス型グローバル学生宿舎の基本設計と業者選定を終了し、平成28年度より建築に着手する。学内の既存の学生宿舎（600人）エリアの一角に、１棟30人収容の 6 棟（合計180人）と、共有棟 1 棟を建設する。1 ユニットは 5 人の個室と、共有のリビング・ダイニング・キッチン・シャワールームからなり、日本人と外国人が半々となる予定。平成29年度 4 月の GAC 開設に合わせて入居を開始し、学年進行を経て平成30年度に完成する。

・グローバル実務訓練の実施拡大

GAC 日本人は海外で、外国人は日本で 6 ヶ月の実務訓練を必須とする構想にもとづき、関連委員会にて実施計画を協議した。実施可能性に配慮し、学部最後 2 ヶ月（必須）の実務訓練と、大学院最初の 4 ヶ

月まで延長する課題解決型長期インターンシップ（選択）の既存フレームワーク内で実施することを決定。現在実施しているペナン教育拠点周辺の企業と、教員個人による海外大学・研究機関だけでは派遣先が今後不足するので、米国シリコンバレーの企業開拓などを開始した。平成28年度からは、実務訓練委員会の下に海外実務訓練の責務を集約し、全学的な実施拡大を開始した。

・海外交流協定校を中心とした職員の海外研修を推進

事務職員のグローバル化を図るべく、ニューヨーク市立大学クイーンズ校（QC）での短期集中英語強化研修と大学事務組織との交流や、マレーシア・ペナン教育拠点の運営と各種イベントへの職員派遣、連携大学の訪問、海外での大学説明会・留学生フェアー実施メンバーに職員を含めるなどを計画的に実施し、海外での実務経験者層を増やしている。

・技術科学イノベーション研究機構の設置

研究推進アドミニストレーションセンター（RAC）による、教員のグローバルな研究実績を増加させる支援に加え、既存の研究所とリサーチセンターの活動に横串を通し、更に戦略的に研究を推進する組織に向けた再編を進め、平成28年４月より「技術科学イノベーション研究機構」を設置した。

■　大学の特性を踏まえた特徴ある取組

・グローバル学生宿舎を中核とした多文化共生キャンパスの創成

新設するシェアハウス型グローバル学生宿舎では、日本人と留学生が一緒に生活し、国内にいながら国際生活を体験できる環境を作る。その運営・教育プログラム・交流プログラム等は、既存の学生宿舎から地域にまでひろげ、大西プランで掲げる「多文化共生・グローバルキャンパス」実現のコアとすべく、実施体制とプログラム作成の協議を、SGU 推進室と関連委員会等で開始した。

・ASEAN 諸国との連携を強化

本学の外国人留学生の半数以上が、マレーシア・インドネシア・ベトナムなどの経済成長著しいASEAN 諸国からである。帰国した留学生の海外同窓会組織を含め、これらの国の繋がりを活かして優秀な外国人留学生の増加を目指している。平成27年度には，この地域12カ国の大学・高校等において、大学紹介とグローバル化の説明、GAC コースと新入試の説明を行った。また、さくらサイエンスプログラムを活用し、３カ国４高校から10名の高校生と４名の教員を本学に招待、平成28年度は、それを５カ国９高校から25名の高校生と９名の教員に拡大して継続実施をする。

■　平成27年度取り組みの総括

以下の３つを柱として、真の国際通用性を備えた大学への変革を推進している。

１．「グローバル技術科学アーキテクト」養成コースの新設

２．多様な価値観の学生・教職員が共生するグローバル宿舎の新設

３．重層的な人材循環の強化 ～学生・教員・事務職員すべてのグローバル循環を加速・定常化～

コースの新設と学生の募集・入試の実施、宿舎の建設着工にこぎつけたことから、当初の計画は順調に始動した。バイリンガル講義は最初から全学展開する方針に変更し、構想調書の計画を前倒して実施している。今後は、GAC 学生の新しい教育と、宿舎プログラムの立案と実施などが重点課題となる。併せて、全ての成果指標と達成目標の状況を全体的に確認し、効率的な取り組みの実施と運営管理、大学の真の変革に向けた挑戦を継続することが重要と認識している。

現行の組織･連携体制の下で活動を進めながら、IGNITE の３センター及び学内関連部局と協議を重ね、新センターの設置や再編なども視野に入れて、事業の推進に適する組織体制･運営体制を検討して行く。

4. 国際協力センターの平成28(2016)年度活動計画・方針概要（全般）

(1) 全体方針（案）

【ポイント】
①平成28年度の ICCEED 活動は、平成27年度の事業を基本的に継続し実施する。新規事業については、実施負荷が高くなくインパクトの大きな事業を優先して実施する。また、外部機関との情報交換を密にし、組織的な意思決定に必要な情報をタイムリーに把握出来るようにする。
②学内実施体制の強化（各系との連絡調整機能強化、事業毎のワーキング・グループ形成等)、年間事業の平準化（研修、セミナー、オープンフォーラムについては特に第 1 四半期中に実施時期を確定し計画的な実施とする）を図る。
③学内外向けの広報活動を充実させる（学内目標：ICCEED活動、国際貢献活動の認知度向上、学外目標：本学の国際貢献活動に対する認知度向上)。
④受託事業実施における人件費、間接経費の取り扱いについて、学内関係部局との間で早期に基本的な対応方法を協議・決定する（人件費補填の受け取り、等)。
⑤国際協力機構（JICA）との連携協定の早期締結を目指し必要な調整を行う。

(2) 個別活動

【ポイント】
①平成28年度から新たに開始する事業（もしくは開始が見込まれる事業）について、早急に学内調整を行い、計画的に実施する（日墨戦略的グローバル・パートナーシップに基づくに研修、他)。
②オープンフォーラムのテーマ、招待講演者の案を早期に固め、第 1 四半期中に開催日決定、招待・後援手続き、案内を開始する。
③ ICCEED としての教育活動の在り方について検討し、必要性（ニーズ）が確認されれば平成28年度に向けて講義（授業）実施も視野に入れて必要な準備を行う（ex. 技術者のための国際協力／国際開発論、ボランティア論、産業と地域開発論、等々)。
④平成28年度課題別研修の後継案件の取り扱い方針を早急に決定し、必要な準備（豊橋地域他の講師候補者との調整等）を行う。

5. ICCEED 運営協議会

【概要】

グローバル工学教育推進機構長の諮問に応じてセンターの基本方針およびその他事業の実施に係る重要事項を審議するため「豊橋技術科学大学国際協力センター運営協議会」がおかれている。）豊橋技術科学大学センター等規則第 3 条)。運営協議会は、(1) 機構長及び副機構長 (2) センター長、副センター長及びセンター所属の教員、(3) 文部科学省、大学、高等専門学校及び開発援助機関等からの代表者で学長が任命するもの若干名 (4) 学外の学識経験者のうちから学長が任命するもの若干名の委員で構成される。(国際協力センター運営協議会規定)。

■実施内容

第 3 回豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構国際協力センター運営協議会では、平成27 (2015) 年度活動報告 / 平成28 (2016) 年度活動計画・方針案について、1. 国際協力センターの概要、2. 平成27年度活動報告について、3. 平成28年度活動計画・方針案の報告が行われ、意見交換会では、今後の国際協力センターの活動、課題についての質疑応答が行われた。

日時：	平成28年 2 月22日 (月) 運営協議会　10:45 ～ 12:15　意見交換会　12:15 ～ 12:45
場所：	一橋大学一橋講堂会議室 203
出席者： (学外委員)	敬称略 本村　宏明　　文部科学省大臣官房国際課国際戦略グループ　課長補佐 （豊岡　宏規　文部科学省大臣官房国際課長の代理） 梅宮　直樹　　国際協力機構人間開発部高等・技術教育チーム課長 （戸田　隆夫　国際協力機構人間開発部長代理） 三上　喜貴　　長岡技術科学大学理事・副学長 勝平　宏　　国立高等専門学校機構本部事務局次長 （上月　正博　国立高等専門学校機構理事代理）
(学内委員)	井上　光輝　　豊橋技術科学大学理事・副学長 グローバル工学教育推進機構長 穂積　直裕　　豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター長・教授 澁谷　晃　　豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター准教授
(陪席)	余語　豊彦　　豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター特任助教 田中　基久　　豊橋技術科学大学国際課長（事務取扱） 黒田　清彦　　豊橋技術科学大学国際課室長 與語　貴生　　豊橋技術科学大学国際課国際企画係長 山田　敏也　　豊橋技術科学大学国際課国際教育支援室主任

6. ICCEED スタッフ一覧

氏　名	所　属　等
穂　積　直　裕	ICCEED センター長、電気・電子情報工学系（兼任）
髙　嶋　孝　明	ICCEED 教授、スーパーグローバル大学推進室長（兼任）
澁　谷　　晃	ICCEED 准教授、CIE 准教授（兼任）
余　語　豊　彦	ICCEED 特任助教
井　上　隆　信	ICCEED 教授（兼任）、建築・都市システム学系教授
中　内　茂　樹	ICCEED 教授（兼任）、情報・知能工学系教授
井　佐　原　均	ICCEED 教授（兼任）、情報メディア基盤センター教授
関　下　信　正	ICCEED 准教授（兼任）、機械工学系准教授
Satryo Soemantri	ICCEED 客員教授（バンドン工科大学客員教授）

＜事務担当＞

氏　名	所　属　等
田　中　基　久	国際課長事務取扱
與　語　貴　生	国際課国際企画係長
城　本　美乃里	国際課国際企画係付　事務補佐員
浦　本　　咲	国際課国際企画係付　事務補佐員

国立大学法人豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構（IGNITE）
国際交流センター（CIR）

Center for International Relations（CIR）,
Institute for Global Network Innovation in Technology Education（IGNITE）,
Toyohashi University of Technology

センター長　挨拶

豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構
国際交流センター長
大　門　裕　之

国際交流センターのセンター長となり二年目を大過なく務めることができました。これも国際交流センター教員のみならずグローバル工学教育推進機構の教職員および国際課の皆様のご尽力によるものであり、深く感謝の意を表します。

これまでの全ての事業の見直しを進めると同時に、経費節減、効率向上、プログラムの改善、より高い効果を得るための工夫を施しました。その際、役割分担を明確にし、誰がどの業務に携わっているかの確認を随時行いました。これに加えて新規の事業の立ち上げを多く行いました。一部はチャレンジングなものもあったため、センター教員が取り組む作業の負担が著しく増加しました。今後も業務が増える可能性があるため、より一層の効率化を進める必要があると感じております。加えて、留学生が今後増加することが見込まれていることから、その対応には全学的な取り組みが不可欠であると感じております。その際、教職員全員が本学の多文化共生・グローバルキャンパスの実現に積極的に取り組める雰囲気づくり、環境づくりが必要です。このことも国際交流センターの一つのミッションであり、今後の課題であると考えております。その初めの一歩として実施したことが留学生の指導に携わる教員全員との面談です。留学生を指導する際の注意事項を改めて確認させていただくと同時に、国際交流センターとのより良い関係を築くための意見交換を行いました。これは今後も続けます。

平成 27 年度に特に力を入れた一つ目は、国際交流会館の管理・運営の見直しです。会館チューターとの月例ミーティングを通し、国際交流会館が見違える程、整理整頓が進み、管理・運営体制を整えることができました。二つ目としては、国際交流センター教員全員が留学生相談担当教員となって留学生全員をフォローするということです。日本語クラスを受講している学生、国際プログラムの学生、新入生、就職活動を控える学生それぞれに担当者を決め、日頃から声を掛けることによって、さらに良い留学生との関係の構築を目指し、様々な相談をし易い環境を整えました。

次年度は、「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成に向けて、幅広い観点からこれまでの制度や業務内容を見直し、整理を行い、改善に取り組みます。引き続きご理解とご協力の程、どうぞ宜しく御願い申し上げます。

1. 教育活動

(1) セミナー

日本人学生対象留学セミナー

平成27年11月10日（火）に、㈱マイナビ就職情報事業本部グローバル採用支援課のキャリアアドバイザーを講師に迎え、日本人学生対象留学セミナーを開催した。タイトルは、「留学生と就職 ～留学からキャリア～ 」である。

国際交流センターでは、近年、日本人学生の海外留学を支援する機会が多くなり、その際に、学生から「海外での経験は将来のキャリアに対し、どのように効果的に生かすことができるか？」「企業は海外経験をどのように評価しているのか？」などの質問が寄せられるようになった。その一方で、マイナビの担当者からは、以前から海外経験のある日本人学生に特化した企業説明会の存在や、そうした学生に対する企業のニーズの高さについての情報を得ていたが、なかなか学生に伝える機会がなかった。このような背景から、本学では初めてとなる日本人学生を対象とした留学セミナーを開催するに至った。

セミナー当日は、海外留学に興味がある13名の日本人学生が参加した。セミナーでは、単なる観光旅行ではなく、慣れない環境に身を置く経験をした学生の行動力やバイタリティーを企業は評価することや、TOEIC スコアは600点以上が最低限必要であること、学生のスペック（大学名や専門）ではなく将来のポテンシャルを重要視することなどが留学後の就職活動をする上でのポイントであることが伝えられた。さらに、海外留学を行う際には、語学力の向上はもとより、ビジネス視点を持つことや、表現力を身に付けること、情熱を持つことなど、人間力を高めることも重要であるとアドバイスがあった。

今回のセミナーは、グローバルな舞台での活躍を目指す本学の学生にとって、海外留学の経験や工学的なセンスが、将来いかに重要となるかを知る良い機会となった。

(2) 集中講座

期　間	内　容	講　師	参加者数
8 月19日～ 8 月20日	ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ大学院・海外実務訓練生対象 マレー語　～言語と文化～	リム・パン・ボイ（本学准教授） タン・ワイ・キアン（本学特任助教） リー・チャン・ユアン（本学学生） ｸ・ｱｽﾞｨﾝ・ﾋﾞﾝﾃｨ・ｸ・ｱｽﾞﾐ（本学学生）	17 名
8 月24日～ 8 月26日	中級者向け TOEIC 対策	河合　信江（アルク専任講師）	12 名
9 月28日～ 9 月30日	英会話	ｼﾞｮﾝ（ｼﾞｪﾎﾞﾝ）・ﾊﾟｰｶｰ・ｱﾚﾝ ｼﾞｭﾆｱ（英語講師）	15 名
3 月 8日	ﾍﾟﾅﾝ研修参加者対象 マレー語　～言語と文化～	リム・パン・ボイ（本学准教授） 蒲原　弘継（本学特任助教） タン・ワイ・キアン（本学特任助教） ﾇﾙ・ｻﾞﾜﾃｨｰﾙ・ｲｼｷ・ﾋﾞﾝﾃｨ・ﾀﾞｳﾄﾞ（本学学生）	15 名

センターでは、毎年１講座12時間～15時間程度の集中講座を３回～４回開催している。講座開始当時の目的は、普段接する機会の少ない外国語に親しんでもらうことであったが、現在は講座のうち一つを、授業で開講している外国語の強化目的で開講している。今年度はマレー語講座を対象者別に夏と春の２回に分けて開講し、その他に、開講希望の多い中級 TOEIC 対策と英会話を開講した。

(3) 日本語研修コースⅠ（初級）

コース概要：大学院進学を目指す国費大使館推薦の研究留学生を主な対象とし、約15週間の日本語予備教育を行う。

①４月期日本語研修コースⅠ

開講期間等：平成27年度４月期＜第21期＞　15週間

４月 8日　プレイスメント
４月14日　オリエンテーション・開講式
４月15日　授業開始
８月 7日　修了式

コーディネーター：村松由起子

修了者：Draganova Vanya Yordanova 計１名

時間割

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 8:50-10:20	日本語 (村松)	日本語 (石川)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)
2 10:30-12:00	日本語 (吉村)	漢字 (吉村)	日本語 (村松)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)

②10月期日本語研修コースⅠ

開講期間等：平成27年度10月期＜第22期＞　15週間

10月 7日　プレイスメント
10月 9日　オリエンテーション・開講式
10月13日　授業開始
３月 2日　修了式

コーディネーター：村松由起子

修了者：Tania Paramita Utomo, Rasyif Teuku Muhammad, Sasongko Diar Fahruddin, Singgih Abraham Bhaskara, Kusumawan Sholihatta Aziz, Pham Thi Huong Ngat, Dollmat Khairul Irman, Ambar Slilistyo Wardani　計８名

時間割

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 8:50-10:20	日本語 (村松)	日本語 (吉村)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)
2 10:30-12:00	日本語 (吉村)	漢字 (吉村)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)

(4) 日本語研修コースⅡ（初中級）

コース概要：初級を終えた学習者が、中級に向けて日本語能力の向上を図り、専門教育において日本語の使用が可能になるよう基礎的な能力を養うために開講する。

①４月期日本語研修コースⅡ

開講期間等：平成27年度４月期＜第５期＞　15週間

４月 8日　プレイスメント
４月15日　授業開始
８月 5日　授業終了

コーディネーター：村松由起子

受講者：Witthaya Daodon, Nihan Karatas, Nguyen Chi Linh, You Na Lee, Surya Giri 計５名

時間割

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 9:30-10:15		初中級文法 (村松)	初中級会話 (村松)		
3 13:30-14:15				初中級漢字 (村松)	

②10月期日本語研修コースⅡ
開講期間等：平成27年度10月期＜第６期＞　15週間
10月 7日　プレイスメント
10月13日　授業開始
３月 2日　授業終了
コーディネーター：村松由起子
受講者：You Na Lee, Draganova Vanya Yordanova, Nguyen Ngoc Duong, Ida Sri Wardani　計４名

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 9:30-10:15		初中級文法 (村松)	初中級会話 (村松)		
3 13:30-14:15				初中級漢字 (村松)	

(5) 日本語補講・Basic Japanese

コース概要：日本語能力を有しない留学生、研究者、その家族を対象とし、日本で日常生活を送る上で必要な基礎的な日本語を教える。

①前期　Basic Japanese
開講期間：平成27年４月～７月
コーディネーター：村松由起子
クラス編成及び受講者数

クラス名	回数	受講者数
Basic Kanji	15	5
Basic Grammar	15	9
Basic Conversation	15	9

時間割

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 8:50-10:20					Basic Conversation (神崎)
2 10:30-12:00		Basic Kanji (吉村)			
3 13:00-14:30					
4 14:40-16:10			Basic Grammar (吉村)		

②後期　Basic Japanese
開講期間：平成27年10月～平成28年２月
コーディネーター：村松由起子
クラス編成及び受講者数

クラス名	回数	受講者数
Basic Kanji	15	9
Basic Grammar	15	13
Basic Conversation	15	13

時間割

	月　Mon.	火　Tue.	水　Wed.	木　Thu.	金　Fri.
1 8:50-10:20					Basic Conversation (神崎)
2 10:30-12:00		Basic Kanji (吉村)			
3 13:00-14:30					
4 14:40-16:10			Basic Grammar (吉村)		

2. 留学生相談・支援

(1) 留学生相談

国際交流センターでは、留学生の入学時のガイダンスをはじめ、それ以降の学生生活においても留学生をサポートする体制を整えている。留学生の相談窓口として、次のものを用意している。

1．留学生相談担当教員による相談

留学生が学生生活で直面する様々な困難に対応するほか、履修全般に関する相談、就職相談、進学相談など、幅広い相談を受け付けている。

2．国際課留学生係の相談窓口

ビザ、奨学金、宿舎、その他様々な手続きの書類などに関する相談を受け付けている。

3．国際交流会館における生活相談

２名のチューターが国際交流会館に居住し、居住する留学生の生活全般について相談を受け付けている。

(2) 履修相談会

国際交流センターでは、平成23年度から学生支援室と共催で履修相談会を開催している。履修相談会では、各系および国際プログラムから選ばれたチューター２～５名が留学生を含む新入生・在学生に対して科目選択のアドバイスを行っている。平成27年度は前期・後期のそれぞれ開始直後（前期：４月８日～14日、後期:10月５日～８日）に開催し、前期には104人（うち留学生19人）、後期には49人（うち留学生人20名）の相談者が各系のブースを訪れた。

(3) 学業相談会

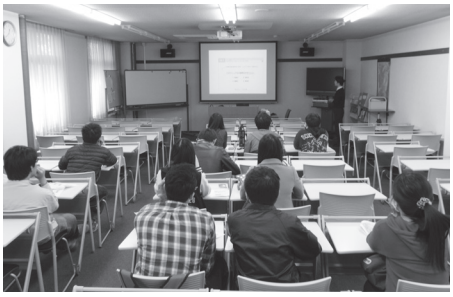
学部留学生は日常生活に困らないレベルの日本語能力を有するものの、ネイティブレベルに達しているものは少ない。特に来日まもなく、はじめて日本に留学している留学生の中には、日本語で開講される講義の単位取得に苦労する者が多い。国際交流センターではこうした学部留学生の単位取得のサポートを行うために、平成22年度から学業相談会を実施している。学業相談会では、相談担当教員（桂田・蒲原）が学部留学生の単位取得状況と学業の進捗状況を把握した上で、学業についての適切なアドバイスを行っている。また、単位の取得に困難を伴う留学生に対しては、個々の科目の補習を行うパワーチューターを配置して、単位取得のサポートを行っている。

(4) 留学生のための就職支援

留学生のための進路・就職ガイダンスおよび学内企業説明会を下記のとおり実施した。日本のビジネス習慣や就職活動への理解を深めるため、留学生を対象にきめ細かな指導および支援を行っている。

第１回実施日時：11 月 6 日（水）18：00 ～ 19：30
内容：進路確認と就職活動の進め方等（㈱マイナビ協力）
第２回実施日時：12 月10日（木）14：40 ～ 16:10
内容：企業の選び方、エントリーシートの書き方、
　　面接対策（㈱オリジネーター協力）
第３回実施日時： 2 月 5 日（金）18：00 ～ 20：00
内容：ASEAN 留学生向けの自己 PR ワークショップ
　　（日本アセアンセンター協力）
場所：A2 棟 201 講義室、IGNITE 棟 105 教室
担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係

(5) 留学生のための日本語能力試験等説明会



留学生の就職活動支援の一環として、日本語能力試験、ビジネス日本語能力テスト等の日本語資格試験に関する説明会を実施した。

第１回実施日時： 4 月 24 日（金）12：10 ～ 12：50
場所：IGNITE 棟 105 教室
担当：村松由起子　吉村弓子（国際交流センター 日本語担当教員）
参加者数：11 名
第２回実施日時：10 月 30 日（金） 12:10 ～ 12:50
場所：IGNITE 棟 105 教室
担当：村松由起子　吉村弓子（国際交流センター 日本語担当教員）
参加者数：５名

(6) 安全講習会（自動車等の運転）

新入留学生を対象とした安全講習会を 2 回実施した。本講習では豊橋警察署から講師をお招きし、日本の交通ルール、保険、事故にあった場合の対処法などについて説明していただいた。特に日本の運転免許証の取得方法、国際運転免許証の注意点について詳細に確認を行う等、渡日間もない留学生にとって、本講習は日本での安全な留学生活を始める上で重要なものとなっている。

第１回実施日時： 4 月 3 日（金）17：40 ～ 18：00
第２回実施日時：10 月 2 日（金）16：45 ～ 17：05
場所：A2 棟 101 講義室
担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係

(7) 留学生引っ越しセミナー

留学生を対象とした引っ越しセミナーを実施した。本セミナーでは（株）レオパレス 21 学校法人営業部の方を講師にお招きし、日本の物件賃貸契約など慣習や注意点についてお話しいただいた。留学生にとって、大変有意義なセミナーとなった。

日時： 1 月 21 日（木）18：00 ～ 19：00
場所：IGNITE 棟 105 号室
担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係

3. 留学生交流

(1) センター主催行事一覧

No.	行事名	内容	開催日	参加者数
1	外国人留学生・ガイダンス / チューターガイダンス・交通安全講習会及び懇親会	新入学外国人留学生のためのオリエンテーション及び情報交換会、留学生をサポートする学生へのガイダンス、日本で車を運転する場合の交通規制や保険、税等についてのレクチャー	4 月 3 日	150
2	第 17 回国際交流デー（リサイクルデー）	留学生のための家具電化製品リサイクル活動	4 月 6 日	100
3	国際研修プログラム（受入）	バンドン工科大、中国東北大学、マレーシア科学大学、マレーシア工科大、ホーチミン工科大の学生とワークショップ、関係企業訪問など	8 月30日～ 9 月 6 日	35
4	外国人留学生・ガイダンス / チューターガイダンス・交通安全講習会及び懇親会	新入学外国人留学生のためのオリエンテーション及び情報交換会、留学生をサポートする学生へのガイダンス、日本で車を運転する場合の交通規制や保険、税等についてのレクチャー	10月 2 日	150
5	第18回国際交流デー（リサイクルデー）	留学生のための家具電化製品リサイクル活動	10月 6 日	80
6	海外高校生招へいプログラム	海外の優秀な高校生を招き大学の研究、進路等に関する情報を紹介、科学技術への理解を促す	10月25日～31 日	10
7	第19回国際交流デー（世界のお茶会）	日本人学生と留学生が母国のお茶、お菓子を提供、その他ステージパフォーマンスで学内関係者と交流	11月13日	360
8	外国人留学生学外研修	文化体験・施設見学を通じ留学生同士、教職員との親睦を図る（京都）	12月21日～22 日	38
9	留学生意見交換会・懇談会	留学生支援団体等と意見交換会及び懇談会	1 月25日	250
10	特別推薦入学者等の海外研修	マレーシアに滞在し、異なる文化・社会に接しながら学生との交流・ホームステイを通じてグローバルな物の見方や考え方を養う	3 月13日～21日	15
合計				1,188

(2) 国際交流デー

国際交流センターでは、本学における日本人学生・教職員と留学生・外国人教職員との交流を活発にし、キャンパスの国際化を推進するため、国際交流デーを実施している。

○世界のお茶会

11月13日（金）にA棟横テント下で実施。トルコのトルコティー、マレーシアのテータリック、日本の抹茶など８つの国と地域の学生がお茶をふるまい、360名の参加者同士で交流を行った。

○リサイクルデー

本学教職員・学生からリサイクル品を提供していただき、新しく入学した留学生に提供するイベントを下記の通り実施した。

実施日（春）：平成27年 4月6日（月）

（秋）：平成27年10月6日（火）

場所：国際交流会館

(3) 留学生学外研修

12月21日（月）、22日（火）に外国人留学生学外研修を実施した。この学外研修は、当該年度に入学した留学生を対象に日本の文化、歴史における名所・旧跡、市街地等の見学、日本文化体験等を通じて日本への理解を深めてもらうことを目的として毎年実施している。

今年度は、38名（日本人チューター２名含む）の参加があり、世界文化遺産である京都市内の建造物の見学、京都市市民防災センター、友禅染伝統文化体験等、留学生の希望を取り入れて実施した。参加者からは日本への理解が深まった、地震のあまりない国から来たので地震の知識を得る貴重な機会となったなどの声が聞かれ、有意義な学外研修となった。

（4）地域交流

①語学講師等派遣

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	らくらく英語会話クラブ	蒲郡ＧＩＡ	蒲郡国際交流協会の英語クラブの講師	６月２日 ９月３日	4
2	″I love Toyohashi ″English Camp	豊橋市教育委員会	市内在住中学生の英語力向上を目指す英語体験活動	７月24日 ８月21日	3
3	English Summer Camp	新城国際交流協会	新城市の中学生と英語を使って交流　ＡＥＴ講師の補助業務	８月17日	7
4	世界の料理教室	豊川市国際交流協会	豊川市国際交流協会メンバーの希望者にマレー料理を教える	10月31日	1
5	豊橋南高校　英語研修	豊橋南高校	高校生に英語で母国紹介など	11月19日	5
6	時習館高等学校英語研修①②③	時習館高等学校	高校生による英語口頭プレゼンおよびポスタープレゼンへのアドバイス等をする（英国での合同研究発表会に向けて）	10月25日 12月19日 １月30日	52
7	時習館高等学校英語研修「英語村」①②	時習館高等学校	高校２年生全員とグループ単位で英会話交流（時習館高校のSSH事業）	12月９日 12月12日	40
合計					112

②まつり等

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	留学生招待花見の会	豊橋地区日中友好協会	花見をしながら日中友好協会の方と交流	４月５日	3
2	手筒花火特別放揚　①②	豊橋市役所観光振興課	吉田城鉄櫓前広場にて訪日外国人と留学生を対象にした手筒花火を鑑賞	６月 ３月	162
3	日東電工国際交流クラブ①②③④⑤	日東電工国際交流クラブ	様々なアクティビティ、見学先でメンバーと交流	7月・8月・ 9月・10月・3月	22
4	国際交流さくら総会	新城国際交流協会、国際交流さくら	座禅及び書道体験	６月20日	7
5	鳳来寺山ハイキング	国際交流さくら	鳳来寺山へハイキング・足湯	６月28日	4
6	豊橋祇園祭鑑賞会	豊橋市国際交流協会	豊橋祇園まつりにて、桟敷席から花火大会を鑑賞する	７月18日	56
7	豊橋シニアライオンズ交流会	豊橋シニアライオンズクラブ	日本食を作って交流	９月14日	6
8	中国留学生と日中友好協会会員と餃子を作る会	豊橋地区日中友好協会	餃子作りと試食を通して中国留学生と友好交流を行う	９月26日	4
9	Happy Day Camp	たはら国際交流クラブ	BBQを通して国際交流	10月４日	8
10	細谷小学校との交流会	細谷小学校	小学生とゲームやプレゼンテーションを通じて異文化交流体験	10月19日	13
11	Youth Conference	新城ユース会	新城ユースの会会員と英会話で交流	10月24日-25日	10
12	豊橋まつり	豊橋市国際交流協会	豊橋国際交流協会の方々と総踊りに参加	10月17日	30
13	世界のお茶と音楽のつどい	新城市国際交流協会 国際交流さくら	新城市民を対象に音楽とお茶を通じ交流	３月５日	4
合計					329

③ホーム・ビジット等

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	第28回JAPAN TENT ーいしかわー	JAPAN TENT 開催委員会事務局	留学生を石川県に招待し、伝統文化を体験しながら国際交流を深める。ホストファミリー宅にも滞在	8月20日-26日	1
2	蒲郡海のふれあいツアー	蒲郡国際交流協会	蒲郡市民とホームステイを通して交流	8月22日-23日	3
3	ヒッポファミリークラブ１泊ホームステイ	ヒッポファミリークラブ	日本の家庭に一泊ホームステイ	11月28日	4
4	留学生との交流会（佐久島会）	蒲郡GIA会員	蒲郡GIA会員別荘での交流会。バーベキュー、釣り、散策など	4月・6月・ 1月・3月	7
合計					15

4. 国際交流

(1) ニューヨーク市立大学クイーンズ校学部生受入プログラム /QC Exchange Program

Duration: May 30th～June 12th (13 days)
Partner University: Queens College (QC), City University of New York
Staff: Ryan, Kamahara, Takagi, Sasao, Levin, members of 2015 Global FD

The QC Exchange Program was created in 2015 as a part of an MOU between TUT and QC, as a reciprocal arrangement to our sending FD members to QC for training. In return we received 5 students from QC for a 2 week program. The main goals were to teach the American students something about culture and technology in modern Japan. By twinning this program with the Global FD program for the KOSEN teachers, we experimented with the idea of having two groups, one from New York and the other from Japan, who could help each other as partners in the two-way exchange.

This program offered a range of classes and activities for the American students:
Basic Japanese -
Although this was not a language program, the participants received some survival Japanese classes to help them get by while in Japan.

Culture and Technology Class -
In this class the QC students and Global FD (GFD) participants discussed a series of broad themes relating to Japanese culture and society, based on selected text from the book 'Japan: The basics' by Christopher Hood. In the final 30 minutes of each class, one of the GFD professors gave a short lecture about their field of scientific research.

Hands on Technology Experience -
The American students visited each of TUT's five departments, where they were given a 'hands on' interactive tour of their activities.

Japanese Culture Class -
The QC students joined various TUT clubs for one session each to learn about student life, and Japanese culture ranging from manga to robotics.

In addition to the above, the QC students also went on several day trips, to take in aspects of Japanese culture or technology, such as trying on kimono or visiting Toyota's museum.

※This program was sponsored by JASSO (Japan Student Services Organization).

(2) 高校生招へいプログラム（受入）

趣旨：マレーシア、ベトナム、モンゴルのトップレベルの高校から、日本への留学を検討している高校生10名を招へいする。日本の大学の教育システム、日本の大学の雰囲気、勉学・研究の内容、留学時の生活、卒業・修了後の進路等に関する情報を伝え、日本への留学と日本の科学技術への理解を促すことを主な目的とする。また、本学のスーパーグローバル大学事業の一環として平成30年４月に開始する「グローバルアーキテクト養成コース」での学生獲得に向けた取り組みの一つであるため、引率の教員４名に対しても留学生のサポート体制等を紹介し、日本への留学に対する理解を深めることを狙う。

参加校：モンゴル・新モンゴル高等学校（3名）、ベトナム・レホンフォン高校（3名）、マレーシア・ジットシン高校（2名）、マレーシア・チュンリン高校バターワース校（2名）
期間：10月25日（日）～10月31日（土）（7日間）
内容：1）本学の先端研究施設および研究室の見学、2）日本滞在中に必要となる簡単な日本語会話の講義、3）本学留学生との意見交換会、4）日本文化体験（岡崎城および三河武士のやかた家康館見学、市内文化施設（三ノ丸会館）での華道・茶道体験）、5）スーパーサエインスハイスクールである時習館高校との交流会、6）学外施設・企業見学（浜松科学館見学、トヨタ本社工場およびトヨタ会館ミュージアムの見学）

本学の植物工場を見学し、説明を受ける高校生

※この活動は（独）科学技術振興機構の日本･ｱｼﾞｱ青少年ｻｲｴﾝｽ交流事業さくらｻｲｴﾝｽﾌﾟﾗﾝの支援を受けて実施された。

(3) 国際研修プログラム（受入）

趣旨：１）工学を学んでいる優秀なアジアの大学生を協定大学から招へいし、本学の特徴である異分野融合による価値創造型工学研究の最先端の施設を紹介する。２）本学日本人学生・留学生とのディスカッション・研究室体験を通して異分野・異文化同士の交流を深め、今後アジアをリードするイノベーション人材の育成に貢献する。３）日本語会話の学習や日本文化の体験、近代化産業遺産の見学を通じて日本の文化・技術に対する理解を促進する。

参加大学：バンドン工科大学（２名）、マレーシア工科大学（３名）、マレーシア科学大学（４名）、ホーチミン市工科大学（４名）、中国東北大学（４名）　計17名

期間：平成27年８月30（日）～９月６日（日）

内容：本学研究施設の見学、研究室訪問・ゼミ体験、ディスカッション、プレゼンテーション、キャンパスツアー、日本語学習体験、本学留学生との交流、サークル活動体験、豊橋国際交流協会アゼリア会協力による茶道・華道体験、豊橋市資源化センターおよびトヨタ産業技術記念館の見学、開講式、歓迎セレモニー、閉校式

生け花体験

グループディスカッション

※この活動は（独）科学技術振興機構の日本・ｱｼﾞｱ青少年ｻｲｴﾝｽ交流事業さくらｻｲｴﾝｽﾌﾟﾗﾝの支援を受けて実施された。

(4) インドネシア Insantama 高校受入

インドネシア・Insantama 高校は首都ジャカルタの南部にあるボゴール市に６年前に創設された私立の理系高校である。高校３年生全員（60名）が、親や大学の資金に頼らず生徒自らがプログラムの企画をし、企業などからの支援を受けて海外訪問する「Advanced Leadership and Management Training（インドネシア語名：Latihan Kemimpinan dan Manajemen Tingkat Akhir)」プログラムの一環として平成27年11月４日に本学を訪問した。まず初めに井上光輝理事・副学長より歓迎の挨拶の後、スーパーグローバル大学創成支援事業推進室長の高嶋孝明教授より、本学の紹介及びスーパーグローバル大学事業の一環として平成30年４月に開始する「グローバルアーキテクト養成コース」の説明を行った。次に、Insantama 高校の生徒７名が今回のプログラムのテーマ″The Leadership and Management Study to Japan″について、日本語も交えながら英語でのプレゼンテーションを行った。午後からは５グループに分かれてラボツアーを行い、本学インドネシア人学生の案内により、各研究室の様子を見学した。高校生徒からは研究内容を始め、豊橋での生活や入試に関する情報等について熱心な質問があり、日本への留学および本学進学への興味の高さが窺えた。

本学の研究施設を見学する高校生

受入日：11月４日（水）

担当教員：蒲原弘継特任助教

(5) 対日理解促進交流プログラム　インド大学生訪日団受入

平成28年１月22日（金）、対日理解促進交流プログラム（JENESYS2015）によりインド情報技術大学ジャバルプール校の大学生27名、大学院生２名、引率教員１名が、日本の大学との交流を目的に本学を訪問した。このプログラムは、一般財団法人日本国際協力センター（JICE）が運営するもので、JICE からは３名の帯同者があった。本学としては、対日理解促進交流プログラム（KAKEHASHI Project）に採択され、同年３月にシアトルへ派遣されることになっていたことから、この訪日団を受入れ、当日におけるほとんどの対応は、シアトルへ派遣される本学学生が行った。

本学の学生がスライドを用いて豊橋周辺の地域と豊橋市、本学の紹介をし、インドの代表者がインドの紹介を行った。インドに関する質疑応答が活発に行われた。その後、シアトル派遣学生の案内のもと、キャンパスツアーとして、学内の主要箇所を見学し、１～３系の研究室を訪問した。昼食の際も本学の学生および留学生とも歓談をした。半日の限られた時間であったにも関わらず、インドの大学生は充実した時間を過ごせたようで多くの学生から深く感謝され、たいへん喜び帰路についた様子であった。対応した本学の学生も、多くの面でよい経験になった。

(6) 特別推薦入学者等の海外研修（派遣）

本研修は、３年次特別推薦入学者および平成27年度前期卓越した技術科学者養成プログラムの希望者を対象に、マレーシア・ペナンにおける約１週間の海外研修を通じて、国際社会で活躍するグローバル人材の育成に資することを目的としている。ペナン校でのマレーシア科学大学学生とのワークショップをはじめ、マレーシア科学大学（メインキャンパスおよびエンジニアリングキャンパス）の研究室等の見学や日系企業（Panasonic Automotive System 社）と海外企業（Mini-circuit 社）の見学、ジョージタウン（世界遺産）の見学、ホームステイ（２泊）など短期間で充実した内容となっている。

参加学生：特別推薦入学者および平成27年度前期卓越した技術科学者養成プログラム
　　学部３年生15名
期間：３月13日（日）～３月21日（月）（９日間）
引率教職員：ライアン ユージン准教授、蒲原弘継特任助教、萩原孝明主任
ペナン校：京兼 純特任教授（国際教育センター）

外国企業見学

講義を受ける参加者達

（7）対日理解促進交流プログラム　KAKEHASHI プロジェクト（派遣）

日時：平成28年３月８日（火）～15日（火）

一般財団法人日本国際協力センター（JICE）が実施する青少年交流事業に申請、採択され、本学日本人学生24名が参加した。

在学留学生情報

(1) 外国人留学生受入状況

区　分	在籍身分状況												合　計			
	正規生									非正規生						
	学部			修士			博士			研究生等			国費	私費		合計
	国費	私費		国費	私費		国費	私費		国費	私費					
		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費	
◆アジア◆																
1 インド				1		1							1		1	2
2 インドネシア			2	2		4	5		13				7		19	26
3 ベトナム			10	1		8			3				1		21	22
4 カンボジア									1						1	1
5 スリランカ						2									2	2
6 タイ							1						1			1
7 大韓民国						1			2						3	3
8 中華人民共和国			3			4			1						8	8
9 ネパール						1									1	1
10 パキスタン				1									1			1
11 バングラデシュ			1	1			1		1				2		2	4
12 マレーシア		35	1		8	14			9					43	24	67
13 モンゴル			4			1									5	5
14 ラオス	1		2			2							1		4	5
◆中南米◆																
15 ペルー							1						1			1
◆ヨーロッパ◆																
16 ウズベキスタン									1						1	1
17 ドイツ						1						1			2	2
18 ブルガリア										1			1			1
19 オランダ												2			2	2
◆中東◆																
20 アフガニスタン						2									2	2
21 トルコ				1									1			1
◆アフリカ◆																
22 エジプト							2						2			2
23 ガーナ							1						1			1
24 ウガンダ			1	1									1		1	2
25 タンザニア						1	1						1		1	2
26 チュニジア						1	1						1		1	2
小　計	1	35	24	8	8	43	13	0	31	1	0	3	23	43	101	167
合　計	60			59			44			4			167			

H27.5.1 現在

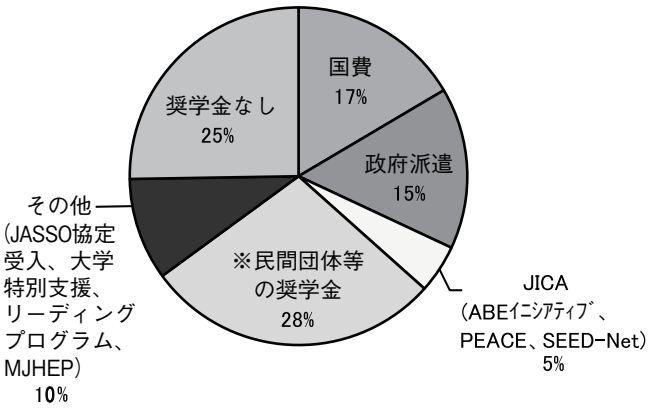
備考：平成16年12月１日より、文部科学省からの通達に基づき、JDS 事業により奨学金を受給している学生を、「私費」から「政府派遣」に切り替えた。

(2) 外国人留学生宿舎状況

区　分	宿舎状況																		合　計			
	大学宿舎									大学宿舎以外												
	国際交流会館			学生宿舎			国際棟			公営住宅			民間アパート			社員寮			国費	私費		合計
	国費	私費		国費	私費		国費	私費		国費	私費		国費	私費		国費	私費					
		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費		政府	自費	
◆アジア◆																						
1 インド	1														1				1		1	2
2 インドネシア	2		4			1				2		2	3		12				7		19	26
3 ベトナム			2			6	1		4						9				1		21	22
4 カンボジア															1						1	1
5 スリランカ						1			1												2	2
6 タイ													1						1			1
7 大韓民国						1									2						3	3
8 中華人民共和国						2			1						5						8	8
9 ネパール															1						1	1
10 パキスタン							1												1			1
11 バングラデシュ						1			1				2						2		2	4
12 マレーシア		4							3			8		39	13					43	24	67
13 モンゴル						3									2						5	5
14 ラオス						1							1		2				1		3	4
◆中南米◆																						
15 ペルー													1						1			1
◆ヨーロッパ◆																						
16 ウズベキスタン															1						1	1
17 ドイツ			2																		2	2
18 ブルガリア	1																		1			1
19 オランダ			2																		2	2
◆中東◆																						
20 アフガニスタン			1									1									2	2
21 トルコ							1												1			1
◆アフリカ◆																						
22 エジプト	1									1									2			2
23 ガーナ										1									1			1
24 ウガンダ						1							1						1		1	2
25 タンザニア										1		1							1		1	2
26 チュニジア			1										1						1		1	2
小　計	5	4	12			17	3		10	5		12	10	39	49				23	43	100	166
合　計	21			17			13			17			98						166			

H27.5.1 現在（1名については休学につき帰国中）

(3) 奨学金受給状況　　(H28.1.1 現在)



※民間団体等の奨学金の内訳

日本学生支援機構私費外国人留学生学習奨励費	5
ロータリー米山記念奨学会	5
名鉄国際育英会	5
ＮＧＫ留学生基金	5
愛知のものづくりを支える留学生奨学金	8
にっとくアジア留学生奨学基金	2
ドコモ留学生奨学金	2
マブチ国際育英財団	1
日揮・実吉奨学会	2
市原国際奨学財団	1
ヒロセ国際奨学財団	3
オーエスジー外国人留学生奨学金	4
神野教育財団	1
服部国際奨学財団	2
豊秋奨学会	1
天野工業技術研究所	2
豊田通商留学生奨学金	3
トヨタコミュニケーションシステム奨学金	1
大幸財団	2
合計	55

国際交流センター状況

(1) CALL 教室および自習室利用状況

CALL 教室の授業外開放（４月～８月、９月～２月の平日：９時から19時まで）

CALLラボ教室　利用者数 （自習及び一部授業での利用含む）

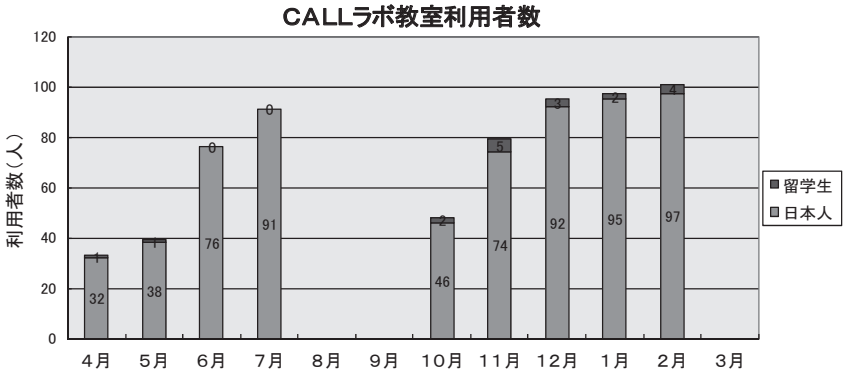
利用月	利用者数(人) 日本人	留学生
４月	32	1
５月	38	1
６月	76	0
７月	91	0
８月		
９月		
１０月	46	2
１１月	74	5
１２月	92	3
１月	95	2
２月	97	4
３月		

	利用者数(人) 日本人	留学生	
４月－３月	641	18	659
月平均	71	2	73
１日平均	3.6	0.1	4

※出入管理システムの入退室記録を基に算出した。

※8月、9月、3月は閉室。

23年度にデジタル式LL システムへの更新、24年度末にパソコン全台およびサーバを更新し、安定した稼働状態にある。昨年度に比べ、授業での利用が増えたせいか、自習での利用も増となっている。



「自習」利用者数

(過去３年)

25年度　347名

26年度　358名

27年度　659名

CALLラボ教室　授業での利用状況

前期

科目	教員名	コマ数	学生数	延べ人数	授業回数
英語ⅠAb	社河内	1	34	510	15
英語ⅠAc	笹尾	1	25	375	15
英米文化論	笹尾	1	13	195	15
英語特別演習J	笹尾	1	30	30	1
英語ⅤBe	秋元	1	58	870	15
英語ⅠBa	レヴィン	1	34	510	15
	合計	6	194	2490	76

後期

科目	教員名	コマ数	学生数	延べ人数	授業回数
英語ⅡAb	社河内	1	34	510	15
英語ⅡAc	笹尾	1	26	390	15
英語 ⅣAj	笹尾	1	23	23	1
言語と文化Ⅳ(水)	笹尾	1	28	112	4
言語と文化Ⅳ(金)	笹尾	1	5	20	4
工学基礎日本語	村松	1	2	30	15
英語 ⅣBe	秋元	1	38	570	15
英語 ⅡBa	レヴィン	1	35	525	15
特別推薦学生授業	レヴィン	1	15	150	10
	合計	9	206	2330	94

「授業」利用者数

(過去３年)

25年度　4,438名

26年度　3,878名

27年度　4,820名

総延べ人数	総実数
4820	400

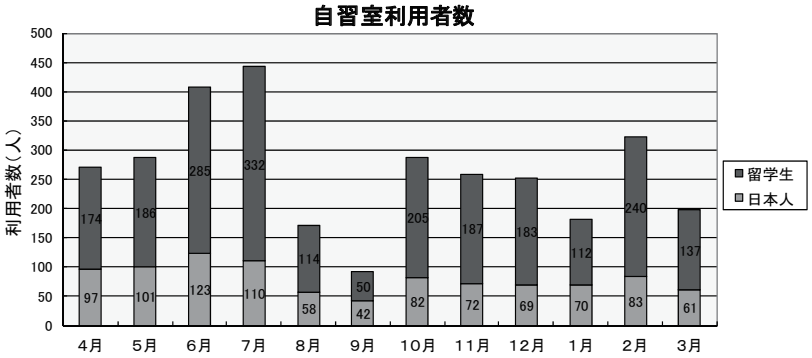
自習室の利用時間（平日の午前９時から午後10時まで）

自習室利用者数

利用月	利用者数（人）	
	日本人	留学生
4月	97	174
5月	101	186
6月	123	285
7月	110	332
8月	58	114
9月	42	50
10月	82	205
11月	72	187
12月	69	183
1月	70	112
2月	83	240
3月	61	137

	利用者数（人）		
	日本人	留学生	
年間合計	968	2,205	3,173
月平均	81	184	
1日平均	4.0	9.2	

※出入管理システムの入退室記録を基に算出した。



26年度末に一部視聴覚機器およびブースの更新を行った。また学習用スペースを新たに設けた。昨年度と比較すると、日本人学生、留学生の利用者ともに増となった。静寂な環境が好評のようである。

3年間の利用者数
25年度　2,770名
26年度　3,092名
27年度　3,173名

（2）平成27年度に導入した主な教材

＜ DVD ＞

●英語、その他外国語（映画）

「アバウト・タイム　愛おしい時間について」
「アメリカン・スナイパー」
「エディ・コイルの友人たち」
「キャプテン・フィリップス」
「グランド・ブタペスト・ホテル」
「シェフ　三ツ星フードトラック始めました」
「ジャージー・ボーイズ」
「チョコレートドーナツ」
「博士と彼女のセオリー」
「ベイマックス」
「マダム・イン・ニューヨーク」
「6才のボクが、大人になるまで。」

●日本語（映画）

「蜩ノ記」

＜ CD ＞

●英語教材

TOEIC テスト新公式問題集 Vol.6

＊ 教材は全て自習室に配架してあります。

(3) 行事一覧

月	日　付	行事
４月	３日（金）	新入留学生ガイダンス・留学生のための安全講習会・懇談会（前期）
	５日（日）	中国留学生招待交流会　日中友好協会（学外招待）
	６日（月）	チューターガイダンス、国際交流会館ガイダンス
	６日（月）	第17回国際交流デー　～ リサイクルデー ～
	７日（火）	第１回 CIR スタッフミーティング
	８日（水）	前期日本語研修コースⅠ（初級）、Ⅱ（初中級）プレイスメントテスト
	８日（水）～14日（火）	前期履修相談会（学生支援室と共催）
	14日（火）	前期日本語研修コースⅠ（初級）オリエンテーション、開講式
	15日（水）	前期日本語研修コースⅠ（初級）、Ⅱ（初中級）、Basic Japanese 授業開始、日本ガイシスカラシップ奨学金授与式
	20日（月）	第１回 IGNITE 運営会議
	21日（火）～23日（木）	第１回留学生のための学業相談会
	24日（金）	第１回留学生のための日本語能力試験等説明会
５月	12日（火）	第２回 CIR スタッフミーティング
	21日（木）	第２回 IGNITE 運営会議
	27日（水）～28日（木）	第２回留学生のための学業相談会
６月	５月31日（日）～６月12日（金）	ニューヨーク市立大学クイーンズ校学生受入
	９日（火）	第３回 CIR スタッフミーティング
	21日（日）	MJHEP 説明会（ﾏﾚｰｼｱ）
	30日（火）	第３回 IGNITE 運営会議
７月	13日（月）～14日（火）	第３回留学生のための学業相談会
	14日（火）	第４回 CIR スタッフミーティング
	15日（水）	会社説明会　東レ（株）
	18日（土）	祇園花火　豊橋市国際交流協会（学外招待）
	23日（木）	国際研修プログラム（受入）参加学生対象事前研修
	28日（火）	第４回 IGNITE 運営会議
８月	４日（火）	第５回 CIR スタッフミーティング
	７日（金）	日本語研修コース（前期入学）修了式
	19日（水）～20（木）	集中講座【マレー語】
	22日（土）	オープンキャンパス
	24（月）～26日（水）	集中講座【中級 TOEIC 対策】
９月	８月30日（日）～９月６日（日）	国際研修プログラム（受入：インドネシア ITB・マレーシア USM、UTM・ベトナム HCMUT・中国　東北）
	28日（月）～30日（水）	集中講座【英会話】
	29日（火）	第５回 IGNITE 運営会議
１０月	２日（金）	新入留学生ガイダンス、留学生のための安全講習会
	５日（月）～８日（木）	後期履修相談会（学生支援室と共催）
	６日（火）	第６回 CIR スタッフミーティング
	６日（火）	第18回国際交流デー　～リサイクルデー～、国際交流会館ガイダンス
	７日（水）	チューターガイダンス（後期）
	７日（水）	後期日本語研修コースⅠ（初級）、研修コースⅡ（初中級）プレイスメントテスト
	９日（金）	後期日本語研修コースⅠ（初級）オリエンテーション、開講式
	13日（火）	後期日本語研修コースⅠ（初級）、研修コースⅡ（初中級）、Basic Japanese　授業開始
	17日（土）	豊橋まつり「総おどり」豊橋市国際交流協会（学外招待）
	20日（火）	第６回 IGNITE 運営会議
	25日（日）～10月31日（土）	高校生招待プログラム（受入：モンゴル 新モンゴル・マレーシア ジットシン、チュンリン・ベトナム レホンフォン）
	30日（金）	第２回留学生のための日本語能力試験等説明会
１１月	４日（水）	インドネシア　Insantama 高校受入
	６日（金）	第１回留学生のための進路・就職ガイダンス　～留学生のための進路・就職アドバイス～
	10日（火）	第７回 CIR スタッフミーティング
	10日（火）	日本人学生対象留学セミナー
	13日（金）	第19回国際交流デー　～（世界のお茶会）～
	16日（月）～17日（火）	第４回留学生のための学業相談会
	17日（火）	第７回 IGNITE 運営会議
	28日（土）	MJHEP 現地面接（ﾏﾚｰｼｱ）
１２月	１日（火）	第８回 CIR スタッフミーティング
	８日（火）	第８回 IGNITE 運営会議
	10日（木）	第２回留学生のための進路・就職ガイダンス　～ ASEAN からの留学生向けガイダンス～
	21日（月）～22日（火）	留学生学外研修（１泊２日）
１月	５日（火）	第９回 IGNITE 運営会議
	12日（火）	第10回CIR スタッフミーティング
	14日（木）～15日（金）	第５回留学生のための学業相談会
	21日（木）	留学生対象引越しセミナー
	25日（月）	留学生意見交換会・留学生懇談会
２月	２日（火）	第10回CIR スタッフミーティング
	５日（金）	第３回留学生のための進路・就職ガイダンス
	９日（火）	第10回IGNITE 運営会議
	10日（水）、12日（金）	第６回留学生のための学業相談会
３月	２日（水）	日本語研修コース（後期入学）修了式
	３日（木）	かけはしプロジェクト事前説明会
	８日（火）	集中講座【マレー語】、特別推薦入学者等の海外研修事前説明会
	８日（火）～15日（火）	かけはしプロジェクト（派遣：アメリカ合衆国ワシントン州シアトル市）
	13日（日）～21日（月）	特別推薦入学者等の海外研修（派遣：マレーシア　USM）
	22日（火）	第11回CIR スタッフミーティング
	29日（火）	第11回IGNITE 運営会議

その他の活動：留学生相談、同窓会、Annual Report 発行

(4) スタッフ出張報告一覧

日　程	用務地	用務先	出張者
4月9日（木）～11（土）	マレーシア・ペナン	Disted College	浜島　昭二
4月15日（水）	名古屋市瑞穂区	日本ガイシ株式会社	大門　裕之
6月5日（金）	名古屋市	トヨタ産業技術記念館	蒲原　弘継
6月20日（土）～23日（火）	マレーシア・クアラルンプール	MJHEP、帝京マレーシア日本語学院	桂田　浩一
6月26日（金）	安城市	デンソー技研センター本社 技能研修所	浜島　昭二
7月7日（火）	静岡市	静岡日本語教育センター	桂田　浩一
8月17日（月）～21日（金）	①タイ・バンコク ②タイ・チョンブリー	①バンコクの４高校 ② The Tide Resort	桂田　浩一
9月5日（土）	名古屋市	トヨタ産業技術記念館	蒲原　弘継
9月5日（土）～6日（日）	常滑市	中部国際空港	大門　裕之
10月21日（水）～26日（月）	①インドネシア・ジャカルタ ②インドネシア・バンドン	①国立ジャカルタ第八高校 ②バンドン工科大学	蒲原　弘継
10月28日（水）	豊田市、岡崎市	トヨタ自動車元町工場他	桂田　浩一 蒲原　弘継
10月30日（金）	浜松市、常滑市	浜松科学館、東横イン中部国際空港本館	蒲原　弘継
11月6日（金）～7日（土）	①沖縄県那覇市 ②沖縄県国頭郡恩納村	①マリエールオークパイン那覇 ②沖縄科学技術大学院大学	大門　裕之
11月12日（木）～14日（土）	中国・瀋陽	東北大学	桂田　浩一
11月17日（火）～20日（金）	マレーシア・ペナン	Disted College	浜島　昭二
12月15日（火）	①岐阜県美濃加茂市 ②愛知県丹羽郡大口町	①ヤマザキマザック美濃加茂製作所 ②オークマ本社工場	蒲原　弘継
12月18日（金）	豊田市	豊田市役所、豊田商工会議所	蒲原　弘継
12月21日（月）～22日（火）	京都市	京都市市民防災センター他	村松　由起子 蒲原　弘継
1月12日（火）～18日（月）	①インドネシア・ジャカルタ ②インドネシア・ボゴール ③インドネシア・バンドン	①私立 Labschool Kebayoran 高校 ②私立 Insantama 高校 ③国立バンドン第三高校	蒲原　弘継
1月26日（火）～29日（金）	タイ・バンコク	Patumwan Demonstration School 他	桂田　浩一
1月26日（火）～31日（日）	マレーシア・ペナン	ペナン校	大門　裕之
2月24日（水）～29日（月）	①インドネシア・ジャカルタ ②インドネシア・バンドン	①国立ジャカルタ第八高校 ②バンドン工科大学	蒲原　弘継
3月8日（火）～15日（火）	米国ワシントン州シアトル市	在シアトル日本国総領事館、ワシントン大学他	大門　裕之
3月13日（日）～3月21日（月）	マレーシア・ペナン	ペナン校、マレーシア科学大学他	ライアン　ユージン 蒲原　弘継

6. 国際交流センタースタッフ一覧

氏　名	所　属　等
大　門　裕　之	CIR センター長、教授（環境・生命工学系兼務）
浜　島　昭　二	CIR 特任教授（国際教育センター兼務）
桂　田　浩　一	CIR 准教授（情報・知能工学系兼務）
村　松　由起子	CIR 准教授
吉　村　弓　子	CIR 准教授
ライアン　ユージン	CIR 准教授（総合教育院兼務）
蒲　原　弘　継	CIR 特任助教
鈴　木　聖　子	CIR 助手

＜事務担当＞

氏　名	所　属　等
中　田　尚　樹	国際課長（～平成27年 4 月）
田　中　基　久	事務局次長、国際課長事務取扱（平成27年 5 月～）
福　村　　静	国際課留学生係係長
栗　田　多映子	国際課留学生係主任
萩　原　孝　明	国際課留学生係主任
梁　瀬　美　紀	国際課留学生係係員
村　田　も　え	国際課留学生係特命事務職員
河　合　智　子	国際課留学生係特命事務職員
松　本　智　枝	国際課留学生係特命事務職員
田　口　悠　里	国際課留学生係事務補佐員
村　越　朱　美	国際課留学生係事務補佐員（～平成27年12月）
高　橋　佳　子	国際課留学生係技能補佐員

国立大学法人豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構（IGNITE）
国際教育センター（CIE）

Center for International Education（CIE），
Institute for Global Network Innovation in Technology Education（IGNITE），
Toyohashi University of Technology

センター長　挨拶

豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構
国際教育センター長
松　田　厚　範

平成24年度に始まった国立大学改革強化推進事業（期間：平成24年度～平成29年度）は、本平成27年度で３年が経過しました。それぞれのプログラムは本格的に実施され、その努力が成果として結実し、さらに新たな展開を模索する時期を迎えつつあります。本学は､本事業においてグローバル教育の強化･展開を担当し、学内にグローバル工学教育推進機構を平成25年10月に設置し、同時に本国際教育センター（Center for International Education: CIE）を発足させ、これを精力的に進めています。

CIE は、
１．海外教育拠点（ペナン校）の設置・運営
２．国際プログラムペナン校特別コースの企画・実施
３．グローバル技術経営（Management of Technology：MOT）を含む海外実務訓練の整備・実施
４．グローバル e- ラーニングの整備・展開支援
５．教職員のグローバル力を高めるためのグローバルファカルティ･ディベロップメント（FD）/ スタッフ・ディベロップメント（SD）の企画・実施
をミッションとし、これらを強力に推進しています。

平成27年度には、高専機構前理事・前明石高専校長である京兼教授が本学海外教育拠点ペナン校常駐特任教授として着任し、高専・両技科大の国際展開力強化が進んでいます。ペナン校を活用した日本人学生の海外実務訓練、高専教員と技科大教員のグローバル FD プログラム及び職員のグローバル SD プログラムも実施されました。また、三機関の海外同窓生交流会（タイ・バンコク、ラオス・ビエンチャン、ベトナム・ハノイ、インドネシア・バンドン）と国際会議第 3 回 IGNITE2016 をより充実した内容で開催することができました。マレーシア科学大学（USM）とは、定期的な協議会、サマースクールの合同実施、共同研究などを通して関係強化が一層進んでおり、特に、ノーベル物理学賞の小林誠教授を招聘して USM で開催したノーベル賞講演会は、大きな注目を集めました。これらの活動は、本学の教職員のみなさまの多大な努力と協力によって支えられており､その様子は､本活動報告書をご覧いただければ､よくご理解頂けるものと思います。

冒頭にも書きましたが、これから本事業と本センターは、本学のグローバル化実現に向けて、一層の発展が求められる重要な時期を迎えます。グローバル工学教育推進機構ならびに国際教育センターの活動に、みなさまの一層のご理解、ご協力、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

1. プログラム

(1) 海外実務訓練（グローバル人材教育システム）

平成28年１月及び２月にペナンで海外実務訓練を実施した。平成27年５月に参加希望学生を募集し、一次と二次の募集で12名の応募者の中から英会話能力を基準に９名を選考した。また４名のマレーシア留学生がペナンでの実務訓練を希望したので、合計13名の参加者となった。日本人学生９名は航空券を各自で購入して日本を発ち、１月５日から８日までマレーシア科学大学（USM）でオリエンテーションを受けて、学生ビザを取得した後、１月11日から企業での実務訓練を開始した。

学生の派遣先企業は全部で10社であった。日本人学生は、派遣される工場が異なる ISO Technology の２名を除き、１社１人の原則を守って、それぞれの企業に１人ずつ派遣した。また、マレーシア留学生４名は TORAY INDUSTRIES(M)、Keysight Technologies に各１名と Daya に２名であった。

派遣先企業と受入れ学生数は、日系企業:3 社３名、多国籍企業:3 社４名、地元企業:4 社６名であった。日系企業は Advantest Engineering、TORAY INDUSTRIES(M)、Clarion、多国籍企業は Continental Automotive Components(M)、Keysight Technologies、Ambu、地元企業は SAM Engineering & Equipments、Mini-Circuits Technologies(M)、DAYA CMT、ISO Technology であった。

学生が企業で受けた実務訓練の内容は、基礎研究から製品開発や品質管理まで幅広いものであった。この実務訓練期間中にペナン校で１月30日に中間報告会、２月20日に最終報告会を実施した。グローバル FD 研修に参加している高専教員の方々にも参加いただき、英語での活発な議論となった。

今年度から学生が航空券を各自購入をしたので、マレーシア入国の場所と日時が学生により異なる結果となったが、特に問題はなかった。また学生の宿泊場所は訓練を受ける工場の近くで、買い物などに便利なアパート（プトラ・プレース）であった。費用は多少高かったが、学生には好評であった。

USM でのオリエンテーション（１月５日）

ペナン校での中間報告会（２月20日）

(2) 教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期 FD）

国立大学改革強化推進事業（三機関連携事業）の一環として、グローバル指向人材育成に必要となる教員（国立高等専門学校教員を含む）の能力強化として､英語による教育指導法を習得させるとともに、異文化間コミュニケーション能力の向上を目的とした「教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期 FD)」の取り組みを実施した。

２年目を迎えた平成27年度は、本学教員２名と高専教員８名（グローバル FD 研修者）が本プログラムに参加した（表 1)。本プログラム研修者は、①本学での３か月間（4 月～６月）の事前英語研修を経て、②交流協定先のニューヨーク市立大学クイーンズ校（QC）において６か月間（7 月～12月）の英語研修を行い、英語での教授法等について本格的に学んだ後、③本学のマレーシア教育拠点「ペナン校」（平成25年12月にマレーシア・ペナン州に設置）を拠点とし、マレーシア科学大学（USM）等の教育機関において英語による授業の実践等を行った（1 月～３月)。

表１　平成27年度グローバルFD研修者およびメンター教員

高専/大学	受講教員	本プログラムのメンター教員 （上段:本学教員，中段:QC教員，下段:USM教員）	所属学科
函館高専	森谷　健二　准教授	堀川　順生　教授	情報・知能工学系
		Prof. Jin FAN	Psychology
		Dr. Asrulnizam Bin Abd MANAF	Electric and Electronic Engineering
東京高専	市川　裕子　教授	梅村　恭司　教授	情報・知能工学系
		Prof. Alice F. ARTZT	Secondary Education and Youth Services
		Dr. Mohd Zuri GHANI	Educational Studies
沼津高専	大沼　　巧　准教授	大平　孝　教授	電気・電子情報工学系
		Prof. Michael TONER Assistant Prof. Ya Ching HUNG	Family, Nutrition, and Exercise Sciences
		Prof. Dr. Mohd Zaid Bin ABDULLAH	Electric and Electronic Engineering
舞鶴高専	竹澤　智樹　教授	関野　秀男　教授	情報・知能工学系
		Assistant Prof. Lev G. MUROKH	Physics
		Associate Prof. Dr. Hashim HUSSIN Hussin	Materials and Mineral resources Engineering
徳山高専	柳澤　秀明　准教授	市川　周一　教授	電気・電子情報工学系
		Prof. Bon SY	Computer Science
		Prof. Dr. Mohd Zaid Bin ABDULLAH	Electric and Electronic Engineering
宇部高専	三澤　秀明　助教	高橋　由雅　教授	情報・知能工学系
		Associate Prof. Changhe YUAN	Computer Science
		Associate Prof. Dr. Zurinahni ZAINOL	Computer Sciences
大島高専	朴　　鍾徳　准教授	北村　健三　教授	機械工学系
		Assistant Prof. Luat T. VUONG	Physics
		Dr. Khairudin MOHAMED	Mechanical Engineering
阿南高専	小林　美緒　講師	石田　好輝　教授	情報・知能工学系
		Prof. Christopher VICKERY	Computer Science
		Prof. Dr. Low Heng CHIN	Mathematical Sciences
豊橋技科大	秋葉　友良　准教授	Prof. Bon SY	Computer Science
豊橋技科大	松井　智哉　准教授	Assistant Prof. Jeffrey MARSH Prof. Nicholas K COCH	Earth and Environmental Sciences
英語メンター教員		加藤　三保子　教授	総合教育院
		Ryan Eugene　准教授	国際交流センター
		Levin David　准教授	総合教育院

1）本学での英語事前研修（平成 27 年 4 月 1 日～ 6 月 15 日）

本グローバル FD 研修プログラムの開始に先立ち、本学における事前説明会（平成27年 3 月12日～13日）を実施し、グローバル FD プログラムの全体説明を行い、さらに、本学グローバル FD 研修教員（高木宏幸講師、笹野順司助教）から TUT・QC 研修内容及び生活等を、高専グローバル FD 研修教員（第一期生：豊田高専　松本嘉孝准教授、岐阜高専　坂本淳講師）からペナン研修内容及び生活等の説明について、実際の体験に基づき情報提供を行った。また、本学メンター教員及び本学 FD 担当教職員との事前の交流を図った。

本学にて 4 月 1 日に開講式を行い、井上光輝理事・副学長の激励のもと本グローバル FD 研修をスタートさせた（図 1）。翌週 4 日から英語研修がスタートし、本研修向けに特別に設計した特別英語プログラム（74コマ：90分／コマ）を受講した。さらに、前年度の研修教員（第一期生）の意見を反映し、英語での会話時間を増やすために、オンライン英会話（25分／日、2 ヶ月間）を研修プログラムに導入した。また、QC からの交換留学生（5 名）との交流を通じた実践的な英語研修（日本の技術や文化などを題材にした授業など）についても新規に取り入れ、研修プログラムの改善を図った。

図１　本学での開講式

本学での英語研修の締めくくりとして、グローバル FD 研修公開授業（Showcase wrap-up，6 月15日）を実施し、各人25分（内、5 分は質疑応答）の英語での模擬授業を行い、本学教員及び学生へ授業を公開した。また、国立高専に対しても GI-net を利用した授業のライブ配信を行った。

また、高専教員は、英語研修以外にも本学のメンター教員（表 1 参照）の研究室に所属し、共同研究

等の取り組みを通じて、研究力強化にも努めた。

2）QC での英語研修（平成27年６月28日～12月24日）

グローバル FD 研修者10名は、６月28日に日本を出発し、QC 学生寮（Summit）での共同生活を開始し、QC 教授陣（Dr. Steven Schwarz、Dr. Donna Gruber、Dr. Eva M. Fernández、Prof. Robert R. Engel、Dr. William McClure など）のサポートのもとで、研修をスタートさせた。６月30日には、英語プレスメントテストを受講し、７段階のレベルにクラス分けされ、English Language Institute（ELI）での「夏季英語集中コース」（６時間／日×４日／週×６週間＝144時間）を受講した（７月６日～８月13日）。秋学期（８月27日～12月23日）からは、QC 教員が本研修者向けに開発した「英語特別プログラム（Teaching in English）」（２時間／週×14週@ Center for Teaching&Learning）を受講し、英語での教授法について本格的に学んだ。また、学生目線から体験的に英語での教授法を習得するために、専門科目１科目（3～4 credits）の単位を修得し、さらに、聴講用として複数科目（４科目程度、50～100時間程度）を受講した。この間、英語スキルの向上を支援するために「英語サポートクラス（English support class）」（３時間／週×８週@ ELI）も同時に受講した。また、QC での英語研修の締めくくりとして各人25分（質疑応答含む）の「Wrap up プレゼンテーション」（12月18日）を実施した（図２）。本発表会には、QC 教授陣に加えて、本学からは、井上光輝理事・副学長、柴田隆行教授、社河内友里講師、黒田清彦国際教育支援室長が出席し、高専機構からは、上月正博理事（国際交流室:黒澤賢一係長、鈴木智美係員が同行）、グローバル FD 第一期生の古山彰一准教授（富山高専）、坂本淳講師（岐阜高専）が出席し、プレゼンテーションスキルの評価を行い、ベストプレゼンター２名を選出した。なお、グローバル FD 教員には QC より修了証書が手渡された。

図２　ＱＣでの Wrap up プレゼンテーション

また、高専教員は、研究力強化とグローバル展開を見据えて QC メンター教員（表１参照）との共同研究等の可能性について模索した。しかし、昨年度と同様に、グローバル FD 研修者と QC メンター教員の専門分野のミスマッチングや、研究室をもたない QC 教員がメンターになるケース等があり、共同研究等に発展させることが難しい状況が多く、改善の余地を残した。しかし、QC 学生の語学パートナーを見つけて英会話の機会を増やす努力をするなど、限られた状況の中でも各自が積極的に活動したことは本グローバル FD 研修の一つの成果と言える。

QC 研修中は、「QC だより」（全10号発行、執筆２名／号）として、QC での英語研修の様子や共同研究の取り組み状況、さらにはニューヨークでの生活情報等を三機関に配信した（本学ホームページでも公開：http://ignite.tut.ac.jp/cie/activities/fd.html）。

3）ペナンでの英語研修（平成28年１月17 日～３月６日）

本プログラムの最終段階として、高専教員８名が本学ペナン校を拠点とした約２か月間の実践的な英語研修をスタートさせた。現地では、これまでスキルアップしてきた「英語コミュニケーション能力」と「英語で授業を行う教授法」の実践として、USM 等の教育機関での英語での授業を実施した。今年度の新たな試みとして、USM では各高専教員の専門性を考慮して各 School に配属し、USM 側の窓口教員（表１参照）との事前コンタクトを取りながら、英語授業の実践、研究紹介などを含む２週間（１月26日、２月19日～３月４日の期間）の研修プログラムを高専教員自らが計画して実践する仕組みを導入した。

また、PSPにおいても1週間（2月1日～2月5日）の研修期間を設け、英語での授業実践に加えて、PSP学生のファイナルプロジェクトの指導などを実践した。今年度のUSM及びPSPでの研修内容については、FD研修者からは非常に高い評価を得ることができた。なお、一部のFD研修者は、DISTED Collegeの学生向けに授業1コマ（2名が実施：2月15日、2月19日）を実施した。受講生の評価結果を表2及び表3に示す。受講生からは概ね良好な評価が得られており、本研修の効果が現れた結果と言える。

図3　ペナン校での修了式

また、本グローバル研修者は、1年間の研修の成果として、「英語で授業をするための教材」を独自に開発した。本教材及び授業2コマ分の動画コンテンツについては、本学教職員ならびに高専機構を通じて高専教員に広く公開し、英語での授業を行うためのFD活動として活用できるよう準備を進めている。

さらに、ペナン研修中には、本学主催の国際会議IGNITE2016（1月27日～29日）において全員が口頭発表を行うことで、研究力の向上にも努めた。また、本学学生の海外実務訓練中間報告会（1月30日）に参加し、積極的に英語で質問するなど、英語能力のスキルアップの効果を発揮して報告会を盛り上げた。さらに、ペナンの日系企業（2月18日：パナソニック、2月19日：東レ、ソニー）を訪問し、グローバル企業の実情を視察し、意見交換を行った。

また、ペナン研修中は、「ペナンだより（グローバルFD)」（全5号発行、執筆2名/号）として、USM等の教育機関での英語授業の実践の様子やペナンでの生活情報等を三機関に配信した（本学ホームページでも公開)。最終号は「1年間を振り返って」と題して、全研修者が執筆し、本グローバルFD研修を総括した。なお、「QCだより」も含めた編集・校正作業については、本学のグローバルFD第一期生である笹野順司助教がスキルアップした英語能力を生かして、1年間に渡り全ての取りまとめを行った。

本グローバルFD研修の締めくくりとして、平成28年3月5日に本学ペナン校において、意見交換を行った後、「平成27年度教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期FD)」の修了式を執り行い、1年間の本プログラムに参加した高専教員8名と、12月までの9ヵ月間研修を行った本学教員2名（秋葉友良准教授、松井智哉准教授）に、井上光輝理事・副学長から修了証書が授与された。修了式後には、ペナン校で盛大な懇親会を行い、1年間のグローバルFD研修の成功の喜びを分ち合った。なお、現地に駐在している本学の京兼純特任教授、現地スタッフのFong Sew Khuan氏、Siew Mian Ooi氏のきめ細やかな対応によって、ペナンでの全研修を滞りなく実施することができた。次年度も本サポート体制でペナン研修を実施する予定である。

4）グローバルFD研修の達成度評価

表4に1年間の研修を終えて本研修プログラムの内容と自己の達成度を評価した研修者のアンケート結果を示す。総じて、満足する研修内容であったと評価できる結果であったと言える。しかし、昨年度と同様に、研修者の中には期待した内容ではなく、自己の達成度に満足していないという厳しい評価もある。本FDに参加した教員は多様であり、研修スタート時点での英語スキルにも大きな隔たりがあり、かつ教員の職階や年齢も異なるため、各自の到達・達成目標には大きな違いがある。このため、単独の研修プログラムで全ての要求を満足させることは非常に難しいことを今年度も痛感した。しかしながら、ペナン研修については、昨年度の反省点を踏まえて、USM及びPSPでの研修内容を大幅に見直すことで、研修者からは非常に高い評価が得られた。また、TUT研修においてもQC交換留学生との交流の機会は、大変によい経験であったとの評価が得られ、本グローバルFD研修プログラムが確実に改善され、進化

していることが伺える結果となった。今年度のFD研修者の意見を反映し、研修者個々の要望をでき得る限り実現できるように､次年度も引き続きプログラムの改善に努力する。表5には本研修でスキルアップできた事項をまとめたものを示している。

表6に本グローバルFD研修での英語スキルアップの定量的評価結果を示す。グローバルFD研修者は、TOEICを2回（4月、翌年5月)、英語スピーキングテスト（アルク教育社TSST）を3回（3月、6月、翌年3月)､QCでのクラス分けテスト(7月)を受験している。研修前後でのTOEICのスコア(グラフ参照)から、本研修プログラムによって、確実に英語能力が向上していることが伺える。また、第一期生と第二期生の研修前後でのTOEICスコアの変化を比較したグラフを見ると、昨年度と同等以上の研修の効果が得られていることがわかる。今年度の研修者の中には、スコアが40%以上もアップした者が3名もおり、スコアの平均上昇率を比較すると、今年度（第二期生）は23%、昨年度（第一期生）は15%となり、ややスコアの上昇率が高い結果となった。このことから、研修プログラムの改善の効果が現れた結果と言える。

以上のことから、次年度以降に改善すべき点などはあるものの、本グローバルFD研修の効果と意義はほぼ達成されたと言える。

表2　USMでの授業評価結果（その1）

			USM				Number of participants in each course							Evaluation results on participants' course satisfaction (Agree:5 - Disagree:1)					
Date			Name	Lecture Title	Time	Campus	Total	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others	N/A	Average	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others
1月	17	日	ベナン着																
	18	月																	
	19	火																	
	20	水																	
	21	木																	
	22	金																	
	23	土																	
	24	日																	
	25	月																	
	26	火	小林 KOBAYASHI	Engineering Education	14:30-15:30	Main Campus	20	20						N/A					
	27	水																	
	28	木																	
	29	金																	
	30	土																	
	31	日																	
2月	1	月																	
	2	火																	
	3	水																	
	4	木																	
	5	金																	
	6	土																	
	7	日																	
	8	月		**Chinese new year**															
	9	火		**Chinese new year**															
	10	水																	
	11	木																	
	12	金																	
	13	土																	
	14	日																	
	15	月																	
	16	火																	
	17	水																	
	18	木																	
	19	金	市川 ICHIKAWA	Welcome to the Infinite World	8 :00-10:00	Main Campus	63	63						3.9	3.9				
	20	土																	
	21	日																	
	22	月	森谷 MORIYA	Actual Electric Noise Problems: Their Causes and Improvements	9:00-11:00	Engineering Campus	75	75						4.3	4.3				
			柳澤 YANAGISAWA	Microprocessor Architecture	14:00-16:00	Engineering Campus	76	76						3.8	3.8				
			朴 PARK	Marine Auxiliary Machinery	15:00-17:00	Engineering Campus	56	43		13				4.1	4.1		4.2		
	23	火	大沼 OHNUMA	Duality in Electric Circuits	10:00-12:00	Engineering Campus	30	30						4.7	4.7				
			三澤 MISAWA	Basic Concepts and Knowledge of Information Theory	11:00-13:00	Main Campus	46	46						4.0	4.0				
	24	水	森谷 MORIYA	Basic OP Amp Circuit: Ideal Behaviors vs Actual Behaviors	10:00-11:00	Engineering Campus	79	79						4.5	4.5				
			朴 PARK	Maritime English for English Communication Board Ship as	15:00-17:00	Engineering Campus	56	43		13				4.2	4.2		4.2		
			小林 KOBAYASHI	Introduction to Numerical Analysis	11:00-11:50	Main Campus	55	55						4.0	4.0				
	25	木	大沼 OHNUMA	Motor Drive Systems	11:00-13:00	Engineering Campus	31	31						4.7	4.7				
	26	金	小林 KOBAYASHI	Introduction to Numerical Analysis II	8:00-9:50	Main Campus	36	36						4.1	4.1				
	27	土																	
	28	日																	
	29	月	柳澤 YANAGISAWA	Instruction Set and Computer Language	14:00-16:00	Engineering Campus	84	84						4.2	4.2				
3月	1	火																	
	2	水	竹澤 TAKEZAWA	Computational Simulation of Materials I	9:30-12:30	Engineering Campus	14	11	3					3.9	3.9	4.0			
	3	木	竹澤 TAKEZAWA	Computational Simulation of Materials II	14:30-17:30	Engineering Campus													
	4	金	市川 ICHIKAWA	Mathematics in Sound and Waves	15:00-17:00	Main Campus	34	34						4.0	4.0				
	5	土																	
	6	日	ベナン発																

表 3　PSP ／ DISTED College ／ PSDC での授業評価結果（その 2）

Date			PSP / DISTED College				Number of participants in each course							Evaluation results on participants' course satisfaction (Agree:5 - Disagree:1)					
			Name	Lecture Title	Time	Campus	Total	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others	N/A	Average	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others
1月	17	日	ペナン着																
	18	月																	
	19	火																	
	20	水																	
	21	木																	
	22	金																	
	23	土																	
	24	日																	
	25	月																	
	26	火																	
	27	水																	
	28	木																	
	29	金																	
	30	土																	
	31	日																	
2月	1	月	森谷 MORIYA	Actual Electric Noise Problems: Their Causes and Improvements	9 : 00-10 : 30	PSP	75	75						4.5	4.5				
			大沼 OHNUMA	Duality in Electric Circuits	11:00-12:30	PSP	120	120						4.4	4.4				
			三澤 MISAWA	Basic Concepts and Knowledge of Information Theory	14:00-15:30	PSP	50	50						4.0	4.0				
			朴 PARK	Marine Auxiliary Machinery	9:00-10:30	PSP	70	70						4.6	4.6				
	2	火	森谷 MORIYA	Basic OP Amp Circuit: Ideal Behaviors vs Actual Behaviors	11:00-12:30	PSP	49	49						4.7	4.7				
			大沼 OHNUMA	Motor Drive Systems	9:00-10:30	PSP	124	124						4.4	4.4				
			三澤 MISAWA	Fundamentals of Source Coding	14:00-15:30	PSP	45	45						4.2	4.2				
			朴 PARK	Maritime English for English Communication Board Ship as	11:00-12:30	PSP	46	46						4.4	4.4				
	3	水	竹澤 TAKEZAWA	Computational Simulation of Materials	9:00-10:30	PSP	105	105						3.4	3.4				
			柳澤 YANAGISAWA	Instruction Set Architecture (Assembly Language)	11:00-12:30	PSP	99	99						4.3	4.3				
			小林 KOBAYAHSI	Numerical Models of Population Growth and Phenomena Observed in	9:00-10:30	PSP	79	79						4.3	4.3				
	4	木	市川 ICHIKAWA	Welcome to the Infinite World	11:00-12:30	PSP	81	81						4.0	4.0				
			柳澤 YANAGISAWA	Single-Cycle Processor	9:00-10:30	PSP	75	75						4.3	4.3				
			小林 KOBAYAHSI	Introduction to Numerical Analysis	9:00-10:30	PSP	73	73						4.2	4.2				
	5	金	市川 ICHIKAWA	Mathematics in Sounds & Waves	9:00-10:30	PSP	81	81						4.0	4.0				
			竹澤 TAKEZAWA	Electronic State/Structure Calculation of Materials	10:30-12:00	PSP	63	63						3.9	3.9				
	6	土																	
	7	日																	
	8	月		**Chinese new year**															
	9	火		**Chinese new year**															
	10	水																	
	11	木																	
	12	金																	
	13	土																	
	14	日																	
	15	月	小林 KOBAYAHSI	Numerical Model of Population Growth and Phenomena Observed in Models	14:00-15:30	DISTED	35					35		3.9					3.9
	16	火																	
	17	水																	
	18	木																	
	19	金	市川 ICHIKAWA	Welcome to the Infinite World	8 :00-10:00	DISTED	81					81		4.0					4.0
	20	土																	
	21	日																	
	22	月																	
	23	火																	
	24	水																	
	25	木																	
	26	金																	
	27	土																	
	28	日																	
	29	月																	
3月	1	火																	
	2	水																	
	3	木																	
	4	金																	
	5	土																	
	6	日	ペナン発																

表４　平成26年度グローバルＦＤ研修アンケート（総括）

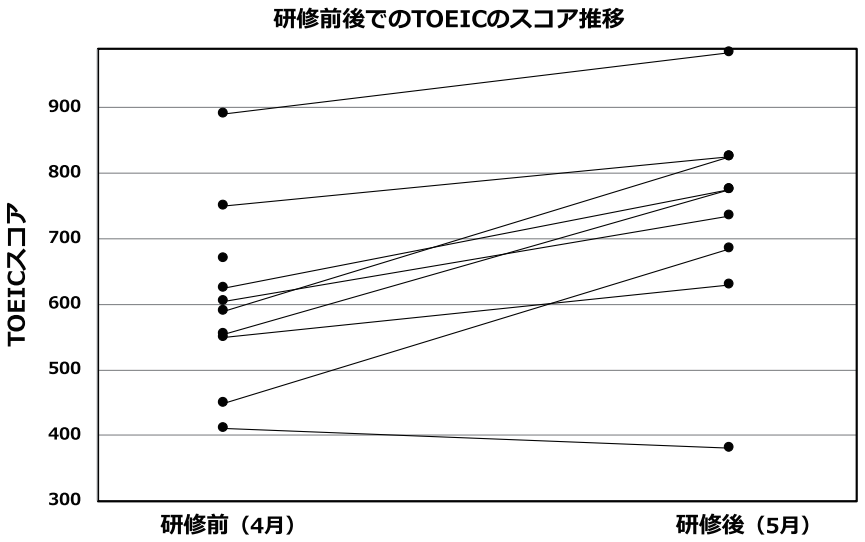
1.TUT 研修					
1-1)英語研修(アルク)	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
		7	1		
1-2)研究活動	出来た	ほぼ出来た	どちらともいえない	あまり出来なかった	出来なかった
		1	2	4	1
1-3)生活環境	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満	不満足
	3	5			
2.QC 研修					
2-1)英語研修(@ELI)	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	2	4	1		1
2-2) 英語研修 (Teaching in English@CTL)	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	1		2	3	2
2-3)専門科目の受講	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	2	4	2		
2-4)研究活動(共同研究など)	出来た	ほぼ出来た	どちらともいえない	あまり出来なかった	出来なかった
	1			3	4
2-5)生活環境	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	1	3	2	2	
3.ペナン研修					
3-1)英語授業の実践	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	3	5			
3-2)英語授業以外の活動	出来た	ほぼ出来た	どちらともいえない	あまり出来なかった	出来なかった
	1	3	1	2	1
3-3)生活環境	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	1	2	1	2	2
4.グローバル FD 研修（全般）					
4-1)研修全体を通じた印象は?	満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
	3	3	2		
4-2)研修に参加してスキルアップを図れたか？	出来た	ほぼ出来た	どちらともいえない	あまり出来なかった	出来なかった
	3	4	1		

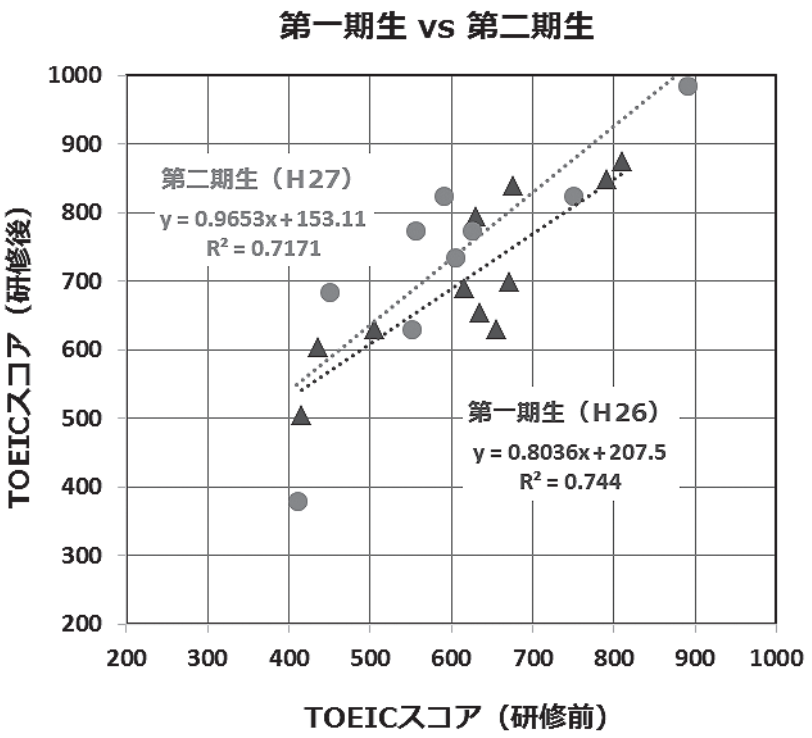
表５　グローバルＦＤ研修でスキルアップできた事項

受講者	英語で授業を行うためのスキルアップ	その他（研究，グローバルマインド，人間力等）
A	英語力そのもの	異文化交流を通してコミュニケーション力（文化の理解等言語以外も含む）
	態度や声の大きさ、アイコンタクトなどのプレゼン力全般の強化	異文化の相互理解について / 複合的な視野
	マレーシアで実際に英語で講義を行った経験を基にした今後への考察等	人的交流
		研究（豊橋、QCともに）
B	授業中の発問の仕方についてのパターンがわかった。	QC，USM，PSP，他高専などに人脈ができた
	授業中の学習活動（練習の機会）の作り方がわかった。	専門性や本気の趣味を持つことは世界中のどこに行っても役に立てられる。
	授業の最初に、その回の目標やベネフィットを伝えることに重要性がわかった。	英語のリスニング力が上がった。
	時間をかけて準備した２回分の英語授業資料ができた（ペナンでの授業資料）	
C	アメリカの大学において、授業を英語で受けることで自然な表現法を知ることができた。	英語を話すことに対する抵抗感が少なくなった。
	独学では正しく使えているか自信が持てない教室英語の使い方に自信が持てるようになった。	外国人に話しかけることに対する抵抗感がなくなった。
	語彙力、表現力が不足しているものの、英語で授業を行うことに不安がなくなった。	
	発音、イントネーションの改善につながった。	
	ニューヨーク生活を通してのメンタル面での改善がベースとなる語学力の向上につながった思う。	
D	教室英語表現	異文化理解
	授業設計	コミュニケーション力
	英語による教材作成	
E	英語教科（海事英語）を担当することとなり、英語のみの授業に取り組む。英語のみの資料や教科書、そして専門用語の英語化など、授業中には極力英語を使用する。	JICAによる国際理解教室開催（5月30日予定）、学生の国際交流意識を高める目的である。今後の国際交流活動や英語研修に挑む学生が増えてくるのを目指す。
	専門科目の一部を英語化することで英語授業への展開に挑む。英語が苦手な学生も自然に英語を身につけられるような環境を醸成していく。事前アンケート調査で学生の認識を把握しておく必要がある。	校内の留学生を利用した英語教育環境作りに努める。学生同士が自ら継続的に交流できるシステムを構築する。対外的な活動も含む。
	FD研修期間中に集めた英語学習ウェブサイトを学生のレベルに合わせて紹介していく。学生がすぐ馴染むようなウェブ教材を十分活用する。	教員の英語力向上のためにBritish CouncilのEnglish for Academicsの導入を検討する。主に英語の授業や英語による研究発表を意識している教員が対象で、今後の専攻科生の指導につながる。
	英語科教員のノウハウを学習する目的で、互いの授業を参観する。 Mini Peer Review 形式で授業の取り組み方について評価する（実施予定）。	海外派遣（とびたて留学、インターンシップ、ロボコンなど）に学生支援を行う。国内研究発表（ISATE2016）等に協力する（参加予定）。
		校内の英会話クラブの顧問として、国際交流活動（近所の小中学校や岩国の米軍基地など）を広げていく。
F	英語によるスライド作成方法	英語ライティング力
	英語による授業のための授業計画書の作成方法	英語リスニング力
	授業で必要になる英語力	他の高専教員、豊橋技術科学大学教員とのリレーションシップが構築できたこと
	効果的なプレゼンテーション、授業の方法	英語を毎日学習する習慣
		忍耐力
G	授業で使う英語	異文化理解
	語彙	
	インタラクション	

表６　グローバルＦＤ研修前後での英語スキルアップの定量的評価

ＦＤ研修者	TSST事前ﾃｽﾄ（3月）	**TOEIC（4月）**	TSST事後ﾃｽﾄ（6月）	QCｸﾗｽ分けﾃｽﾄ（7月）	TSST事後ﾃｽﾄ（3月）	**TOEIC（5月）**	**スコアup率**
	レベル	点数	レベル	レベル	レベル	点数	［%］
A	4	**450**	4	4	5	**685**	**52**
B	4	**555**	4	6	5	**775**	**40**
C	4	**625**	4	5	5	**775**	**24**
D	3	**670**	4	4	4	**(5/29受験予定)**	
E	4	**605**	5	4	5	**735**	**21**
F	4	**890**	5	7	5	**985**	**11**
G	5	**550**	5	5	7	**630**	**15**
H	4	**590**	5	5	5	**825**	**40**
I	4	**750**	4	6	5	**825**	**10**
J	3	**410**	3	3	4	**380**	**-7**





（3）職員グローバル人材育成力強化プログラム（短期 SD）

国立大学改革強化推進事業の一環として、本学、長岡技術科学大学、国立高等専門学校機構各高専の事務職員を対象に、英語を駆使した国際実務等の経験を積み、大学のグローバル化の担い手となる将来のリーダーとしての資質を高め、自発的な能力開発を促すことを目的とした、職員グローバル人材育成力強化プログラム（短期 SD）を平成25年度から継続的に実施している。毎年度研修参加者の意見を踏まえて改善を重ね、平成27年度では以下のとおり実施した。

＜派遣前研修（国内）＞

外部業者に委託し、12月中旬から１月中旬にかけて国内での派遣前研修を実施した。期間中は、国際儀礼基礎、国際会議運営、英語契約書取扱いに関する講習及び英文書簡・英会話に関するトレーニングを受講し、英会話能力の他、国際実務能力の向上を図ることができた。
本派遣前研修は、本学と長岡技術科学大学とを GI-net にて接続して遠隔地にて研修を実施した他、各高専からの研修参加者については、同内容の研修プログラムを東京の別会場にて集中的に実施した。

＜現地研修（ペナン）＞

研修参加者の英語レベルにより、ペナンへの派遣時期を１月期・２月期に分けて研修内容を調整し、以下のとおり現地研修（2 週間程度）を実施した。

［1 月期・2 月期共通］

現地の高等教育機関に委託し、1 週間の実践英会話研修を実施した。研修参加者は期間中に、ビジネスマナー、カスタマーサービス、プレゼンテーション等に関する講習を受講した。講習は全て英語にて行われ、研修参加者はそれぞれ業務上で英語を使う場面を想定したプログラムを通して、より実践的な英語能力を身に付けることができた。

また、マレーシア教育拠点（ペナン校）にて、ペナン校における国際実務を体験した他、国際業務に関するワークショップ、マレーシア文化に関する講義を受講した。

［1月期のみ（英語初級者向け）］

1月27日から29日にかけてEvergreen Laurel Hotel, Penangにて開催された国際会議IGNITE2016の会議運営事務支援を行った。期間中は、受付、VIPアテンド、全体会司会補佐、分科会のタイムキーパー等の業務を、マレーシア科学大学（USM）のスタッフと英語によりコミュニケーションを取りながら連携して執り行うことで、国際業務における柔軟性、即応性、判断力を身に付けることができた。

［2月期のみ（英語中級者向け）］

USMを訪問し、USM事務職員との意見交換を行った。意見交換は全て英語で行われ、研修参加者の所属部署・業務内容と関連する部署を各1時間程度訪問し、海外教育機関での業務と日本での業務との違い等に関する実態調査を行うことができた。さらに、学生寮、産学連携センター、研究センター等を視察し、海外大学における各種支援体制について知見を得た。また、ペナン校にて井上理事･副学長を交えて意見交換会を行い、日本の教育機関、特に三機関を取り巻くグローバル化の流れに関して見識を深めた。

【参考：SD研修参加者所属】本学：総務課総務係、総務課地域連携係、会計課出納係、研究支援課研究支援係、研究支援課産学連携係、教務課教務係、教務課キャリア教育支援係、学生課就職・学生相談係、国際課国際企画係、長岡技術科学大学：総務課総務係、総務課法規係、仙台高等専門学校：企画室、鶴岡工業高等専門学校：教育研究技術支援センター、岐阜工業高等専門学校：学生課教務係、豊田工業高等専門学校：技術部、鈴鹿工業高等専門学校：総務課人事給与係、和歌山工業高等専門学校：総務課総務・企画係、佐世保工業高等専門学校：総務課経理係、長野工業高等専門学校：総務課、釧路工業高等専門学校：教育研究支援センター、小山工業高等専門学校：総務課財務係、舞鶴工業高等専門学校：総務課財務係

（4）海外同窓生会議・交流会

海外における本学同窓生ネットワークを組織化し、交流活動を活発にすることを目的として、平成26年度に「TUT同窓会･海外支部設立準備会議」をマレーシアで開催した。この継続として､平成27年度は、平成27年10月30日（金）にタイ／バンコク、10月31日（土）にラオス／ヴィエンチャン、11月1日（日）にベトナム／ハノイ、平成28年2月27日（土）にインドネシア／バンドンの4各国／都市で会議を開催した。会議では、本学の現状の紹介、本学同窓会の現状の紹介（組織・活動の紹介、各国代表の紹介、Web名簿システムの紹介など）の後、各国の支部の設立、支部長の選任を行った。

また、これら会議の後に、タイ／バンコク、ラオス／ヴィエンチャン、ベトナム／ハノイでは、長岡技科大、高専機構及び本学で進めている三機関連携事業の支援の下、「三機関合同海外同窓生交流会」を開催した。インドネシア／バンドンについては、「豊橋技科大・高専機構」海外同窓生会議・交流会を開催した。

これらの会議･交流会には、本学海外同窓生の他、長岡技科大及び高専の海外同窓生、三機関の代表、

本学教員も参加し、今後の交流会の開催や、三機関同窓生ネットワークの構築等に関する意見交換を行った。交流会後の懇親会には、本学の教職員を含め、タイ／バンコクでは30名、ラオス／ヴィエンチャンでは30名、ベトナム／ハノイでは40名、インドネシア／バンドンでは25名がそれぞれ参加し、国内・海外同窓生間の親睦を深めた。

①「TUT 海外同窓会設立準備会」及び「三機関合同海外同窓生交流会」（タイ）

②「TUT 海外同窓会設立準備会」及び「三機関合同海外同窓生交流会」（ラオス）

③「TUT 海外同窓会設立準備会」及び「三機関合同海外同窓生交流会」（ベトナム）

④「TUT 海外同窓会設立準備会」及び「豊橋技科大・高専機構海外同窓生会議・交流会」（インドネシア）

2. 国内会議

(1) 国際教育センター（CIE）会議

平成27年４月～平成28年３月の間、毎月第２月曜日開催を原則とし、11回開催

(2) 三機関連携・教育改革推進室会議

開催日	場　所　等
平成27年４月23日	GI-net TV会議（＊）
平成27年６月25日	GI-net TV会議
平成27年７月23日	GI-net TV会議
平成27年９月29日	国立高等専門学校機構　竹橋オフィス
平成27年11月９日	豊橋技術科学大学
平成27年12月３日	国立高等専門学校機構　竹橋オフィス
平成28年１月14日	国立高等専門学校機構　竹橋オフィス
平成28年２月18日	GI-net TV会議
平成28年３月26日	長岡技術科学大学

＊GI-net：三機関の全国59拠点を高速通信専用回線で結ぶ遠隔講義・会議システム

(3) 三機関連携・海外展開検討部会・FD等検討部会（グローバル部会）合同会議

開催日	場　所　等
平成27年４月23日	GI-net TV会議
平成27年７月２日	GI-net TV会議
平成27年７月23日	GI-net TV会議
平成27年10月８日	GI-net TV会議
平成27年11月16日	GI-net TV会議
平成27年12月24日	GI-net TV会議
平成28年２月４日	GI-net TV会議
平成28年３月24日	GI-net TV会議

(4) 国際教育センター運営協議会

開催日	場　所　等
平成28年２月22日	一橋大学一橋講堂

3. マレーシア教育拠点（ペナン校）の活動

(1) 所在地等

・所在地　　3 Cantonment Road, 10350 Penang, Malaysia
・電話番号　　+60-4-226-6242
・ＦＡＸ　　+60-4-226-5755
・ホームページ　　http://ignite.tut.ac.jp/cie/penang/

ペナン校外観

(2) TUT-USM 協議会

＜第７回協議会＞

開 催 日：　平成27年５月25日
場　　所：　豊橋技術科学大学
議事次第：　1. Review of the previous minutes of meeting
2. Collaborative Programs
2.1 Student Internship with Industry
2.2 International Attachment for USM postgraduate students at TUT
3. Joint Research Collaboration updates
3.1 Microelectronics
3.2 Waste Management
3.3 Materials Science
3.4 Brain Science
3.5 Disaster Research and Transportation Research
4. Academic Collaboration including Exchange and Joint Program
4.1 Collaboration in Summer School Program
4.2 Joint Education Programs
4.3 USM researchers' attachment
5. Joint Talks/Seminars/Conferences and Other Activities
5.1 Conference-IGNITE2016
5.2 Prof. Kobayashi's Lecture in Penang
5.3 Collaboration in Faculty/Staff Development Program
6. Other Matters
6.1 Top Global University Project

6.2 Next meeting and others

出 席 者： ◆マレーシア科学大学（USM）

Prof. Dato' Dr. Omar Osman, Vice-Chancellor、Prof. Dato' Dr. Ahmad Shukri Mustapa Kamal, Deputy Vice-Chancellor, Academic & International Affairs、Prof. Dr. Ahmad Farhan Mohd Sadullah, Dean, School of Civil Engineering、Prof. Dr. Zaidi Mohd Ripin, Dean, School of Mechanical Engineering、Prof. Dr. Hanafi Ismail, Dean, School of Material & Mineral Resource Engineering、Prof. Dr. Mohd Zaid Bin Abdullah, Dean, School of Electrical & Electronics Engineering、Prof. Dr. Wan Ahmad Kamil Che Mahmood, Dean, School of Chemical Sciences、Mr. Fong Sew Khuan

◆豊橋技術科学大学（TUT）

井上光輝理事・副学長（学務担当）、大貝彰理事・副学長（総務担当）、松田厚範学長補佐／国際教育センター長、穂積直裕国際協力センター長、大門裕之国際交流センター長、若原昭浩電気・電子情報工学系長、中内茂樹情報・知能工学系長、柴田隆行機械工学系教授、髙嶋孝明国際協力センター教授、梅本実国際教育センター特任教授、浜島昭二国際交流センター特任教授、加藤茂建築・都市システム学系准教授、Lim Pang Boey 国際教育センター准教授、黒田清彦国際教育支援室長

＜第８回協議会＞

開 催 日： 平成27年10月12日

場　　所： ペナン校

議事次第： 1. Review of the previous minutes of meeting

2. Collaborative Programs

2.1 Student Internship with Industry

3. Joint Research Collaboration updates

3.1 Microelectronics

3.2 Waste Management

3.3 Brain Science

3.4 Disaster Research

4. Academic Collaboration including Exchange and Joint Programs

4.1 Collaboration in Summer School Programs

4.2 Joint Education Programs

5. Joint Talks/ Seminars/ Conferences and Other Activities

5.1 Conference-IGNITE 2016

5.2 The International Conference on Advanced info Concepts, Theory and Application (ICAICTA) in Penang 2016

5.3 Prof. Kobayashi's Lecture in Penang

5.4 TUT Faculty/Staff Development Program

6. Other Matters

6.1 Report on the Ambassador's summit

6.2 Date of the Council for the Promotion of Education and Research in Science and Technology

6.3 Next meeting and others

出 席 者： ◆マレーシア科学大学（USM）

Prof. Dato' See Ching Mey, Deputy Vice-Chancellor, Industry and Community Network、

Prof Madya Dr Lee Keat Teong, Director, Research Creativity and Management Office、Prof. Dr.Hanafi Ismail, Dean, School of Material & Mineral Resource Engineering、Associate Prof. Zainobia Lockman, School of Material & Mineral Resource Engineering、Associate Prof. Khairunisak Abdul Razak, School of Material & Mineral Resource Engineering、Associate Prof. Asulnizam Bin Abd Manaf,　School of Electrical & Electronics Engineering、Dr. Elmi Bin Abu Bakar, School of Aerospace Engineering、Mdm. Ajindar Kaur Banta Singh, Deputy Registrar, Division of Academic and International Affairs、Ms. Syazira Othman, Assistant Registrar, Division of Industry and Community Network、Ms. Nor Farah Shaik Omar, Assistant Registrar, Division of Academic and International Affairs

◆豊橋技術科学大学（TUT）

井上光輝理事・副学長（学務担当）、松田厚範学長補佐／国際教育センター長、中内茂樹情報・知能工学系長、齊藤大樹建築・都市システム学系教授、梅本実国際教育センター特任教授、Lim Pang Boey 国際教育センター准教授、柴富一孝国際教育センター（環境・生命工学系）准教授、Tan Wai Kian 国際教育センター特任助教、黒田清彦国際教育支援室長

＜第９回協議会＞

開 催 日：平成 28 年 1 月 27 日

場　　所：ペナン校

議事次第：

1. Review of the previous minutes of meeting
2. Collaborative Programs
   - 2.1 Student Internship with Industry
3. Joint Research Collaboration updates
   - 3.1 Microelectronics
   - 3.2 Waste Management
   - 3.3 Materials Science / Nanotechnology
   - 3.4 Brain Science
   - 3.5 Disaster Research
   - 3.6 Transportation Research
4. Academic Collaboration including Exchange and Joint Programs
   - 4.1 Collaboration in Summer School Programs
   - 4.2 Joint Education Programs
5. Joint Talks/ Seminars/ Conferences and Other Activities
   - 5.1 Conference-IGNITE 2016
   - 5.2 The 2015 International Conference on Advanced info Concepts, Theory And Application (ICAICTA 2016)
   - 5.3 Collaboration in Faculty/Staff Development Program
6. Other Matters
   - 6.1 Next meeting

出 席 者：

◆マレーシア科学大学（USM）

Prof. Dato’ See Ching Mey, Deputy Vice-Chancellor, Industry and Community Network、Prof Madya Dr Lee Keat Teong, Director, Research Creativity and Management Office、Prof. Dr.Hanafi Ismail, Dean, School of Material & Mineral Resource Engineering、

Associate Prof. Zainobia Lockman, School of Material & Mineral Resource Engineering、Associate Prof. Khairunisak Abdul Razak, School of Material & Mineral Resource Engineering、Associate Prof. Asulnizam Bin Abd Manaf, School of Electrical & Electronics Engineering、Dr. Elmi Bin Abu Bakar, School of Aerospace Engineering、Mdm. Ajindar Kaur Banta Singh, Deputy Registrar, Division of Academic and International Affairs、Ms. Syazira Othman, Assistant Registrar, Division of Industry and Community Network、Ms. Nor Farah Shaik Omar, Assistant Registrar, Division of Academic and International Affairs

◆豊橋技術科学大学（TUT）

井上光輝理事・副学長（学務担当）、松田厚範学長補佐／国際教育センター長、中内茂樹情報・知能工学系長、齊藤大樹建築・都市システム学系教授、梅本実国際教育センター特任教授、Lim Pang Boey 国際教育センター准教授、柴富一孝国際教育センター（環境・生命工学系）准教授、Tan Wai Kian 国際教育センター特任助教、黒田清彦国際教育支援室長

(3) The 3rd International Conference of Global Network for Innovative Technology (IGNITE2016)

平成28年（2016年）1月27日～１月29日に、以下のとおり、ペナンにおいて、The 3rd International Conference of Global Network for Innovative Technology（IGNITE2016）を開催した。本会議では，Plenary Lecture ５件，Keynote Lecture 11件，Technical Talk ３件，Tutorial Lecture ２件，一般口頭発表86件，ポスター発表102件，全209件の講演があった。

主催：豊橋技術科学大学（TUT），マレーシア科学大学（USM）
共催：長岡技術科学大学（NUT）、国立高等専門学校機構（NIT）
後援企業：Springer，Bruker，PerkinElmer
会場：Evergreen Laurel Hotel，Penang
プログラム：

＜１月27日（水）＞
- 8:45 ～ 9:00　開会挨拶
- 9:00 ～ 10:30　Plenary Lecture
- 10:30 ～ 17:15　口頭・ポスター発表

＜１月28日（木）＞
- 9:00 ～ 9:45　Plenary Lecture
- 9:45 ～ 17:15　口頭・ポスター発表
- 20:00 ～ 22:30　Banquet

＜１月29日（金）＞
- 9:00 ～ 10:30　Plenary Lecture
- 10:30 ～ 16:00　口頭・ポスター発表
- 16:00 ～ 16:30　閉会式

(4) ペナンだより

平成27年４月より，京兼純国際教育センター特任教授をペナン校へ派遣し，常駐教員としての現地での勤務を開始した。ペナンでの在任中，ペナン校における活動等を学内に報告する「ペナンだより」を

定期的に発行し，ペナン校に関する情報の周知を行った。

〇ペナンだより（第６号：平成27年４月30日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・４月８日（水)、京兼着任。黒田室長の出迎えを受ける。

・４月10日（金)、浜島国際交流センター特任教授、長尾電気・電子情報工学系教授、藤戸情報・知能工学系教授、Lim 国際教育センター准教授、黒田国際教育支援室長とで Disted College を訪問。TUT/Disted collaboration courses の枠組みについての打合せと、今後、当該 academic program の実現に向けた問題点の抽出などについて意見交換を行った。

・４月13日（月)、黒田室長、Angeline 氏とで USM の Dato’Susie 副学長へ就任挨拶と長期ビザについて情報交換を行う。午後、Politeknik Seberang Perai（PSP）へ訪問。 Ainlza binti Amin 副校長等４名と面談し、黒田室長から27年度の高専教員の名簿と昨年度実施した講義の総括、本年度の要望などを聞く。PSP からは Final Projects に関し、教員への支援・協力依頼があった。高専の教育活動を知って貰うため、高専機構が編集した広報ビデオを見ていただく。

・４月14日（火)、ペナン日本人学校の浦江校長を訪問し、黒田室長から TUT ペナン校に対する支援のお礼と離任の挨拶。京兼からは就任の挨拶後、高専教育に関する話題提供を行った。

・４月15日（水)、黒田室長、Angeline 氏とで東レを訪問。吉村社長、川勝部長、山村課長へ就任の挨拶と高専生のインターンシップの可能性について話をする。黒田室長から実務訓練のお礼と今後の展開に関し情報交換を行う。

・４月17日（金)、黒田室長と日本総領事館を訪問。野田総領事、谷口主席領事、寺本領事へ就任の挨拶を行い、黒田室長から TUT ペナン校に対する支援・協力のお礼と離任の挨拶があった。
Panasonic Automotive System へ訪問する。南部社長へ就任の挨拶と高専生のインターンシップの可能性について情報交換を行う。黒田室長から実務訓練のお礼と離任の挨拶があった。

・４月21日（火)、USM 日本語学科の副田先生に面会をし、就任の挨拶と共に各大学等が USM で実施している語学研修と交流事業について情報交換を行う。

・４月27日（月)、就任挨拶のため Sony EMCS を訪問。三水会会長の永井社長ら幹部４名と実務訓練などについて意見交換を行う。

・４月29日（水)、Sony EMCS の永井社長ら幹部２名（内、１名は KL からの人事課長）がペナン校を訪問。主に長期実務訓練と高専生の就職状況などについて意見交換を行う。

〇ペナンだより（第７号：平成27年５月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・５月４日（月)、USM の副田先生が来校。京都外大の特任教授となり USM で引き続き勤務し、東レの寄付建物に新しく作る Japan Center の責任者として業務するとのことであった。意見交換の内容は、インターンシップの状況、英語研修、日系企業ローカル社員の日本語研修、関西16大学（私学）の協働事業などであった。

・５月８日（金)、日精テクノロジー（株）の松木平社長へ就任の挨拶。技大生と高専生の実務訓練に関し依頼をする。当該企業は神戸に本社があり、スマホ、車載用等の高機能プラスチックレンズ類、精密ギヤ、デジカメ用機材などを作成し、現地従業員800名強の中堅企業である。

・５月９日（土)、第36回ペナン日本語弁論大会（於、Bayview Hotel）へ出席。日本語弁論大会の共催は、在ペナン日本総領事館、ペナン日本人会、国際交流基金、ペナン日本語協会である。参加者は高校の部と大学・一般の部にわかれ、それぞれの持ち味を生かしての Speech であった。

・５月18日（月）、Panasonic へ Angeline 氏と訪問。南部社長と橋口係長（総務・人事担当）で実務訓練について情報交換を行った。本年は２名まで受入れ可能で、訓練内容は昨年度と同様に進めていき、高専生に関しては技大生に準じて実施していきたいとのことであった。終了後、工場見学を行い南部社長から詳細な説明を受ける。
・５月21日（木）、日本総領事館の寺本領事の紹介で、Tech-Dome の Chung 氏と Leng 氏が概要説明に来校。主たる話の内容は、Tech-Dome への寄付の件と TUT が取り組み可能な協力関係についてである。また、Tech-Dome 側に TUT の広報ビデオを見てもらい、本学のグローバル展開と教育・研究状況などについて理解をしていただいた。
・５月22日（金）～23日（土）、Disted College の Graduation Dinner 及び Graduation Ceremony に招待され Lim 准教授と出席する。式典では Disted College の卒業証書と共に両大学所定のコースで単位を取った者に学士の称号が与えられていた。
・５月26日（火）、USM 副田先生、京都外大国際部・有田調査役、アジア連携推進室・松浦氏が来校。訪問の目的は、京都外大がペナン地区で展開していく予定の学生の語学研修、現地人を対象とした日本語教育、留学生確保について助言をいただきたいと云うことであった。本学からは現在まで実施してきたペナン校での各種行事と実績などについて説明し、グローバル化に向けた双方の取り組みについて意見交換を行った。
・５月28日（金）、長岡科学技術大学・斎藤副学長、赤穂市消防本部・木村主幹、Life Saving Society Malaysia の Lim 会長と Geh 代表が来校。三機関連携事業として水難ワークショップと「ういてまて」講習会を、ペナン校で開催したいとの要望と協力依頼があった。参加者はインドネシア、タイ、スリランカ、シンガポール、マレーシア、日本からで100名程度を見込んでいるとのことであった。
・５月31日（日）、日本人学校の大運動会の競技審査員として招待される。昼過ぎから激しい雨となり一時中断する。この間、浦江校長、野田総領事、日本人会会長・谷郷シャープ社長、同副会長・永井ソニー社長と日本人学校の状況やペナンのことなどについて情報交換を行う。皆さんからペナンを取り巻く環境や事情などについて示唆のある話を伺うことができた。雨も上がり父兄総出で運動場の整備を行い、中止をすることなく無事に終了でき、子供達の笑顔と紅白に分かれた大応援合戦で敗れた団長の顔が清々しさを感じた。

幼稚園児も参加し終始和やかな大運動会

○ペナンだより（第８号：平成27年６月30日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・６月１日（月）、高専機構本部から上月理事、松本国際交流副センター長、古旗学務係長が TUT ペナン校を視察。情報交換を行う。高専教員のグローバル FD 活動で実務訓練（英語による講義）をしている POLITEKNIK SEBERANG PERAI（PSP）へ移動し、Dr. HJ.Zulikifli bin Ariffin 学長以下、副学長、各学科長総勢10名から歓迎を受ける。意見交換では、主に PSP と高専機構との交流事業や高専教員の研修（特にファイナルプロジェクトの支援）などについて話し合い、終了後、主に電気系と機械系の施設・設備・機材関係の見学を行った。

PSP：Ariffin 学長（中央）等と

午後からは東レ（株）マレーシアを訪問。吉村裕司社長と村山翔課長で対応をしていただく。高専学生のインターンシップ及びシャアラムのマラ工科大学（UiTM）で開催予定の三機関連携事業・ISTS2015について情報交換を行う。SONY EMCS（株）マレーシアを訪問。永井茂雄社長、大塚茂樹工場長、平出佳治IT部門課長、松枝政頼人事課長等（5名）と高専機構との協力関係及びISTS2015への参加依頼などをお願いした。

・ 6月3日（水）～5(金)、高専機構本部の松本国際交流副センター長、古旗学務係長と共にバンコクへ出張。訪問先は泰日工業大学、タイ教育省（OVEC)、テクニカルカレッジ（Chonburi)、キングモンクット大学・ラカバン校（KMITL)、タマサート大学である。各大学では学長あるいは副学長（国際交流担当)、学部長など関係幹部教職員と意見交換、主に高専学生のインターンシップ事業（3ヶ月）とISTS2015協力依頼、国際交流事業に関すること、及び学内見学を行った。

・ 6月17日（水）～18日（金)、クアランプール（KL）へ出張。Malaysia Japan Higher Education Program（MJHEP）を訪問し、HAJI ABBA’AIN BIN JAFFAR学部長（明石高専から長岡技科大へ編入し学位を取得）と日本人教員5名とで、三機関連携事業、TUTペナン校での業務、グローバル展開などについて懇談を行う。懇談後、21日の学校説明会（本学から若原教授とTan特任助教が参加）やMJHEPから各大学への進路状況などについて話を聞く。学生は単位を多く認めてくれる私学へ流れる傾向にあるが、本学を希望する学生は目的意識を持ち優秀な成績を上げているとのことであった。
昼食後、MJHEPの永川先生（化学担当）と共に在マレーシア日本大使館を訪問し、黒沼一郎一等書記官（文科省派遣）と情報交換を行う。黒沼一等書記官へはTUTペナン校の現状と各種プログラムの進捗状況、今後の実施計画について説明した。また、3者でマレーシアの高等教育機関が抱えている諸問題や日本の援助などについて話し合った。

・ 6月18日（木)、マレーシア日本人商工会議所（JACTIM）＊を訪問し、久野幹太事務局長と面談。久野氏へは三機関連携とTUTペナン校の概要を説明した後、技大生と高専生のKL周辺での実務訓練の可能性と協力依頼を行う。
＊マレーシア日本人商工会議所（JACTIM）は、1983年に設立され日系企業の利益擁護及び会員相互の親睦を図りつつ、貿易、商業、産業及び投資活動等を通じ、日本とマレーシアの経済発展を促進することを目的にしている。また､JACTIMの下には､全会員参加によるJACTIM FOUNDATION（商工会議所基金）を設立し、マレーシアの経済面のみならず、文化・社会・教育等の分野に対する貢献活動を行い、日マ相互理解の促進による友好親善関係の強化を図っており、会員数は600名弱で推移している。組織としては、第1工業部会、第2工業部会、第3工業部会、貿易部会、金融部会、建設部会、流通サービス部会を持ち、地域部会としてペナン（含、ケダ州）地域部会、ジョホール地域部会、ペラ地域部会、マラッカ（含、ムアール）部会を擁し、現在の会長にはマレーシアパナソニック代表の岡本敏郎社長が就任している。(出典:JACTIMホームページより（一部抜粋))

・ 6月23日（火)、若原教授、Lim准教授、Angeline氏で学生の実務訓練（2ヶ月と6ヶ月）の依頼を行うため多国籍企業3社を訪問。Keysight Technologies：人事課長のTeoh Ewe Beng氏とマネージャーのCheah Kar Inさんが対応。TUTの概要と実務訓練などについて説明した後、VISA取得、訓練のレベル、教員との共同研究について意見交換を行った。Keysightからは現在実施している10週間のInternship Programの紹介があり、神戸工場の日本人スタッフ（吉良氏）を紹介される。
工場内を案内されて驚いたのは、社員に対する食堂を始めとする福利厚生施設が十二分に完備され、外資系企業の持つ経営哲学に準拠しているのか、工場内環境も美しく整備されており大変素晴しい状況となっていた。
引き続きISO TECHNOLOGYとOSRAM Opto Semiconductorsへ訪問。ISO TECHNOLOGYの対応者は工場

長のLim Guat Liさんら2名であり、懇談はKeysight Technologiesと同様であるが、学生の能力や企業への貢献などの質問があり、2ヶ月以上のインターンシップが望ましいとのことであった。OSRAM Opto Semiconductorsでは、R&IDirectorのDr.David Lacey氏、人事採用グループのNurfathin Mohd Nooor (Executive)氏、Suzalina Binti Chu Abu Bakar (Manager)氏ら4名が対応をしてくださった。今回、依頼をした6ヶ月のインターンシップに関しては、種々質問はあったものの前向きな回答が得られ、素晴らしい提案であるとDr. Lacey氏から言われ、今後、候補企業の一つとすることとした。

・ 6月24日（水)、Stephen Yeap氏が来校。Lim准教授と一緒にDisted Collegeと本学との進捗状況について、高専生の英語研修について話し合う。高専生の英語研修（対象は3年生の学生）の具体化に向けて、Yeap氏、Disted Collegeから 副学長のDr. Liew氏と担当教員2名、Lim准教授、京兼で意見交換を行い、Disted Collegeから台湾や韓国学生に対する研修プログラムに準拠した具体案を出していただくこととなった。

・ 6月25日（木)、IGNITE2016にかかるTUT & USM Teleconference Meetingに出席するため、Lim准教授、Angeline氏、京兼で USM Engineering Campus（Prof. Dr. Hanafi学部長）材料系教室を訪問。議題は、Venue for IGNITE2016, Program Schedule, USM Organizing Committee, Conference Scopes Othersに関することであり、各項目について了解を得た。

・ 6月29日（月)、一時帰国時に高専機構主催（於、学術総合センター大会議室）の全国高専校長・部長会議へ出席。会議は小畑理事長の挨拶、文科省からは北山専門教育課長、山路補佐から高専の状況を踏まえた挨拶の後、上月理事、紀理事、前田事務局長の報告があった。休憩を挟んで、5ブロック内で活発な議論が行われている検討課題及び今後の展望に関する報告、全体会議が行われた。当該会議の場を借りてTUTペナン校の紹介、グローバルFD活動、高専生のインターンシップと英語研修などの可能性について報告をした。

〇ペナンだより（第9号：平成27年7月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・ 7月1日（水）～ 8日（水)、一時帰国。帰国中の主な活動としては、大西学長、鈴木局長等と大学の戦略及びペナン校で業務展開、高専との関係強化などについて意見交換を行った。また井上理事と高専との更なる連携活動に関し情報交換を行い、それをもとに高専機構本部（上月理事、奈良高専・谷口校長等が出席）において、本学との協働教育を中心にした話し合いを持った。

・ 7月10日（金)、日本人学校で高専の進路説明会を実施。1年生から3年生の生徒全員と保護者を合わせ36名の参加があった。説明会の冒頭に浦江校長からTUTペナン校の紹介をしていただき、補足説明をした後、高専の概要及び卒業後の進路先としての本学の位置付けなどを交えて話を進めた。終了後には多くの質問が寄せられ、なかに高専を受験したい生徒がおり保護者と個別面談をし、詳細な説明を行った。

・ 7月15日（水)、Citi Hotelで開催されたペナン日本人会・商工部会（三水会）において「企業との協働教育による国際的技術者の育成」に関する講演を行った。講演内容は、本学や高専機構が取り組んでいるグローバルリーダーシップ養成事業と企業との連携についてである。会員企業からは48名の参加者があり、講演内容に関しては概ね好評を得る。また当日は、SHARP照明事業開発部（SHAH ALAM）部長の酒井邦哲氏から、工場やOffice内でのLED照明の開発動向と具体の設置例を交えて講演があった。

・ 7月25日（土)、日馬盆踊り大会の準備（本学の英文概要とパンフ類、うちわ、各種技大グッズ、長岡及び豊橋両技大・高専機構のPRビデオ再生モニターとパソコン設定など）を行い、16時から

市役所広場へ移動。本年は総領事館の厚意によりテント横のブースを借りることができ、本学と三機関事業関連の広報活動物品などを展示。盆踊り開催中は中・高校生を始め、イベント参加者（200強）の多くがブースを訪れた。

多くの人が訪れたブース

盆踊り開始頃は雨が降っていたが、途中であがり、日本人学校の児童による太鼓演奏で開会となり、琉球舞踊団の華やかな踊りが花を添え盛大な祭りとなった。TUT の関係者は揃いのハッピ姿で来場者の応対をした。

盆踊りのフィナーレは花火大会で、フィナーレを飾るにふさわしい豪華な花火が次々と打ち上げられ、延べ数万の来場者からは感嘆の声が上がっていた。

・ 7月31日（金）、名古屋市立高校生（商業・工業・総合学科コース）海外派遣団10名が、櫻井雅子校長、赤川浩一教諭に引率されて京都外大の副田先生（USM Knowledge Transfer Centre）と共に来校。ペナン校の小講義室を利用してマレーシア事情、本学の広報、三機関連携事業、グローバル人材養成などに関する研修を行った。

〇ペナンだより（第10号：平成27年８月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・ ８月３日（月）、京兼は三機関連携事業である国際シンポジウム ISTS（International Symposium on Technology for Sustainability）2015に参加するため、Shah Alam にあるマラ工科大学（UiTM）へ出張する。

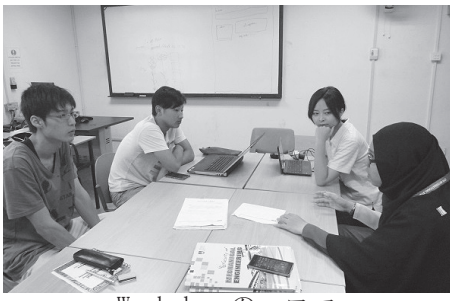
・ ８月４日（火）、梅本特任教授、若原教授、Tan 特任助教、Angeline 氏とで Robert Bosch を訪問し、２ヶ月と６ヶ月のインターンシップの可能性と本学の説明を行う。午後から PSDC を訪問し IGNITE2016 への協力依頼と講演（ポリマー及び半導体系）などについて意見交換をする。その後、Invest Penang を訪問し昨年度の実務訓練のお礼及び実務訓練中の学生の宿舎などに関する情報提供の依頼をした。

京兼は ISTS2015 の開会式に出席。マレーシア側は科学副大臣が、日本側は高専機構の小畑理事長が挨拶し、終了後は学生全員と集合写真を撮る。基調講演は、日本側は UMW トヨタ相談役の日比隆氏がトヨタの技術動向と国際戦略について、マレーシア側は科学大臣補佐官から科学技術の現状と今後の展望についてであった。午後からは ISTS2015 の講演発表とポスター発表を聞き、学生等と情報交換を行う。

・ ８月５日（水）、ISTS2015 にて UiTM の VIP ルームで高専機構の小畑理事長、長野高専黒田校長（理事）、井上副学長（理事）と京兼で三機関連携事業などについて懇談を行い、井上副学長へ UiTM の幹部職員と ISTS 実行委員会の高専関係者を紹介した。午後からは黒田校長、松本国際交流副センター長、井上副学長、京兼で高専機構、豊橋技大の状況と今後の対応、グローバル化などについて意見交換を行った。

・ ８月７日（金）、高専機構関係者が TUT ペナン校を訪問し、施設の見学を行う。

・ ８月10日（月）、マレーシア、タイ、インドネシア、日本（高専・両技大）の学生が主体となって取り組んできた ISTS2015（Part II）に参加するため Shah Alam の UiTM へ出張。Part II は学生達が企画したゴミ、交通、環境、エネルギー問題、


Workshop の一コマ

現地人の生活向上に関するFieldworkとWorkshopである。40グループ（4～5名）に分かれた学生達は、FieldworkとWorkshopで得られた結果をまとめ、ポスター発表を行い日馬の教員、企業関係者、Fieldworkで訪れた地域住民から審査とコメントを受けることとなっている。与えられる賞は、優秀賞、東レ賞、パナソニック賞であり、特に東レ賞は4名の学生に対し、東レマレーシア部長・川勝淳二氏から講評と共に賞状・記念品が手渡された。パナソニック賞は5名の学生に対し、マレーシアパナソニック総括責任者兼社長（JACTIM会長）の岡本敏郎氏（代理）から賞状とデジタルカメラ（5台）が渡された。

徳永氏と原教授との懇談

・8月20日（木）、マレーシア政府観光局・徳永氏及び豊田工業大学・原教授が来校。ペナン校における活動の概要と施設内容に関する説明を黒田室長と共に行った。豊田工業大学からは学生派遣プログラムなどの海外展開と取り組みについて説明があった。

○ペナンだより（第11、12合併号：平成27年10月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・ 9月9日（水）、北九州高専の塚本校長と高専学生（熊本、鹿児島）が来校し施設見学などを行う。

・ 9月11日（金）、グローバルサマースクール’15博士課程教育リーディングプログラム「ブレイン情報アーキテクトの育成」参加学生8名と塚田コーディネーターが来校する。参加学生は、来校前の1週間、USM医学部の学生達と共にPulau Bandingに住む村民に関する課題解決型（ITや脳科学などを用いた手法）のField Workを行ってきた。

・ 9月14日（月）、グローバルサマースクールが19日の発表会と閉会式まで1週間の予定で開始。ペナン校での活動は、すでにPulau Bandingで意気投合したUSMとTUTの学生等が英語による脳科学の講義を受け、またワークショップや脳を理解するための心理実験を共同で実施するなど、総合的なコミュニケーション能力の育成の場になっている。期間中は堅苦しいプログラムだけではなく、お互いの国の文化や食事などを紹介したり、歌等のレクリエーションを通して打ち解けたり、休日は一緒に世界遺産の街へ行くなどして終始和やかな雰囲気のもとでのサマースクールであった。本年のグローバルサマースクールには、朝日新聞出版社の記者（2名）がPulau Bandingまで同行して彼／彼女達の諸活動を取材し、それらの内容がアエラ（AERA）ムックに「未来を拓く博士たちー文部科学省博士課程教育リーディングプログラムー」として掲載された。

USMとTUTの教員による評価会

・ 9月20日（日）、鹿児島高専、北九州高専とペトロナス大学の学生と国際交流担当の教職員一行18名が来校。総括責任者は、平成26年度グローバルFD研修者の北九州高専・大川原先生であった。三機関連携事業とペナン校での諸活動、TUTの大学概要ビデオを見せPRを行った。ペトロナス大学からはTUTとの研究交流等に関し打診があった。

○ペナンだより（第13号：平成27年11月30日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・11月5日（木）、世界溺死（水難）防止会議＊（The World Conference on Drowning Prevention）とUITEMATE（ういてまて）2015がHotel Equatorialで開催される。これに合わせて、日本水難学

会長の長岡技術科学技大学（前副学長）の斎藤秀俊先生等一行７名が来校。自己紹介をした後、日本人学校（6 日開催）での「ういてまて」教室、ペナンゴルフクラブ（7 日開催）での Uitemate Instructor Training Course 2015「ういてまて」実務講習、ペナン校での３機関連携事業として位置付けている国際水難ワークショップ（8 日開催）に関する打ち合わせをした後、ワークショップの準備などを行う。

＊世界溺死（水難）防止会議は救助目線の会議となっているが、日本水難学会が目指すのは救助される側の skill を普及するためのワークショップである。世界標準では救助技術にばかりに目がいき、救助される人（側）の技術に考えが及んでおらず、欧米での手法は「スーパーマンシンドローム」と呼ばれている。特に日本を始め東南アジアでは、「欧米の救助技術を上から目線で強制されても助からない」と考えていたところに「浮いて救助を待つ方法」が入り始め、これを「子どもたちを中心に広めた方が速い」との認識が急拡大し、現在の活動となっている。特に日本では、3.11の三陸沖大地震（津波）の時、「ういてまて」で小学校の児童全員が助かったこともあり、急速に広がっている。

・11月６日（金)、水難学会一行７名と共に日本人学校を訪問。学校側の要望に沿った形で児童に対し､水難事故死防止策の実技講習「ういてまて教室」を低学年（1 年～３年）と高学年（4 年～６年）に分かれて実施した。子供達は着衣、水着、靴（サンダル)、ペットボトルなどを持ってプールに入り、指導者の助言に従って熱心に楽しく訓練をしていた。プールサイドには多くの保護者（母親）の姿があった。「ういてまて教室」の講習中、浦江校長と小林先生の日本人学校訪問に関するスケジュールと質問項目などについて再度情報交換を行う。この日は野田総領事から公邸での夕食会に招待され、水難学会一行７名と共に出席し、多様な話題で盛り上がった。

Uitemate Instructor Trainin

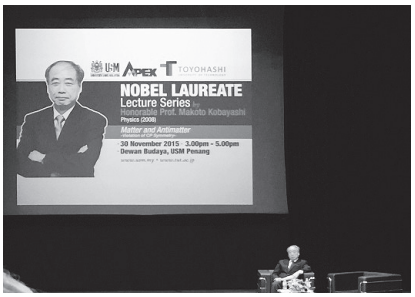
・11月７日（土)、ペナンゴルフクラブで国際水難学会主催の Uitemate Instructor Training Course 2015を開催。参加者は６ヶ国から約100名となっており、開会式では野田総領事から歓迎のご挨拶をいただく。午前中は各国の事例発表などがあり、午後からスイミングプールで水難学会の指導者による「ういてまて」実務訓練を行う。

・11月８日（日)、ペナン校での国際水難ワークショップ及び救急救命訓練を開催する。参加国は昨日に引き続きマレーシア、シンガポール、タイ、スリランカ、インドネシア、日本で、各国が抱えている問題点や取り組み状況などの発表があった。日本からも多くの講演があったが、なかでも長岡高専水泳部の学生５名による発表が印象に残った。救急救命訓練についてはシンガポールの代表者が話題提供とデモンストレーションを行った後、参加者全員がグループに分かれて訓練に臨んだ。

国際水難 WS（長岡高専生の発表）

・11月 30 日（月)、Magnetics and Optics Research International Symposium (MORIS2015) が、８ヶ国 120 名の参加のもとで開催される。Opening Remarks が井上実行委員長からあった後、午前中は Two Sessions (Energy Assisted Recording, Magneto-Optical Devices)、午後からは One Session (Advanced Measurements) 及び Poster Session が行われ、各 Session や Poster Session とも活発な質疑応答と討論などがあった。

午後からは USM にて Nobel Lecture（小林先生講演会）が開催された。講演会は300名強の聴衆で埋め尽くされており、「Matter and Antimatter -Violation of CP Symmetry-」について難解な数



式を用いて説明をされていたが、参加していた企業や日本人会関係者、教職員、学生達は熱心に聞き入っていた。講演後は、Shukri 副学長の的を射た司会により多くの質問が寄せられ、また大きな拍手の中で Omar 学長から記念品が贈呈された。

（左）USM での Novel Lecture

○ペナンだより（第14号：平成27年12月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・12月１日（火）、USM 国際交流室の Launching Ceremony of 10th International Week の開会式に参加。来賓は Austrian Embassy と Iran Embassy の教育文化担当者、Singapore の Shelton College International の教務部長等５名で、開会挨拶は Shukri 副学長がされ、日本を含めて10ヶ国からの参加があり、大変な賑わいを見せていた。

MORIS2015（午前中）は Short Presentation と Poster Session が行われ、午後からは Three Sessions（New Materials/Devices I & II, Magnonics）と Award Ceremony が実施された。講演期間中に小林先生がペナン校を訪問され、井上理事から MORIS の概要説明があり最終 Session 前で参加者に対し励ましのご挨拶をいただいた。Banquet は Evergreen Hotel で行われ、Angeline 氏がペナン校を代表して参加する。

本学主催の小林先生を囲んでの懇親会を Blue Mansion で開催。招待者は野田総領事、東レ吉村社長、ソニー永井社長、日本人学校浦江校長、宗日本人会事務局長で、本学からは井上理事･副学長、松田 CIE センター長をはじめ４名が出席し、USM での講演内容についての話題などで盛況な会となった。

・12月２日（月）、MORIS2015 は Three Sessions（Thermo-Magnetic Phenomena, Nano Magnetic Materials, Spin Sinamics）と Closing Remarks が実施された。

日本人学校講堂において小林先生の講演会を開催。講演会は子供達から集めた質問を中心にして Q&A 形式で行った。参加者は全児童生徒と保護者、教職員ら約 200 名で、講演後は小林先生を囲んでの記念撮影が行われた。子供達にとっては大変貴重な経験となり、素晴らしい記念になったものと思っている。

日本人学校での講演会

・12月３日（水）、高嶋教授、Tan 特任助教と共に Chung Ling 高校と Jit Sin 高校を訪問。Chung Ling 高校では保護者（4 家族）に対して豊橋技大の説明と留学などについて意見交換を、Jit Sin 高校では学校説明会の日程調整と学内見学を行った。

・12月７日（月）、松田 CIE センター長と共に Launching of Toray USM Knowledge transfer center の落成記念行事に参加する。記念式典には、VVIP としてマレーシア側から Dato’Seri Idris 高等教育大臣、Omar Osman USM 学長、Zulkefli A. Hassan 副学長が、日本側からは宮川真喜雄大使、東レ本社の日覺明廣社長、野田総領事、東レマレーシアの吉村社長が出席し、玄関前でのテープカット後、センター内の大ホール（約 100 名が出席）で式典が挙行された。Omar 学長の開会挨拶に続き、日覺社長、宮川大使、Idris 大臣の順で、各立場から今回の落成記念式にふさわしい挨拶とスピーチであった。記念品の贈呈後、２階から４階に展示している CETREE & GT、KTP、USM-STCN、APUCEN、UNIVERSITY-COMMUNITY、UCTC USM、RSEN、SEASN、YAYASAN USM、ALKN、LOCAL KNOWLEDGE

SECRETARIAT、KUFS-USM JAPANESE CULTURAL CENTRE、NUT-USM GIGAKU TECHNO PARK 関連のポスターや展示品について各担当者から説明を受けた。昼食会は別会場で和やかに行われ、終了後は京都外国語大学のオフィスを訪問し、これからの取り組みなどに関連した情報交換を行った。京都外大と長岡技大のリエゾンオフィスは隣り合わせで３階にあり、京都外大は主に現地の方を対象とした日本文化紹介と日本語学習などを行い、長岡技大は両大学の化学系教員が中心となりスーパーグローバル大学創成支援事業に関連したグローバル技学の展開を進めていくとのことであった。

・12月８日（火)、京都外大の熊谷俊樹副学長、国際交流室調査役・有田氏、副田先生が来校し、主にペナン校の見学と今後の協力関係などについて意見交換を行った。
・12月９日（水)、前USM職員でDr. Susie 副学長のもとで主に渉外を担っていたFong氏が来校し、ペナン校での業務などについて情報交換をする。
・12月24日（木)、マレーシア祝祭日（ムハンマド聖誕祭)。梅本特任教授とTan特任助教がインターンシップ学生指導のため、１月３日（日）から８日（金）までの間、ペナン校で滞在した。

○ペナンだより（第15号：平成28年１月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・１月４日（月)、梅本特任教授、Tan特任助教、Fong氏とで実務訓練学生の状況視察と今後の生活を快適にしつつ、かつ安全に過ごすことができるよう、近辺のショッピング街やレストランなどを紹介し種々の指導を行う。
・１月５日（火)、USMのInternational Officeで、実務訓練学生のオリエンテーション（1週間）が開始。梅本特任教授、Tan特任助教、Fong氏と共に参加する。梅本特任教授から開会の挨拶の後、USMとTUTの学生が自己紹介を行い、International Officeの担当者からマレーシアの歴史と状況、生活にあたっての諸注意、USMの概要について説明があった。

オリエンテーションの一コマ

・１月６日（水)、梅本特任教授、Lim准教授、Tan特任助教はUSMで実務訓練学生に対し、グローバル化対応と危機管理などの講義と各種指導を行う。
・１月７日（水)、日馬友好協会の元会長であるVallen Chew氏が挨拶のため来校。自身が運営しているAsia Itinerary Travel & Toursについて説明を受ける。JAGAM会長のOoi氏と副会長Tham氏が来校。梅本特任教授、Lim准教授、Tan特任助教（京兼同席）から実務訓練学生のHome Visitについて依頼をする。その後、TUTとの交流や日本への留学について意見交換を行う。
・１月11日（月)、本日から始まる実務訓練学生に対する通勤手段（公共交通機関利用）についてFong氏が朝から指導を行う。
・１月17日（日)、グローバルFD研修の高専教員一行８名が無事にペナンへ到着。Fong氏と共に出迎えてRECSAMへ案内。今後のスケジュールと諸施設の簡単な説明を行う。
・１月19日（火)、Angeline氏と共にグローバルFD教員がペナン校へ到着。午前中はペナン校での業務にあたってのオリエンテーションと使用法などについての説明を、午後からは小講義室を利用して講義の準備を始める。Disted Collegeにおいて第一次の三機関連携グローバルSDに関する英語研修が始まる。第一次の参加者は豊橋技大：６名、長岡技大：１名、高専機構：８名であり、英語研修後はペナン校で、マレーシアの歴史と事情などの講話を京兼から行う。

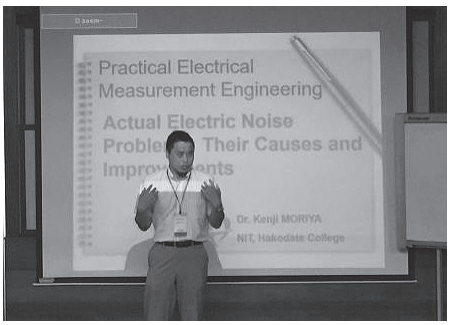
Disted Collegeでの英語研修（SD）

・１月22日（金）、グローバルSD研修をペナン校で実施。黒田室長から「高等教育機関での国際協力の様々なあり方と事務・技術職員」について講演をした後、京兼からは「大学・高専の職員としてグローバル化を推し進めるには、組織に対してどのように関わっていくか」についてワークショップ（WS）を行った。WSでは職員として何ができるかをグループワークで考え討議し、全体共有をして自分は何をするかを宣言文に書き、最後に一人一人宣言を読みあげて職場で引き続き頑張って欲しいと締めくくった。
・１月25日（月）、グローバルFD教員と梅本特任教授が高専生の英語研修に関し意見交換を行う。SD研修の午前は、黒田室長から「国際会議の進め方と英語文書の解説や書き方など」について講義を行う。午後からは、4班に分かれグループワークを実施。A班（5名）はIGNITE2016の準備、B班（4名）はTUT-USM協議会の準備、C班（3名）はペナン校関連の備品調達、D班（4名）は英会話自己研修に関する作業などを各々行い、全体共有をして終了。FD教員は引き続き、PSPでの講義資料作成とIGNITE2016での講演準備などを進める。
・１月26日（火）梅本特任教授、Tan特任助教、Fong氏と共にDAYAを訪問。実務訓練学生の指導者等と学生２名（マレーシア留学生）を交え、進捗状況について意見交換を行う。梅本特任教授、Tan特任助教はContinentalを訪問し、実務訓練学生の指導者等と日本人学生を交えて、これまでの進捗状況などについて意見交換を行う。
・１月27日（水）、IGNITE2016が開催され、SD研修者（7名）は受付業務などを行い、他の９名はFong氏の案内で、USMを訪問し諸施設を見学する。IGNITE参加の本学教員１名と学生４名及び明石高専・豊田高専教員３名がペナン校見学のため来校。ペナン校でTUT-USM協議会が開催された。当該協議会にはSD研修者がオブザーバー参加し、会議進行の補助を行う。
・１月28日（木）、SD研修者（8名）はIGNITEの受付業務などを行い、他の７名はFong氏の案内でUSMを訪問し諸施設などを見学する。IGNITE2016参加中の本学学生２名がペナン校見学のため来校。IGNITE2016 のBanquetが開催。開会式ではUSMのオマール学長、野田総領事、井上理事・副学長から挨拶がある。Banquetは200名強の参加があり盛大に実施された。
・１月29日（金）、SD研修者（A班）は２週間の研修について黒田室長の司会進行で、ペナン校において「ふりかえり」に関しグループ討論を行い、B班は引き続きIGNITE2016の支援業務を行う。IGNITE参加の鶴岡高専教員１名と学生１名がペナン校見学のため来校。午後からのSD研修は、A班とB班が入れ替わり同様な内容と業務を行う。IGNITE参加の本学教員２名と学生６名及び宇部高専教員２名がペナン校見学のため来校。
・１月30日（土）、ペナン校で実務訓練学生（12名）の中間報告会を開催。梅本特任教授から実務訓練の意義と中間報告で伝えるべきことなどを交えた挨拶の後、Tan特任助教の司会で一人10分（発表５分、質疑応答５分）の持ち時間で発表（英語）を行った。報告会にはIGNITE2016に参加している指導教員、グローバルFD研修中の高専教員など多くの教職員が参加し、活発な質疑応答があり学生にとっては有意義な中間発表会の場となった。

○ペナンだより（第16号：平成28年２月29日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・２月１日（月）、Politeknik Seberang Perai（PSP）でグローバルFD高専教員による実務訓練（英語による講義）が始まり、Fong氏と共に３名（森谷先生、Park先生、大沼先生）の講義を聞きに行った。学生は70名から120名ほど聴講に来ており、学生からも活発な質問があり大変盛況であった。



森谷先生による回路系分野の講義

また先生方は90分間、ほぼ淀みのない英語で講義をしていた。これまでの TUT と NYQC での研修成果が表れているようであった。

・２月５日（金）、水谷監事、菅谷係長と共に総領事館を表敬訪問し、野田総領事、寺本領事を交えて懇談をする。水谷監事からは豊橋技大の諸活動の支援に対するお礼などを、また寺本領事からはテックドームへの協力依頼があった。総領事館表敬訪問後、PSP へ移動。竹澤先生（舞鶴高専）のコンピューター工学関連の講義を見学する。長岡技大の佐藤先生、原田先生、高橋コーディネーターが来校し、Lim 准教授と一緒に新たに Toray-USM Knowledge Transfer Centre 内に設置される技学関連の Liaison Office について情報交換を行う。

水谷監事と菅谷係長からペナン校の管理運営、会計処理、安全管理、要望事項などについて監査があり、Lim 准教授、Angeline 氏、京兼が個別の対応をする。FD 高専教員へのアンケートの集計結果をもとに、水谷監事、８名の教員（京兼同席）とで話し合いを行う。各先生からは多くの事柄について率直な意見や要望などが出され、有意義な意見交換の場となった。

・２月８日（月）、中国の正月（春節）のためマレーシアは８日と９日が祝祭日。

・２月15日（月）、FD 高専教員の市川、竹澤、小林、三澤、朴の各先生はペナン校で業務を、森谷、大沼、柳沢の各先生は USM の Engineering Campus で担当教員と講義などの打ち合わせを行い、その後、ホテルの予約と周辺の視察を行う。第二次グローバル SD 研修への参加者が到着し、Fong 氏が出迎えに行く。小林先生が Disted College の学生（約 40 名）を対象にした人口問題と統計処理に関する講義を行う。PSP での経験が活かされてきているようであった。

・２月16日（火）、SD 研修者７名を対象とした Disted College での実践英語講習が開始される。

Disted College での実践英語講習後、ペナン校での研修の一環として SD 研修者に対し京兼から講話を行う。内容は我が国のグローバル展開、三機関連携事業とペナン校の役割、マレーシアの歴史と情勢などについてである。

・２月18日（木）、大阪府立大学高専の葭谷先生がペナン校での研修のため来校。梅本特任教授、Tan 特任助教、葭谷先生は実務訓練生の視察のため Ambu（建設系企業）を訪問し、訓練状況などについて担当者と意見交換を行う。FD 高専教員、葭谷先生、Fong 氏と共にパナソニックを訪問。南部社長から会社概要の説明を受けた後、工場見学、インターンシップなどについての意見交換を行う。梅本特任教授、Tan 特任助教は実務訓練生の視察のため ISO を訪問。SD 研修者に対しては小林会計課長から、グローバル化に向けて職員として求められる業務などについて講話がある。

・２月19日（金）、市川先生が Disted College の学生（約 60 名）を対象にした、数学（フラクタル次元とその応用）に関する講義を行う。井上理事、Lim 准教授、黒田室長が来校し SD 研修者７名と意見交換。梅本特任教授、Tan 特任助教、高専教員８名、葭谷先生、Fong 氏と共に東レを訪問。東レでは２班に分かれ、豊橋技大側は実務訓練学生の訓練状況などについてを指導担当の上司から、高専側は会社概要などを総務部長の川勝氏から各々説明を受ける。説明後は両者が合流し、工場・職場見学、各種の意見交換を行う。終了後、ソニー EMCE を訪問（参加者は同上）する。人事担当者から会社概要の説明を受け、工場見学、音響効果に関する体験などをした後、技大生や高専生の就職とインターンシップなどについての意見交換を行う。

海外実務訓練生の最終報告会

・２月20日（土）、平成27年度 第３回ペナン海外実務訓練生の最終報告会を開催。井上理事の開会の挨拶後、Tan 特任助教の司会進行で10名の学生が２か月間の業務内容と成果を報告し、梅本特任教授、Lim 准教授、高専教員からの質問やコメントにも適切に受け答えをしていた。報告会終了後は学生手作

りの料理で、お世話になった企業の方などを招き小宴を催し、皆さんと打ち解けた終始和やかなパーティーであった。

・２月22日（月）、FD 高専教員の森谷先生、柳澤先生、朴先生が Engineering Campus の電気系教室及び機械系教室で講義を実施。第二次グローバル SD 研修者（7 名）に対し、Fong 氏から USM での職場体験と職員との共同作業を実施するため、最低限必要な事項などについての講話（Introduction to Malaysia and USM）が行われた。午後は SD 研修者に対し京兼から「大学・高専の職員としてグローバル化を推し進めるには、組織に対してどのように関わっていくか」の題目でワークショップ(WS)を行った。WS では職員として何ができるかをグループワークで考え討議し、全体共有をして、自分は何をするかを宣言文に書いてもらった。最後に一人一人宣言を読みあげていただき、職場で引き続き頑張って欲しいと締めくくった。

・２月23日（火）、FD 高専教員の大沼先生、柳澤先生が Engineering Campus の電気系教室で、小林先生は Main Campus の数学系教室で講義を行う。Fong 氏が SD 研修者 7 名と一緒に USM の諸施設を訪問。

・２月24日（水）、FD 高専教員の森谷先生、朴先生は、Engineering Campus で電気系教室及び機械系教室で講義を実施。SD 研修者 7 名は USM での各職場体験の一環として、午前中は Human Affairs, Woman Research Center, International Office で担当教職員と、International Office では Buddy の学生 4 名を含めて意見交換を行う。各部門では常に軽食と飲み物､記念グッズが用意されていた。昼食後は Academic & Student Affairs 及び Alumnus Office で、各部門の担当教職員と Q&A 方式で情報交換を行う。

・２月25日（木）、FD 高専教員の大沼先生が Engineering Campus の電気系教室で講義。SD 研修者 7 名は Fong 氏と共に USM の Industry & Community Network Office、Human Transfer Centre を訪問し、教職員と意見交換。昼食後は Clinic（USM 病院）と産学交流機関として CReST などで情報交換をする。ペナン校へ帰校後は、3 日間の USM での業務などに関し「ふりかえり」を行う。

・２月26日（金）、FD 高専教員の朴先生は Engineering Campus の機械系教室で、市川先生と小林先生は Main Campus の数学系教室で各々講義を実施。SD 研修者は報告書作成等を行う。

〇ペナンだより（第17号：平成28年３月31日発行）

＜主要活動報告（抜粋）＞

・３月１日（火）、東レ -USM Knowledge Transfer Centre での長岡技術科学大学の Gigaku Techno Office の開所式へ Fong 氏と出席。9 時から長岡技大とマレーシア科学大学（USM）の化学・物理系分野の関係者によるセミナー（6 件の発表）があり、11時から Omar 学長（USM)、野田総領事、東レ吉村社長、東学長の挨拶、交流協定締結式、Office 前でのテープカットのあと懇談会が開催された。

・３月２日（水)、グローバル FD 教員（朴先生：大島商船高専）が Engineering Campus で講義。Chung Ling High School へ長尾教授、Lim 准教授、Tan 特任助教、Fong 氏と共に訪問し、高専生の英語研修と Education Fair について Soo Seng Poh 副校長、国際交流担当教員等と意見交換を行う。英語研修に関しては､すでに函館高専との交流実績がありスムーズに話を進めることができた。終了後、新規インターンシップ企業開拓のため全員で Arup Perumdng 社（UK に本社がある設計・建設系企業）を訪問し、本学と Arup Perumdng 社の概要などを各々説明した後、実務訓練について種々意見交換を行った。夕方からは Japan Graduates’Association of Malaysia(JAGAM) 副会長 Than 氏（長野高専出身）を交えて、実務訓練学生の Home Stay で大変お世話になったことへのお礼を述べ、本学と JAGAM との交流のあり方と SGU にかかる留学生の確保などに関し長尾教授、Lim 准教授、Tan 特任助教、京兼とで懇談を行う。

・３月３日（木）、長尾教授、Lim 准教授、Tan 特任助教、Fong 氏と共に Disted College を訪問し、Taiff 先生と主に学生が TUT へ来る前の６ヶ月間の学習（教科）、PTA-K テストなどについて情報交換を行った。その後、新規インターンシップ先企業として建設・土木系企業である MDC Concrete 及び Sumitomo Rubber（住友ゴム：宮本社長、石井課長）を長尾教授、Lim 准教授、Tan 特任助教、Fong 氏とで訪問。各企業で本学の概要と実務訓練の状況について説明を行い、学生のビザの問題、交通手段、宿舎の件などについて意見交換を行った。

・３月４日（金）、FD 教員（市川先生：東京高専）が Main Campus で講義を実施する。Politeknik Tuanku Sultanah Bahiyah（Politeknik Malaysia）（PTSB）の Mohd Noor 校長と教職員一行 10 名、University Teknologi Petronas（UTP）の Dr. Shahrum Kamauddin（機械系：准教授）先生等３名を含めた13名が来校。PTSB、本学、高専機構の学校概要などを各々の立場で説明した後、FD 研修、実務訓練、留学生受入れなど具体の交流と協力支援について話し合った。午後からは新規インターンシップ先企業として M.E.I. Project Engineers 及び IJM LAND（共に設計・建設系企業）を長尾教授、Lim 准教授、Tan 特任助教、Fong 氏と共に訪問。両社で本学の概要と実務訓練の状況などについて情報交換を行った。

グローバル FD 研修・修了式

・３月５日（土）、グローバル FD 研修の修了式を開催。柴田教授の司会で TUT、QC、ペナンでの研修等について意見交換とアンケートを実施した後、井上理事・副学長から本学研修者の、秋葉准教授、松井准教授、及び高専教員８名に修了証書を手渡した。その後、先生方を労って懇親会（B.Q.）を開催した。

・３月７日（月）、中央大学の鳥井教授とマレーシア観光局の徳永氏が来校。主に三機関連携事業の進捗状況、SGU にかかる本学の取り組み、留学生の確保、実務訓練、高専生の英語研修などについて情報交換を行う。

・３月９日（水）、新規インターンシップ先企業の開拓のため、Tan 特任助教が SEAGATE 社で実務訓練の状況について説明する。その後、Jit Sin high School を Lim 准教授と共に訪問し、新校長への挨拶、本学への進路説明、５月の Education Fair などについて意見交換を行う。

・３月10日（木）、Chung Ling High School（Butterworth）の Education Fair で Lim 准教授、Tan 特任助教、Fong 氏、Angeline 氏と共に参加。日本からはアジア文化協会（日本語学校）と本学が出展していた。他はマレーシアの大学や専門学校などで、本学のブースにも多くの生徒が集まり、Lim 准教授を中心にして大学概要と留学などに関する説明を行った。

・３月11日（金）、平成27年度日本人学校卒業証書授与式に招待され出席する。浦江校長から中学部卒業生８人の中に、東京高専と群馬高専に合格した２名の生徒がいると校長室で紹介される。卒業証書授与式後に保護者と会って祝辞を述べる。

Chung Ling High School（Kampung Baru）での Education Fair に Tan 特任助教、Fong 氏、Angeline 氏と共に参加する。ブースは約 80 用意されており、隣は早稲田大学。参加国も昨日の男女共学校と異なり、日本、台湾、香港、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、イギリス、ドイツ、ロシアと多彩な教育機関が出展しており大変盛況であった。本学のブースにも多くの生徒と保護者が詰めかけ、多様な質問があった。

・３月14日（月）、USM Engineering Campus で Workshop on Disaster Mitigation for Buildings and Structures（DMBS2016：代表 本学建築・都市システム学系 齊藤教授）が開催される。特別推薦学生15名と引率の Ryan 准教授、蒲原特任助教、萩原主任が来校。蒲原特任助教からの Orientation に

続き、「世界で求められるグローバル人材」で京兼から話題提供し、学生へは危機感を共有し頑張るようにと伝えた。Fong 氏からは「Introduction to Malaysia & USM」についてマレーシアの歴史と文化、日常生活、USM の状況などについての話があった。USM 学生一行15名が到着。各グループに分かれ自己紹介後、昼食会を行った。昼食は打ち解けた雰囲気であった。Ryan 准教授と蒲原特任助教の指導で Ice Break、Inspiration Game の後、6 グループに分かれ各自で考えたテーマで Work Shop を実施する。DMBS2016 へ参加した齊藤教授等 6 名が Lim 准教授と共に来校。ペナン校を見学した後、活動状況などについて説明。

Work Shop の様子

- 3 月15日（火）、特別推薦学生は 2 グループに分かれて、5 名の学生が USM 学生と一緒に Main Campus を、10名が Engineering Campus を訪問した。Main Campus は Chemical Dpt. Biological Dpt. Computer Science, Museum, Library で、Engineering Campus は Electrical & Electronics Dpt. Mechanical Dpt. Material Science を見学し、学生等と意見交換を行った。
- 3 月16日（水）、特別推薦学生は Ryan 准教授、蒲原特任助教、萩原主任、Angeline 氏と一緒に Mini Circuit 社を訪問し、現場見学と情報交換などを行った。午後からは Panasonic を訪問。南部社長からは「学生は元気いっぱいで多くの質問があり、従来に増して学生達にもいろいろと参考になったことと思っております」とのご報告をいただいた。ペナン校に帰ってから Ryan 准教授の司会で、学生一人ひとりから企業見学に対する感想などを聞き、振り返りを行った。2 時間ほど休憩をとった後、企業技術者との懇談会を開催。出席のあった企業は Panasonic(2 名)、Sony(2 名)、Toray(2 名)、Kao(1 名) で学生達と懇親を兼ねた意見交換会は大変盛り上がり、学生は海外展開をしている企業技術者の姿（状況）を見て、大いなる刺激を受け、大学へ帰った時には学習と研究活動など、今後の諸活動に活かしてくれるのではないかと思っている次第である。
- 3 月17日（木）、特別推薦学生は George Town の世界遺産を中心に研修を実施する。
- 3 月18日（金）、特推プログラムの最終日は、月曜日に実施した Work Shop での話し合いの結果を取りまとめ、テーマごとに日馬学生が交互に分担して発表する。午前中は次の 3 テーマ：マレーシアと日本の教育システム、同じく食文化、同様に CO2 排出に関する環境問題に関してであった。昼食はお互い慣れ親しみ和やか、かつ寛いだ雰囲気でとっていた。午後の発表は次の 3 テーマ：About Computer、マレーシアと日本の Traditional Custom、同じく Clothing Cultures に関してであった。特別推薦学生のペナン研修後の修了証書は、TUT と USM の学生がグループ毎に互いに渡すやり方で行われ、ペナン校での 1 週間のプログラムは成功裏のうちに終了した。学生は Fong 氏が付き添って USM の International Office へ行き、Home Stay の諸注意などを聞いた後、それぞれ目的の家へ向い、ホームステイを行った。修了証書は各々 TUT の学生へ USM の学生から、USM の学生へ TUT の学生から手渡した。
- 3 月19日（土）～ 20日（日）、特別推薦学生は各々の Home Stay 先の家族から歓待を受け、和気あいあいとして楽しく過ごす。日曜日の19時頃には全員元気で空港に集まり帰国の途についた。空港には Home Stay 先の USM の学生が見送りに来ていた。京兼は別便で一時帰国をする。

4. その他

(1) 小林誠先生（ノーベル物理学賞受賞）ペナン講演会等

小林誠先生（国立大学改革強化推進事業・技術科学教育研究推進協議会外部委員）が、USMの招へいで平成27年11月29日（日）～12月4日（金）にペナンに滞在された。国際教育センターとして、小林誠先生の講演会をはじめとした現地での活動をサポートした。

11月30日にはUSM Dewan Budayaにおいて、小林誠先生による「Matter and Anti-Matter -Violation of CP Symmetry」と題する英語での講演が約300名の聴衆の前で行われた。講演後会場から、未解決の物理学上課題への対応、高エネルギーを要する大規模加速器実験の国際協力の必要性等の質問が出され、小林先生が丁寧にお答えになった。

12月1日の午前中には、小林先生とUSM若手研究者・学生との意見交換会が開催された。午後には、ペナン校を視察され、開催中の国際会議MORISでご挨拶をしていただいた。夜には野田総領事を含む現地邦人関係者との懇談会が催された。

12月2日の午後には、ペナン日本人学校を訪問された。小学1年生から中学3年生までの全児童・生徒約150名及び教職員と保護者が体育館に集合し、事前に準備しておいた生徒からの質問（素粒子とは何か等）を小林先生に投げかけるという形式で講演会が行われた。生徒達は教科書に載っている先生が来られて、大いに感激していた。

小林先生御講演の様子

小林先生MORISで挨拶

(2) USM 2nd Ambassador Summit

平成27年9月11日（金）～9月13日（日）に、マレーシア科学大学（USM）にて「USM 2nd Ambassador Summit」が開催され、本学も参加した。Ambassador SummitはUSMが主催し、USMと外国政府代表者との高等教育に係る連携強化を目的としたイベントで、今回は、フランス、チェコ共和国、インド、インドネシア、バングラデシュ、デンマーク等から各国大使等が出席していた。本イベントでは、高等教育の発展等に関して、参加各国代表者やUSM研究者によるプレゼンテーション等が行われ、活発な議論が行われた。本学からは、松田国際教育センター長、Lim国際教育センター准教授、Tan国際教育センター特任助教及び黒田国際教育支援室長が参加し、本学とUSMとの交流状況等についての発表を行った。

(3) TORAY-USM Knowledge Transfer Centre 開所式

東レ（株）がメセナ活動の一環としてマレーシア科学大学（USM）本部敷地内に寄贈して建設中であったToray-USM Knowledge Transfer Centreが完成し、落成記念式典と諸行事が平成27年12月７日（月）に開催された。USMから松田国際教育センター長及び京兼国際教育センター特任教授（ペナン校駐在）が招待され出席した。

記念式典には、アレーシア側から Dato’Seri Haji Idris Bin Juson教育大臣、Omar Osman USM学長、Zulkefli A. Hassan USM副学長が、日本側からは宮川真喜雄大使、東レ（株）本社日覺明廣社長、野田龍二総領事､東レマレーシア吉村裕司社長が玄関前でのテープカット後､センター内の大ホール（約100名が出席）で式典が挙行された。Omar学長の開会挨拶に続き、日覺社長、宮川大使、Idris大臣の順で、各立場から今回の落成記念式典にふさわしいスピーチであった。記念品の贈呈後、参加者全員が2階から4階に展示しているUSMの産学協同事業関連ポスターや展示品について、各担当者から説明を受けた。昼食会後は、当該施設内の京都外国語大学・日本文化センターと長岡技術科学大学・グローバル技学オフィスを訪問し、今後の取り組みなどについて関係者と情報交換を行った。

Toray USM Knowledge Transfer Centre

松田CIEセンター長（左）、京兼特任教授

展示室の様子：左から宮川大使、Omar学長、Idris教育大臣

左から野田総領事、京兼特任教授、東レ川勝部長、東レ日覺社長、東レ出口専務取締役、松田CIEｾﾝﾀｰ長、東ﾚﾏﾚｰｼｱ吉村社長

5. CIE スタッフ一覧

氏　名	所　属　等
松　田　厚　範	CIE センター長（兼任）、電気・電子情報工学系教授
Lim　Pang　Boey	CIE 准教授（専任）、電気・電子情報工学系准教授（兼任）
梅　本　実	CIE 特任教授（専任）
京　兼　純	CIE 特任教授（専任）
Tan　Wai　Kian	CIE 特任教授（専任）
柴　田　隆　行	CIE 教授（兼任）、機械工学系教授
若　原　昭　浩	CIE 教授（兼任）、電気・電子情報工学系教授
岩　佐　精　二	CIE 教授（兼任）、環境・生命工学系教授
浜　島　昭　二	CIE 特任教授（兼任）、CIR 特任教授
高　木　宏　幸	CIE 准教授（兼任）、電気・電子情報工学系准教授
北　﨑　充　晃	CIE 准教授（兼任）、情報・知能工学系准教授
柴　富　一　孝	CIE 准教授（兼任）、環境・生命工学系准教授
澁　谷　晃	CIE 准教授（兼任）、ICCEED 准教授

＜事務担当＞

氏　名	所　属　等
中　田　尚　樹	国際課長（～平成27年４月30日）
田　中　基　久	国際課長事務取扱（平成27年５月１日～）
黒　田　清　彦	国際課国際教育支援室長
堤　雅美子	国際課国際教育支援室主任
山　田　敏　也	国際課国際教育支援室主任
仲　根　玲　子	国際課国際教育支援室事務補佐員

ＩＧＮＩＴＥの取り組み

1. IGNITE セミナー

IGNITE（グローバル工学教育推進機構）セミナー

【継続案件／対象：学内／内容：大学の国際化（グローバル人材育成、国際理解促進等）をテーマとしたセミナー開催】

本年度は８回（内６回は国際協力センター、内１回は国際交流センター、内１回は国際教育センターにより実施）セミナーを実施した。

【概要】

IGNITE セミナーは、国際情勢に詳しく、専門知識をもった講師を招き、主に本学の教職員・学生を対象に、途上国への協力に際し必要となる知識の向上、またグローバル化の進展に応じた国際競争力のある教育・研究体制を整えるために必要な情報提供等を目的として開催している。

▲セミナーの様子

【2015年度の活動】

■第１回 IGNITE セミナー「ドイツ Industry 4.0 の動向と日本企業への影響」（国際協力センター担当）

講師：株式会社デンソー　ダントツ工場推進部　テクニカルアドバイザー　小島　史夫　氏

日時：平成 27 年 6 月 19 日（金）　17：00 ～ 19：00

会場：豊橋技術科学大学　A 棟　208 教室

昨今、第４の産業革命として話題となっている Industry 4.0 に焦点を当て、モノづくりの体制・環境の変化、さらには日本に与える影響など、現地ドイツ視察の結果も踏まえつつ、多彩な写真、動画を交えて最新の動向を取り上げた。

本学学生・教職員・国際協力機関関係者を含め、計54名が参加。

■第２回 IGNITE セミナー「モノづくり企業の人材育成」（国際協力センター担当）

平成27年６月26日（金）、株式会社デンソー技研センターの協力を得て、本学教員･学生が、デンソーの技術者／技能者育成の場を実地に見学し、同社の先端的な取り組みを知るとともに、同社関係者との意見交換を通じて高度技術者育成の現状と課題について理解を深めた。

■第３回 IGNITE セミナー「国際ボランティアの紹介と体験談」（国際協力センター担当）

講師：青年海外協力隊 OB・OG　４名（パラグアイ（工作機械）・マダガスカル（村落開発普及員）・ヨルダン（コンピュータ技術）・ブータン（建築））

日時：平成27年７月10日（金）　17：00～19：00

会場：豊橋技術科学大学　A 棟　207教室

本学卒業生２名を含む青年海外協力隊経験者４名が派遣先での文化体験、生活をする際の苦労、帰国後の心境の変化等について発表した。

本学学生・教職員・国際協力機関関係者・一般の方を含め、計29名が参加し、参加者からは「青年海外協力隊の経験が、キャリアにどのような影響を与えるのか」等の就職に関する質問もあり、セミナー終了後、熱心にアドバイスをもらう学生がみられた。

■第４回 IGNITE セミナー　「イスラエルのハイテク産業の現状と三河版シリコンバレー構想」（国際協力センター担当）

講師：株式会社ジャパン 21　代表取締役社長　加藤　充　氏

会場：豊橋技術科学大学　A 棟　207教室

日時：平成27年７月16日（木）　16：20～17：50

普段なかなか触れることができないイスラエルの産業と起業の状況などと併せ、豊橋を中心とした三河地域を新規事業の集積地にしていく三河版シリコンバレー構想について、ご講演頂いた。

本学学生・教職員・一般参加者を含め、計37名が参加。

■第５回 IGNITE セミナー「ミャンマー人バイリンガルＩＴ技術者の育成と日本企業の国際化支援」（国際協力センター担当）

講師：グローバル イノベーション コンサルティング株式会社　代表取締役社長　岩永　智之　氏

会場：豊橋技術科学大学　A 棟　209教室

日時：平成27年10月８日（木）　16：20～17：50

ミャンマー進出支援のプロフェッショナルを招き、ミャンマーのバイリンガルＩＴ技術者に対する市場のニーズ、育成、ビジネスの注意点等について、セミナーを開催した。

本学学生・教職員・一般参加者を含め、計60名が参加。

■第６回 IGNITE セミナー「グローバル人材とは？～技術で世界を切り拓く７つの能力～」（国際教育センター担当）

講師：First Penguin　創立者　社会的責任推進人材育成コンサルタント　黄　麗容　博士

会場：豊橋技術科学大学　A 棟　209教室

日時：平成27年10月26日（木）　16：20～17：50

他民族･多文化のマレーシアに育ち、日本やアメリカ等で学業を修め、グローバル市場の最前線でキャリアを積んだ人材育成コンサルタントを講師に招き、「グローバル人材」とは具体的にどのような人物像を指すか、そしてグローバル人材に必要な考え方・能力についてご講演頂いた。

本学学生・教職員・一般参加者を含め、計 45 名が参加。

■第 7 回 IGNITE セミナー「大学と JICA との連携による国際教育協力を通じた開発途上国支援の現状と課題」―世界を知る日本人と途上国人材の育成―
（国際協力センター担当）

講師：名古屋大学名誉教授・農学国際教育協力研究センター　元教授　浅沼　修一氏
共催：先端農業・バイオリサーチセンター
会場：豊橋技術科学大学　A 棟　205 教室
日時：平成27年12月 1 日（ 火 ）　16：20～17：50

アフリカ等の開発途上国における食料自給率、農業生産の現状、政府、民間企業、大学等が連携した農学知的支援ネットワークによる研修、プロジェクトを通じた現地の人材育成支援について、セミナーを開催。本学学生・教職員・企業関係者を含め、計39名が参加した。

■第 8 回 IGNITE セミナー「ドンズー日本語学校の留学生送り出し事業と現地日本語教育について」
（国際交流センター担当）

講師：ドンズー日本語学校校長　Nguyen Duc Hoe（グエン・ドク・ホエ）氏
会場：豊橋技術科学大学　A 棟　109教室
日時：平成28年1 月13日（ 水 ）　14：40～16：10

平成28年 1 月13日（水）に、ベトナムのホーチミン市にあるドンズー日本語学校からグエン・ドク・ホエ 校長を講師にお迎えし、セミナーにてご講演をいただき、その後、意見交換会を開催した。

ホエ校長は、一年に数回、日本を訪問されている。今回は、その機会に合わせ、本学との一層の連携強化を目的としてお招きした。現在、ベトナムからの留学生は、本学で二番目（一番目はマレーシア）に多く、日本国内全体への留学生数は、アセアンの中でも群を抜いて多い。また、本学はベトナムではハノイ市ではなく、ホーチミン市との関係が深い。

セミナーには、本学のベトナム人留学生（ドンズー日本語学校卒業生）、教職員合わせて35名、学外からはドンズー日本語学校卒業生であり、本学の卒業生でもあるベトナム人留学生 1 名、その勤務先の上司 2 名の計38名が出席をした。

ホエ校長は、日本で学び、日本を見本としてベトナムを発展させることを目的とし、1991年にドンズー日本語学校を設立してから精力的に務められている。モットーは、「日本語はやさしい、たのしい、わかりやすい」である。学費の支援の必要性と日本語を大切にすべきと説かれた。また、学生に対しては、基礎教育を充実させ、努力ができる人間づくりの理念を話された。

意見交換会では、本学教員 7 名と、スーパーグローバル大学創成事業やグローバル技術科学アーキテクトコース（GAC）について議論を行った。日本語を大切に想い、日本語による教育を大切にされているホエ校長から、GAC に対する懸念と共に、多くのご意見をいただいた。GAC について、国外の方からのご意見を伺えたことは、いろいろと見直す良い機会となった。

IGNITE オープンフォーラム

【継続案件／対象：国内／内容：大学の国際化（グローバル人材育成、国際理解促進等）に関する学外フォーラム開催】

【概要】

本学オープンフォーラムは、平成14年度以降、国内外から多彩な講師を招いて毎年開催しており、主に工学教育国際協力に関する政策的・実践的側面に関する講演や議論を行ってきた。平成27年度も、平成26年度に引き続き、「大学の国際化」や「グローバル人材育成」など大学を取り巻く昨今の広範な課題に関連するテーマを取り上げて実施し、本学、大学関係者のみならず、地域の産業・企業関係者、中央政府、地方自治体等の多様な関係者の参加を得て開催し、昨今の有意な取り組みや潮流について紹介する機会にするとともに、講師･参加者間の議論を通じて相互に理解を深めることを目的として開催した。

【平成27年度の活動】

第14回目となる平成 27 年度はテーマを「アジアのモノづくり産業を支える高度産業人材の育成のために、我々は何をすべきか？」とし、アジアに展開する、中部・愛知・東三河の企業・産業界が抱える人材面（現地人材・特に上級技術者）の課題を明らかにし、その対策について産学官で考え、上級技術者に求められる要件も時代とともに変容している中、大学の最新の取組について紹介するとともに、産業界と大学それぞれが今後、注力していく事項と連携して取り組みことが望ましい事項、等について共に考える機会とし開催した。

■開催の狙い、進め方

①工業化が進展するアジアの開発途上国（先発 ASEAN 諸国など）における高度技術者育成の重要性と課題について考える。

②日本政府が進める、アジア産業人材育成イニシアティブについて理解を深める。

③抽出された課題に対して産学官の連携に具体的な取り組みを促進する上で考えるべき論点を整理。

■　開催日時：平成28年 3 月15日（火）13:30～17:00

■　開催場所：豊橋商工会議所 9 階大ホール（豊橋市）

■　後　　援：文部科学省、中部経済産業局、豊橋市、一般財団法人海外産業人材育成協会（HIDA）、一般社団法人中部経済連合会、公益財団法人あいち産業振興機構、東三河広域経済連合会、浜松商工会議所、湖西商工会、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター、独立行政法人国立高等専門学校機構、国立大学法人長岡技術科学大学（順不同）

■　出席者数：産業界・企業、大学、国際協力関係機関・団体等より約60名

■　以下、全体

【第 1 部】

(1) 基調講演：「海外展開企業の現状と人材面での課題について」（約40分）

小島　史夫　氏（一般財団法人海外産業人材育成協会（HIDA）　特別技術顧問）

①産業のグローバル化に関する最新状況（Industry4.0 や IoT 等のトレンド等を含む）も踏まえつつ、日本の産業界として新たな時代の競争環境の中で引き続き主要な役割を担うためにどのような取り組みが求められているのか、特に高度技術者育成の課題を中心に問題提起を頂いた。

②上記の課題認識のうち、展開先である ASEAN の高度技術者育成のための新たな仕組み作りのために

は、わが国産官学による協働が重要である点について指摘。

(2) 講演：「泰日工業大学の事例について」(約20分)

下大澤　祐二　氏（一般財団法人海外産業人材育成協会（HIDA）　理事）

①産業人材育成を担う高等教育機関である、タイの泰日工業大学の設立の経緯及び同大学の現在の取り組み、特に産業界との連携について、紹介頂いた。

(3) 施策紹介：「産業人材育成関連施策の紹介　～海外高度人材育成・外国人活用等～」(約20分)

中川　浩之　氏（中部経済産業局地域経済部　地域人材政策室長）

①政府の産業人材育成関連施策について紹介。

【第２部】

パネル・ディスカッション「協働・共創による新たな展開（約75分）

（パネリスト：HIDA 特別技術顧問　小島氏、 HIDA 理事　下大澤氏、 株式会社トヨテック代表取締役社長　小野喜明氏、 独立行政法人国際協力機構（JICA）産業開発・公共政策部　民間セクターグループ第一チーム　課長　田中伸一氏、 進行：穂積直裕 ICCEED センター長・教授）

以下の論点についてパネリストより意見をだしてもらい、フロアとの間で質疑応答を行った。参加者全体の理解を深め、具体的な連携に向けた効果的な場となった。

①高度技術者育成の重要性について

②取り組むべき課題について

→　以下の事項を中心に、企業・産業界で取り組むべきこと（出来ること、役割）及び大学に期待される役割等について意見交換を行った。

－　日本国内で出来ること（留学生受け入れ、研修の実施など）

－　現地で行うべきこと（仕組作りの重要性等について言及、具体的にどうすべきなのか検討）

－　大学の関連活動（昨今の取り組み）について紹介

③今後の産官学の連携のあり方について

→　日本政府の進める「産業人材育成支援イニシアティブ」とも連動した具体的な取り組みに向けて議論を深めた。

▲オープンフォーラムの様子

3. オープンキャンパス

26年度までは国際交流センターのみの参加であったが、27年度より、グローバル工学教育推進機構（IGNITE）として参加した。実施項目等については以下の通りである。

日時：平成27年８月22日（土）

オープンキャンパス全体　9：30 受付開始　16：00 終了

IGNITE　10：00 開始　15：00 終了

実施項目：

① TOEIC に挑戦＆映画を楽しもう

② 世界の文化に触れてみよう（世界遺産の DVD 上映、世界のお金、水かけ祭り）

③ 技科大のグローバル化（ポスターとパンフレットの展示、DVD による活動紹介）

オープンキャンパス総来場者数：2,940名（H26：2,630名、H25：2,490名、H24：2,260名）

IGNITE イベント参加者総数：189名　（H26：222名、H25：170名、H24：241名）

当日参加教職員：

CIR：大門、桂田、村松、鈴木、蒲原、アルバイト学生１名、ICCEED：澁谷、余語、CIE：タン、国際課：萩原

当日の様子：

TOEIC に挑戦＆映画鑑賞

世界のお金クイズ

水かけ祭り

IGNITE の活動紹介の展

4. グローバル工学教育推進機構（IGNITE）委員会委員・IGNITE 構成員・国際課職員

■グローバル工学教育推進機構委員会委員

委員長	理事・副学長	井上　光輝
副委員長	教授	松本　明彦
国際協力センター長	教授	穂積　直裕
国際交流センター長	教授	大門　裕之
国際教育センター長	教授	松田　厚範
機械工学系	准教授	安井　利明
電気・電子情報工学系	教授	長尾　雅行
情報・知能工学系	教授	関野　秀男
環境・生命工学系	准教授	田中　照通
建築・都市システム学系	准教授	渋澤　博幸
総合教育院	准教授	中森　康之
国際交流会館主事	准教授	桂田　浩一
国際協力センター	教授	高嶋　孝明
国際協力センター	准教授	澁谷　　晃
国際教育センター	准教授	Lim Pang Boey
国際課	国際課長	中田　尚樹（～H27/4まで）
国際課	国際課長事務取扱	田中　基久（H27/5～）

■グローバル工学教育推進機構構成員

機構長	井上　光輝
副機構長、国際協力センター長・教授（電気・電子情報工学系兼務）	穂積　直裕
副機構長、国際教育センター長・教授（兼務）（電気・電子情報工学系）	松田　厚範
国際交流センター長・教授　（環境・生命工学系兼務）	大門　裕之
国際協力センター・教授	高嶋　孝明
教授　（兼務）（建築・都市システム学系）	井上　隆信
教授　（兼務）（情報メディア基盤センター）	井佐原　均
教授　（兼務）（知能・情報工学系）	中内　茂樹
准教授（国際教育センター兼務　H26/7/1 ～）	澁谷　　晃
准教授（兼務）（機械工学系）	関下　信正
特任助教	余語　豊彦
国際交流センター・特任教授（国際教育センター兼務　H26/11/1 ～）	浜島　昭二
准教授　（知能・情報工学系兼務）	桂田　浩一
准教授	村松　由起子
准教授	吉村　弓子

	准教授	Ryan Eugene
	特任助教	蒲原　弘継
	助手	鈴木　聖子
国際教育センター・	特任教授	梅本　　実
	特任教授	京兼　　純
	教授　（兼務）（機械工学系）	柴田　隆行
	教授　（兼務）（電気・電子情報工学系）	若原　昭浩
	教授　（兼務）（環境・生命工学系）	岩佐　精二
	准教授（電気・電子情報工学系兼務）	Lim Pang Boey
	准教授（兼務）（電気・電子情報工学系）	高木　宏幸
	准教授（兼務）（知能・情報工学系）	北崎　充晃
	准教授（兼務）（環境・生命工学系）	柴富　一孝
	特任助教	Tan Wai Kian

■国際課職員（平成27年４月～平成28年３月）

国際課長		中田　尚樹	(H25/4/1 着任～H27/4/30 転出)
国際課長事務取扱		田中　基久	(H27/5/1 着任)
国際企画係	係長	與語　貴生	(H27/4/1 着任)
	係員	市川　麻衣子	(H25/10/1 着任)
	事務補佐員	鹿子嶋　味佐子	(H25/4/1 着任)
	事務補佐員	河村　修見	(H25/4/1 着任)
	事務補佐員	城本　美乃里	(H21/1/1 着任)
	事務補佐員	浦本　　咲	(H26/8/18 着任)
留学生係	係長	福村　　静	(H27/4/1 着任)
	主任	栗田　多映子	(H25/9/1 着任)
	主任	萩原　孝明	(H26/9/1 着任)
	係員	梁瀬　美紀	(H24/9/1 着任)
	特命事務職員	村田　もえ	(H20/4/1 着任)
	特命事務職員	河合　智子	(H26/1/1 着任)
	特命事務職員	松本　智枝	(H27/3/19 着任)
	事務補佐員	村越　朱美	(H25/10/1 着任～H27/12/31 退職)
	事務補佐員	田口　悠里	(H25/12/1 着任)
国際教育支援室	室長・国際教育係長	黒田　清彦	(H25/7/1 着任)
	特命事務職員（PO）		
	専門職員	丸山　憲洋	(H27/4/1 着任)
	主任	堤　雅美子	(H27/4/1 着任)

	主任	山田　敏也	(H25/10/1 着任)
	事務補佐員	仲根　玲子	(H25/7/1 着任)
	事務補佐員	行成　美佐	(H26/11/1 着任)
	事務補佐員	平松　明子	(H27/3/1 着任)
国際交流会館	技能補佐員	高橋　佳子	(H25/4/15 着任)

国立大学法人豊橋技術科学大学
グローバル工学教育推進機構（IGNITE）
国際協力センター（ICCEED）
国際交流センター（CIR）
国際教育センター（CIE）

2015年度（平成27年度）活動報告書

2016年（平成28年）9月

編集・発行　豊橋技術科学大学　グローバル工学教育推進機構

〒441-8580　愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1－1
TEL　(0532)44-6938
FAX　(0532)44-6935
E-Mail　master@icceed.ignite.tut.ac.jp